
ユグドラシルの樹の下で

paiちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ユグドラシルの樹の下で

【Nコード】

N7642Y

【作者名】

paiちゃん

【あらすじ】

俺の姉貴は1歳違いで隣に住んでいる。本当の兄弟じゃないけど、生まれたときから世話になってるらしい。そんな姉貴には密かな願いがあったようだ。異世界で暮らしたいって、そんな願いに俺は巻き込まれてしまった。さらには、異世界には危険が一杯って・・・なんでそんなの持つて来るんだよ。っていうか、何処で手に入れた！・・・まあ、異世界なら仕方ないかなって俺も流されてるし・・・とりあえず姉貴と2人でなんとかこの世界で暮していかないと・・・こんな決心で異世界暮らしを始める男の子の物語です。

俺の姉貴

小さな焚き火の前に座った俺に、姉貴は「はい！」ってカップを差出した。

夜の森は静かで、何の物音も聞こえない。

時折、薪のはぜる音がパチパチと小さく聞こえる。

隣で、カップのコーヒーをフーフー息を吹きかけながら飲んでいる姉貴を見ると、俺の視線を感じたのか、此方を見て微笑んでいる。全く余裕があると言うか、無頓着と言おうか・・・

そもそも、こんな所で焚き火をしている原因となつたのも姉貴のせいだと思ってしまう。

昨日の夕方、家に来たかと思つたら、「明日は、キノコ狩りだよ！」と言つて帰つていった。

それからが大変だった。

とりあえずザックを取出し中身をぶちまけて再度詰め直す。

エマジエンシーキット、緊急薬品、非常食、携帯調理用の鍋と食器、シエラカップに固形燃料・・・

さらに、マルチプライヤー、ナイフ、軍用水筒、そして着替え1式と予備の圧縮下着1式だ。

これだけ詰め込むとパンパンにザックが膨らむが、まだ、ポケットがある。そこに、お菓子を入れると準備完了だ。

玄関にGブーツを出しておき、部屋に戻ると、枕元に着ていく物を準備する。

ジーンズにGシャツ、トレーナーそれに厚手のソックスを畳んで置く。

最後に押入れの奥から、山菜採取用の鎌を取出す。

樫の杖だ。上部はネジが切っており、其処に鎌をねじ込むが、何と鎌は鍛造品、鎌と言うより鳶口を削つて刃を付けたような形状だ

が、山菜取り用と言ついい訳ではしょうがない。

次の日、朝6時に起きて朝食のパンをコーヒード流し込み玄関先で待つことしばし、トコトコと姉貴が同じような服装で現れた。

同じような服装には理由がある。

俺の服は、下着に至るまで姉貴の趣味で、姉貴が購入したものだ。

「はい。これをお願いね！」ってお金を渡す俺の母にも問題はあ
るのだが・・・

背負ったザックは俺よりも大型だ。

と言うことは、今回もとんでもない物を持って来たという事だ。

とんでもない物とは、組立て式の大型コンポジットクロスボー
ある。

「野犬は嫌い！」って言ってたが、あれで撃ったら野犬程度では
貫通するぞ！全く・・・

2人で小さな町並みを抜け、裏山の山道を登って行く。

キノコが近場にあるはずが無い。近場のキノコは老人の楽しみ。

俺達は更に上の山中を目指す。

途中の展望台で休憩を取ると、更に山道を登って行く。

道は次第に細くなり、終には獣道となる。それでも先に進む。軍
用コンパスと地図があれば現状位置の確定は可能だ。この手の訓練
は小学生時代からのオリエンテーリング大会で十分訓練を積んでい
る。

「あつた！」

姉貴が籠を振り回してはしゃいでいる。

見ると、大きな山栗の木がある。下には沢山のイガグリが落ちて
いた。

早速、イガグリをブーツで器用に剥きながら山栗をゲットする。数十個拾ったところで、再び獣道を進む。そして、日当たりの良い斜面で本命のキノコを取ることにした。キノコは日当たりが良い場所には生えない。そんな場所の何時も木の陰になっっているような場所に生えてくるのだ。10個程取ったところで、姉貴の籠を覗く。沢山あるのだが・・・毒キノコが殆どだ。丁寧に鑑別して毒キノコを除いたところに俺が取ってきたキノコを入れる。

時計を見ると、昼を過ぎてている。

姉貴が作った大きなオニギリを木陰で並んで食べる。

そして、さあ帰ろうかという時に、異変に気がついた。

太陽が雲に隠れ、山の下の方から霧がかかって来た。

急いで荷物を担いで山を下りる。しかし、道は獣道・・・何時しか異なる方角に進んでいることに気がついた。

昨夜の天気予報では今日は晴れのはずだ。朝からの日差しが原因であれば、さほど時をかけずに霧は晴れるはず。風が出れば更に早まる。

歩き続けて少し開けた場所を見つけたので、此処で休むことにする。

帰りが遅くなっても、姉貴と一緒にならば両親は心配しない。姉貴の家でもそうだ。ここは、動かずに霧が晴れるのを待つのが得策と考える。

霧は、時を経ても晴れる様子が無い。かえって濃密さが増している。

小さな焚き火を作ると、姉貴が簡単な夕食を作りはじめた。

姉貴は実の姉ではない。隣に住む矢上家の娘だ。俺と1歳程上になるが、俺が生まれた時から世話になったようだ。

俺の発した初めての言葉が「オネーター」だったらしい。ある意味、姉貴のオモチャ同然ではあったようだが、俺が歩き始めると常に付きまとい、面倒を見てくれたらしい。

矢上家は姉貴とお爺さんの2人暮らしで、お爺さんは合気道の道場を自宅で開いている。物心が付くか否かの頃から、姉貴と稽古をしていたようだ。

中学生になると直ぐに黒袴の資格を得て、今は年少組の指導までするようになった。

姉貴はさらに上を行って、中学生の指導をしている。さすがに、高校生以上の組については師範が指導しているが、このまま稽古を続けると卒業と同時に師範の資格を得ることが出来そう。

道場では、亜流ではあるが杖術として、4尺の杖を使った攻撃方法がある。これも、半ば強制的にお爺ちゃんに仕込まれた。

姉貴は高校生になると、合気道部ではなくバイトに勤しんだ。俺が高校に入ると半ば強引に付き合わされた。コンビニのバイトである。

バイトの給料は、全て変な装備に費やされた。日本の法規制を全く無視した調達網を姉貴は知っているらしい・・・道場に通っている変な外人にコネがあるみたいだ。

おかげで、海外の特殊部隊装備品が手に入ったが、こんな日本ですどするの？っていうような物ばかり・・・刃渡り40cmのグールナイフなんて押入れに入れとくしかないが、今日は、ザックに収まっている。

こんな、怪しい2人だが、町の警察官には結構受けがいい。

それは、コンビニのバイトで強盗を2件撃退しているからだ。しかし2件とも警察以外に救急車が必要となった。

最初の強盗は、姉貴が投げ飛ばした先にあるガラスドアを破ってガラスによる腹部裂傷・・・もう少して失血死だったらしい。

2度目は、俺の床モップによる攻撃で、鎖骨損傷、肋骨骨折となった次第である。

両方とも、正当防衛で処理されたが、やり過ぎないように嚴重注意を受けた上で、感謝状を頂いた。

今朝も、この格好で巡回の警察官と会ったが、姉貴の「キノコ取りに行くの！」に「気を付けて行けよ。野犬に注意してな！」という事で、済んでいる。

しかし、この霧は異常だ。夜になりさらに濃密さが増している。小さな焚き火に照らされた数mの空間のみが存在しているようにも感じる。

肩に重みを感じる。どうやら姉貴はエマジエンシートに包まって眠り込んだらしい。いつの間にか、姉貴を小さく感じるようになったが、それでも姉貴は170cmはある。俺が、180cm迄背が伸びたからなのか・・・

ガサ・・・ガサ・・・と何かが近づく音がする。
殺気は感じないが用心の為に、杖を直ぐ脇に寄せた。

茂みからガサリという音と共に現れたのは、小さな老人の姿をしていた。

しかし、老人が身に纏っているのは、着古した着物のようなものである。古木の杖について焚き火に近づくと、俺の対面の地べたに座る。

ジツとしている姿は苔生した石仏のようだ。

害がなさそうなのでほっておくことにした。触らぬ神に祟りは無

いって言っし。

「我を敬う者の子孫たる娘の願いを聞くことにした。．．お前の意思は知らねど、同行させる。お前達に与えるものは3つ、老いと病を防ぎ、言葉の理解、それに若干の体力向上．．娘の願い通り慎ましく生きよ．．」

一方的に話を終えると、立ち上がり霧の中に消えていく。
白昼夢？にしては、現実的だ。現に、老人の座った場所は草が倒れている。

ということとは、この霧は先ほどの老人の仕業とも考えられる。
俺達を迷わせ、此処へ導き、引導を渡す．．．ってことか。
ともあれ、明けない夜はない。明日にはこの霧も晴れるだろう。

霧が晴れて

どうやら朝になったようだ。

霧の明るさが増してきたが、見通しの悪さは、昨日のとおり周囲数m程度の見通し距離だ。

昨夜の怪異は幻だったのだろうか・・時間が経てば経つほどに、現実味が無くなってきている。

「おはよう！」

姉貴の能天気な声が、静寂の中ではやけに大きく聞こえる。

「おはよう。姉さん・・未だ霧が晴れないからしばらくは動けないよ。」

「そうだね。」って言いながら、ザックの中をぐそぐそと漁っている。

やがて、昨日のオニギリの残りを取出して、焚き火の隅に放り込んだ。俺のザックからはトレッキング用の鍋を取出し水筒の水を入れて熾火にかける。

そんな姉貴を見ながら、昨夜の老人の話をしていると、突然姉貴は俺に振り返った。

「少しその話は当ってるかも・・矢上家の古い名前はヤマガミと言うのよ。・・（この辺の山岳信仰を一体化した山神の神官だった）と、お爺ちゃんが言ってたのを覚えてるわ。」

姉貴はそう言いながら焚き火から、オニギリを取出し、ホイルを剥くと鍋に放り込んで、お味噌をニューっとチューブから取出すと鍋に入れてかき回している。

少しづつ霧が薄らいできた。もう、周囲10m以上は確認できる。回りを見てる内に、小さな苔生した祠を見つけた。

何となく、昨夜の老人の姿にも見える。そういえば、老人の消えた方向は祠の方向と同じだ。

「はい！」って姉貴が、雑炊モドキをカップに入れて渡してくれる。

薄ら寒い状態で食べる熱い雑炊はとりあえず体を温めてくれる。

「アキト・・・食べながらで良いから、聞いてくれる？」

俺は、先割れスプーンを口に入れながら頷いた。

「昨夜ね、変な夢を見たの・・・変よね。私は寝ていなかたもの。」

いや、十分にお休みでした。と姉貴には言えないのが辛い。

9

「老人が・・・ぼろぼろの着物みたいなものを着た小さな老人が出てきて、言ったのよ・・・望みを叶えてあげる。って、それじゃあって事で、老いず、病にかからず、どんな言葉も理解できるようにって、言ったんだけど・・・どうやって確かめたらいいと思う？」

ちよつと待て、今の話ってさっき俺が話したこととリンクしてるじゃないか・・・待てよ・・・もっと重要なことがあったような・・・そうだ、「同行させる」だ。これってどこかに誰かと行くという時に使う言葉だぞ。

「・・・あの・・・姉さん・・・ひょっとして（どこかに行きたい。）って考えたことあるの？」

「あら！・・・良く知ってるわね。・・・偶に思うのよ。（自分達の

力だけで暮らしてみたい。」ってね。」

何気に2人称であることが気にはなつたが、ここはスルーしよう。朝日のせいか霧が更に晴れていく、もう100m程度先まで見通せる状態にまで回復した。

焚き火を頼りに野宿した場所は、20m程の小さな広場だった。先ほどの祠を祭った址なのだろう。踏み固められているためか木々がこの場所には生えないようだ。

周辺の木々は緑に覆われ・・・？
ちよつと待て！・・・今は秋だぞ！

・・・確かに生い茂っている。季節的には初夏の様相だ。
俺達が来た獣道を探すが何処にも見当たらない。いくら獣道と言つても痕跡すら無くなるはずはない。

懸命に探すか、広場の周囲にはやはり痕跡は無かった。
霧は薄れてはいるが未だ遠くの山並みまでは見えてこない。現在位置を特定して、下山する方角を探すとするか。

ようやく、遠くの山並みが薄く霧を通して見えるようになった。
しかし・・・ここは何処だ？

全く見覚えの無い山並みが聳えている。一番高い山は富士山のようにも見える。

「如何したの。アキト？」

呆然と立ち尽くす俺を見上げて、姉貴が訝しげに声をかけた。

「俺達の裏山じゃない！」

俺の声に、姉貴も立ち上がると周辺の山並みを見る。

「・・・何処だろね？」

実に気の抜ける問いではあるが、2人とも見覚えの無い場所だとすれば、此処は何処なのだろう。

「ギョエー・・・」

おかしな声で鳴く鳥が俺達の上を飛んでいく。
雉のように見えなくもないが・・・雉はあんなに空高く飛び回るこ
とは無い。

「アキト・・・ひよっとして、だけど・・・此処は、私達と違う世界
かも・・・」

それは、俺も考えていた・・・しかし、それを言ったら姉貴が不安
になるかもと、言えない言葉ではあったが・・・姉貴もそう考えるな
ら、此処は、間違いなく異世界ってことになる。

ガサガサ・・・と音がして向かい側の藪からちいさな動物が姿を現
した。

しきりに小さな頭を動かすと俺達に気付いたのか、藪の中に飛び
込んでいった。

「見た！」

姉貴は、驚いた顔で俺を見る。

さっきの動物は、よく見る野うさぎのようだったが、長い耳の変
わりに角が頭の両側から生えていたのだ。ウサギとは違う動物かも
しれないが、角の長さで生えてる位置がウサギの耳のように見えた。
・
・

「見た！・・・でも、見たこと無い・・・」

あんなのがいたら、パンダ以上の珍種だ。しかも俺の町の裏山に
いるなんて聞いたことも無い。

やはり、姉貴の言うように・・・此処は異世界。・・・そして、俺は

姉貴の望みのままに異世界に同行してしまった・・・ということになるのだろうか。

姉貴がザックの中からクロスボウを取出して組立て始める。肩当のついた台座の左右にカーボン繊維で作られた弓を取付け、先端の滑車に弦を張っていく。

ショルダーバックのような矢筒を首から肩に通して持つと、最後にバックの中から、短刀を取出してベルトに差す。

「ほらほら・・・アキトも準備をする！」

姉貴の行動をあっけに取られて見ていたが、その声で我に返った。ザックの中からグルカナ이프を取出し、ジーンズのベルトを緩めてナイフケースを腰の後ろになるようにベルトにしっかりと取付けた。

姉貴を見ると、山菜鎌の鎌を取外して、クナイを柄の先端に取付けている。

ホントに何処まで武器マニアなんだか・・・

「最後はこれね！」

姉貴がザックの中から包みを2つ取出す。

そして大きいほうの包みを俺に差出した。

大きめの赤いバンダナに包まれた物はずしりとした重量がある。バンダナを解いて、現れた物は・・・

「美月姉さん・・・これは、何処で手に入れたのでしょうか？」

現れた物は拳銃だった。しかも、M29の改造品・・・

俗に熊でも一発で倒せるって言う、マグナム44リボルバーだ。

しかも、バレルは7インチ・ガン・スミス特注品と見た。

「バイト、3ヶ月分よ。凄いでしょ。私のはこれね。」

そう言っつて膝のバンドナを解くと、現れたのはM36の4インチモデル・やはり特注品だ。

「美月姉さん・日本では、これを持ってないような気がするんだけど・何処で手に入れたの？」

「アレックさんに頼んだら、簡単に買ってきてくれたわよ。」

あの外人・只者ではないと思っていたが・やはり外交官だったのか。

（南の島で泳ごう！）って誘われて行った先がグアム・

安宿宿泊かと思つたら、海軍基地の兵舎に泊めてもらった。

そして、昼はひたすら射撃訓練。夜になってようやく泳ぐことができた。

おかげで、南の島に4日も滞在したのに日焼けせずに帰って来れた。

それを、昨年から何度となく繰り返していた・

ちよつと、待て・そうすると姉貴は此処に来る前から、この日が来ることを知っていた事になる。

装備が増えた事で全体のバランスを取るために、サスペンダーがついた装備ベルトを取出して武器の取付け位置を変更する。

装備ベルトにM29のホルスターを取付ける。グルカナイフは柄が肩位置に来るようにサスペンダーの肩当後方に固定した。最後に、44マグナム実包が6個づつ入った2つのポーチをホルスターの両側に付ければ、今度こそ準備終了だ。

「姉さん・・・ひよっとしていただけど・・・此処に来ることが解つてたの？」

姉貴は、ベルトにレスキュー用の大型ポーチを取付けていたが、俺の問いにこちらを見た。

「・・・解つてたわ。・・・あの老人は今まで、何度も現れた・・・どうやら、この世界を去るみたいで、縁者の私の願いをずっと聞いてくれた・・・私達だけで家のしがらみも無く暮らしたい・・・そしたら、叶えてやるうって・・・」

「・・・姉さんだけじゃ不安だし・・・しかたないか。」

他人だけど・・・生まれたときから一緒に居る姉貴と別れるのは願ひ下げだ。

姉貴に交際を申し込んだ相手には何時も言っている。

「俺を越えたら認めてやる！」

おかげで、姉貴が高校へ入学して以来、毎月のようにヤサ男をボロボコにしている。

今の俺がこうしているのも姉貴のおかげだし・・・ある意味、姉を超えた感情も少しはあるような気がしないでもない・・・

「アキトならそう言つと思つてたわ。・・・じゃあ、出かけましょう！」

姉貴は、もう残り火だけになった焚き火を足で踏み潰すと、ザックを肩に藪の中へ進んで行く。

俺も、急いでザックを取上げ姉貴の後について行った。

知らない世界

道の無い山中を歩くのは容易ではない。

見知らぬ山なら尚更だ。

山裾と思われる方向に藪を払いながら進んで行く。

俺の前に道は無い。俺の後ろには道はある。という状態だ。

途中の沢で、小休止を取る。冷たい水で顔を洗うと頭までスツキリする。

残り少なくなった水筒に水を補給して、再び下山を始めた。

急斜面の山肌を何度か下りる内に、傾斜を殆ど感じない場所まで来た。

深い森の中を歩いている感じた。

時折、ギャーっという変な声で鳴く鳥達が頭上を飛び交い、何度か猪のような獣（大きな牙が左右に2本づつはえていた）を遠くに見かけた。

「だいぶ、歩きやすくなったね。」

「うん。でも、この森・何処まで続くんだろ？」

「歩いてれば、その内出られるわよ。コンパス見ながら同じ方向に進んでるんだから。」

山や森で遭難する原因の一つに方向を見失うことが上げられる。

岩や立木を迂回する内に、方向が判らなくなるのだ。俺達は常に一方向、南に向かって進んでいる。

時計の時刻で昼を知り、岩の上で携帯食料を食べる。

固形燃料でお湯を沸かし、コーヒーを作って姉貴と分けて飲む。

「・・・ご免ね。」

「誤る事なんかないよ。良く俺を選んでくれたって感謝したいくらいだし・・・姉さんとは・・・離れたくないし・・・」

いきなり、俺は姉貴に抱きつかれた・・・しかし、此処は岩の上、此処でそんな風に抱きつかれると・・・物理の法則は正しいもので・・・ドシン！と下の藪に2人とも落っこちてしまった。

「・・・ご免ね！」

赤い顔で、とっさに体を入替えて下敷きになった俺から体を離していく。

とりあえず俺は立上がり、店開きした装備をザックに押込み、森の中をまた歩き出す。

今度は姉貴が先頭だ。

姉貴の長い丈のGシャツの背にはザックとクロスボーが乗っている。

あのザックには、分解したクロスボーと2丁のハンドガンそれに弾薬ポーチが入っていたはずだが、それを取り除いた状態であるのにザックはまだ膨らんでいる・・・謎だ。

森の巨木を避けるように姉貴が先導する。

たまに、手元を見るのは、コンパスで方向の確認をするためだろう。

1時間程度歩いていると、前方が少しづつ開けてきた。

立木も細くなり、間隔も次第にまばらになったが、逆に藪が深まったような気がする。

そして、突然に前方が開けた。
草原に出たのだ。

低い段丘がずっと南に続いている。

東と西の景色も森と草原であり、振りかえれば2000m級の山並みが連なり、その奥には、富士山のようにも見える一際高い山が鎮座している。

人家は確認できない。広い視野の中に畑らしきものも存在せず、煙も見えない・・・

「・・・姉さん・・・何も無いみたいだけど・・・」

「・・・そうでもないみたいよ・・・立木に薪取りした痕跡があるわ。」

姉貴は、いつの間にか取出した小型双眼鏡で広い草原を監視していた。

手渡してくれた双眼鏡で確認すると、確かに鋭利な刃物で枝を切取った跡が見える。

200m程東のその場所に俺達は向かうことにした。

草原の草は見た事が無い草だったが、草丈が20cm程であり、歩くのには余り支障にはならず、数分で問題の立木までたどり着いた。

確かに、誰かが意図的に枝を切取っている。

周囲を見ると、森の中に踏み固められた小道が続いており、所々の立木に薪取りの跡が見える。

「誰かいるみたいね・・・」

姉貴の呟きに俺は首を縦に振る。

異世界の住人・・・俺達と同じような姿なのだろうか・・・それとも、目が3つとか、手の代わりに触手が付いてるとか・・・

「たぶん、私達と同じような姿だと思うよ、ほら！」

姉貴の指差した地面には靴の跡があった。

靴跡は、足の大きさが15cm程であり、30cm程度の間隔で交互に続いている。2足歩行をする者で、靴を文化として持っていることが判る。

でも、この大きさだと子供ぐらいじゃないか・・・ガリバー旅行記が頭の中に過ぎる・・・
子供位の背丈が標準なら俺達は十分に巨人だ。

さらに草原を注意深く見ると、東に向かって草が踏まれている場所があった。

森は小道を形成していたが、草原では草の勢いが強く、小道までには至らないみたいだ。

姉貴は先に行きたかったようだが、草原に獣がいなくても限らない。
い。

薪の心配が無い森の傍らで今夜も野宿することにした。

2人並んで焚火を見つめる。

携帯食料をコーヒードリッパーで流し込むと、後は明日まで交代しながら焚火の番をすることになる。

「姉さん・・・ちょっと、気になることがあるんだけど・・・聞いていい？」

「なあーにかな！」

「姉さんのザック・・・いろんな物を出してもまだ膨らんでるのは

何故かな・・・って？」

「それはね・・・このザックが魔法のザックだからなの！・・・10倍入っても、重さは15分の1・・・いいでしょ。」

「それと、先に言っておくけどアキトの銃とポーチも魔法がかかっているわ。だから壊れることはないわ。弾も1日で6発補充されるし・・・」

「あまり撃てないってことだね・・・解った。」

だったら、おれのザックもそうしてくれ！と言いたいところだけど我慢するの男の子だって言い聞かされてる。

銃が壊れずに使えることは嬉しい限りだ。1日で撃てる数は最大で18発。しかし次の日は6発になる。M29の威力を考えると大型の獣が対象となる。とりあえず逃げることにすれば、それほど使用する機会は無いだろう。

「はい！」

姉貴が薄い銀色のケースを俺に渡してくれた。

横に小さな突起がある。

突起を押すと、ケースが開き・・・中に5本のタバコが入っていた。

「内緒にしてるみたいだけど・・・知ってるのよ・・・沢山は入ってないけど、1日にその本数なら許してあげるから。」

ちょっと気まずい思いではあったが、「ありがと！」と返事をし、早速1本を取出して、焚火から枝を取って火を付ける。

ぷかーっつと煙を吐出すのを面白そうに見ていた姉貴は、ザックから小さな袋を取出すとキャンディを1つ口に入れた。

「気分転換を図ってくれるものは必要だねー。」

知らない世界に姉貴と2人で、誰にも会わず2日を過ごしていたことで、確かに少しナーバスになっていたかも知れない。

少し前向きになる必要がありそうだ。

明日は、草原の道らしきものを辿り、人家を見つけよう。薪取りをする以上、火を使う者であるはずだし、切口を見た限りでは金属を加工する技術を持っていることが判る。

原始人ではなく、少しは文明を持った者に合えるかもしれない。そして、俺達を受入れてくれるなら、何の問題もない。

何時の間にか姉貴が寝入っている。

肩に掛かる重みも近頃は気にならない。満天の星空に小さな2つの月が見えている。

どちらも半月だが、寄添うように空に浮かぶ月は俺達2人のようだ。

後、月が30度程移動したら姉貴と交代してもらおう・・・と思い、この世界で2本目になるタバコに火を付けた。

ミアとの出会い

次の朝、草原に残された草の僅かな踏跡を手がかりに東に向かった。

草原の短い草丈のおかげで見通しは良いが、相変わらず人家等は見つからなかった。

突然、先を進んでいた姉貴が立止まると腰を落とし、俺に片手で腰を落とすように合図した。

四つん這いのような姿勢で姉貴に近づくと、双眼鏡を渡され、指先で確認方向を示される。

レンズが捉えたものは・・・犬のような獣の数頭の群れであった。しかも、鋭く長い牙を持っている。

種類はかなり違うけれど、サーベルタイガーの犬バージョンって感じだ。

「此方が、風下みたいだね。まだ、気付いていない・・・」

「大きさは、近所の太郎ぐらいだと思っただけど・・・獰猛みたいよ。」

太郎は近所の老犬だ。確かシェパードの雑種とか聞いたことがある。

今となっては怖くないが、小学生の時は怖くて前を通れずに、姉貴の後に隠れて通っていた。

ここは、触らぬ神に祟り無しという言葉通りに・・・ゆっくりと姿勢を低くして進むことにした。

しばらく、四つん這いで進んでいると、草がきれた場所に出る。

道のようだ。

少しづつ立上がり辺りを見渡す。

誰もいないし・・・さっきの犬モドキも姿を消している。

道の北方向は森に続いており、南方向は草原に続いている。

俺達が辿ってきた踏跡も、どうやらこの道から分かれていたようだ。

「こっちだね。」

姉貴は再び草原に向かって歩き出した。

慌てて姉貴の後を追う。

草原を歩くより歩きよい・・・確かにこれは道だ。森を離れないように緩やかなカーブを描いて東に続いており、尾根を一つ迂回するようにも感じられる。

「キヤーーーー!!」

突然、かん高い悲鳴が聞こえてきた。

姉貴がその声に反応して駆け出した。

俺も慌てて後に続いて走り出す。

声からすると、小さな女の子のようだが・・・

やがて、森の木立を背にした男が犬モドキの群れに襲われているのが見えた。

姉貴がM36を引き抜き空に向かって撃つ。

パン・・・パン・・・と銃声が響くと、犬モドキの群れがこちらに向かってきた。

「来るわよ・・・準備して!!」

姉貴の声に、杖を構える。

グアアーっと叫び声を上げて襲ってきた1匹を杖で横なぎに打ちつける。

バギっと、てごたえを感じたからには肋骨をへし折っていると思う。

次の1匹は脳天に杖を振り下ろして頭蓋骨を叩き割った。

3匹目は遠巻きに唸るだけで襲ってはこない。

姉貴も手製の槍で2匹を殺ったようだ。槍先からまだ血が滴っている。

しばらく睨み合いが続いたが、ガオン！っと1匹が吼えると、群れは草原に走っていった。

俺達は恐る恐る、木の根元に倒れている男のところに進んで行く。

首に手を当て脈を確認する。脈はなく胸の上下もない・

体のあちこちに出血が見られる・失血死か・

おれの仕草を見ている姉貴に首を振る。

始めて見るこの世界の住人だ。

姿形は俺達と変わらない。手の指も5本つつ付いている。

服装は・綿ではなく、麻のような手触りの上下を着ており、皮

製の簡単な上着を着ている。靴は・これも手作りらしい皮のブー

ツを履いていた。

「私達と同じだね・少し安心だわ。」

「でも、文化程度は低そうだよ。・服飾はこんなだし・」

持物を探すと鉈のような短い剣と背負籠それに男が振るっていた

木の棒が転がっていた。

籠の中には、数種類の草と薪の束が入っている。

どうやら、薬草か何かを採取に来て犬モドキに襲われたらしい。
男の遺体をどうしたものか考えていると、傍の立木から小枝が降
ってきた。

ん？って立木を見上げた時、

「キヤー！」

叫びと同時に茂みに何かが降ってきた。

姉貴が槍を構えて恐る恐る茂みに近づいていく。

「アキト！・・・見て、見て・・・かわいいよ！！」

姉貴が茂みから目を離さずに片手でおいでおいでをしている。
なに？ってな感じで、茂みに近づき覗き込むと・・・

女の子だった。10歳前後の女の子だが・・・
頭の髪の毛からピヨコンって耳が・・・ネコ？

ワンピースみたいな簡単な皮服のお尻からは50cm程度の尻尾
が生えている。

小学生ぐらいの背丈だけど、肌は俺達と同じだが髪の毛が青みを
帯びた白だし、耳と尻尾は白色の短毛で覆われている。

木から落ちたショックで目を回してるみたいだけど・・・

姉貴がギューって抱きしめてるから・・・呼吸困難になってるみた
いだ。

顔色がだんだんと青ざめてる。

「姉さん・・・離さないと死んじゃうかも・・・」

俺の声に、ハッ！と気が着いたみたいで、膝に寝かせたが・・・尻
尾をナデナデしている。

俺は、女の子の体を触りながら負傷の程度を確認する。
特に、骨折等はしておらず、木から落ちたときの衝撃で一時的に
気を失っただけらしい。

女の子が姉貴の膝で動き始めた。

「ムウウン・・・ハッ！・・・痛ッ！！」

目をパチツツて開くと、素早く身を起こそうとしたが、どうやら
痛みのせいでそのまま横になる。

「・・・もう一人は亡くなったけど・・・襲ってた獣はいなくなっ
たわ・・・もう大丈夫！」

「・・・ところで、貴方は誰？」

姉貴が女の子の背中を撫でながら言うと、

「・・・ミア・・・そうニヤの・・・ご主人様は・・・死んだの・・・」

淡々とした答えだった。

どうやら、女の子は奴隷だったようだ。

主人に命じられて野山の薬草を採取していたが、今日に限って高
額で取引される薬草が森で豊作だと聞き、一緒についてきたらしい。
主人を失った奴隷がどうなるかは解らないとのことなので、彼女
が住む村についていくことにした。

さつさとミアは蔓で編んだ籠の中に、男の持物を入れると近く
の犬モドキをジツと見つめている。

犬モドキを指差して俺に聞いてきた。

「・・・ガトル要らニヤイの?」

「・・・要らない。食べられるとも思えないし・・・」

どうやら、犬モドキはガトルというらしい・・・

すると、ミアは籠から短剣を取出すと、短剣でガトルの犬歯を取出した。

右の犬歯を取出すと、次のガトルにかかる。

俺もグルカナイフを握って残り2匹の犬歯を取ってミアに渡した。

「ありがと・・・これ、交換できるの。」

ミアは無造作に籠にポイって入れると、その籠を担ぐ。

「行こう・・・」

姉貴がミアの手を握って一緒に歩き始める。俺もその後を追った。

山裾の集落

森伝いに尾根を1つ回ると、遠くに集落が見えてきた。どうやらあれがミアの暮らす村みたいだ。

見えても、つくまでの道のりは遠い、途中で軽く食事を取る。

始めて見る携帯食料にミアは興味津々・・おいしいって言いながら俺の分まで食べてしまった。

そんなことで、集落についたときには、だいぶ日も傾き始めたころだった。

集落は、簡単なログハウス風の掘っ立て小屋が10軒程度集まって、その周囲を簡単な柵で取り囲んでいる。

踏み固められた小道は、集落の柵の切れ目に続いており、そこには門番らしき人が槍を持って立っていた。

俺達が門番の傍まで行くと、門番は槍を俺達に突き出した。

「止め！ミアは良いとして、お前らは？・・それより、サミエルは一緒じゃないのか？」

「ご主人様は死んだ。ガトルの群れに襲われた。この人達がガトルを追い払ったけど間に合わなかった。」

「そうか、草原のガトルは脅威だからな。お前は直ぐに木に登れども、あいつはそうはいかんか。だから、今朝も止めたのに。すると、こちらはハンターなのか、ミアを助けてくれて感謝する。何もないところだが、ゆっくりしてってくれ。」

門番は勝手に判断して俺達を集落に入れてくれた。

ミアの後をついて集落の中を歩くと、少し大きめの家があった。どうやら長老の家らしい。

姉貴が丸太を半割りにしたような板で作られた扉を開ける。

「あのう・・・誰か居ませんか？」

「誰じゃ。」

部屋の奥まった所に布を下げて部屋を作ったようなところから、かなりのお年寄りが顔を出した。

「貴方が、この村の長老ですか？」

「いかにも、そうじゃ。はて？・・・お前さん達に会うのは初めてじゃな。なんぞ理由でもあるのかの？」

姉貴は、ガトルの一件を話し始めた。

サミエルの死には、少し驚いたようだが、ミアの今後について話始めると、何故ここを尋ねたか合点がいったようだ。

「先ず、ミアは奴隷ではない。サミエルが何処から連れて来たが、奴隷の証である額の刺青はないし、消した後もない。衣食住を保障するとか言いおって奴隷のように働かせておったが、あまり融通は利かなかったの・・・村人からの噂も良いことは聞けなかった。昨日の旅人から森で高額な薬草を沢山見たと聞いて出かけおったのじゃな・・・欲に正直な男だった。」

「すると、ミアは？」

「自由じゃよ。この村に暮らすもよし、村を出てもよし。出来るなら、これも縁と思って面倒を見て欲しいがな・・・」

「でも、私達兄弟は、生活手段がありません。仕事のアてがあるといいのですが。」

姉貴が少し困った顔を見せて言った。

長老はその言葉に驚いたようだ。

「何と、ガトルを倒せる者が！…それなら、ハンターとなるが
良いじゃろう。この村では出来ぬが下の村は大きい、ハンター・ギ
ルドがあるはずじゃ。今夜はこの村に泊り、明日出かけるがよかる
う。」

丁寧に姉貴は長老に礼を言つと、俺達は家を出た。

こつちこつちつと姉貴の手を引くミアと連れ立って小さな家に
入る。

どうやら、ミア達が住んでいる家のようだ。家主はもういない
けど…

家の中は狭く、10畳位の真ん中に石で囲っただけの炉があるの
で、傍の薪で早速火を点ける。

パチパチと燃え上がる火で部屋の中がよく見えるようになった。

端にベッドと木箱。その反対側に藁が敷いてある。

炉の反対側には木桶と古びた鍋。そして数個の木の椀・其れだ
けだった。

「ミアちゃんは何処で寝てたの？」

姉貴がミアを覗き込むように尋ねると、端の藁を指差す。

どうやら、藁に包まって寝てたらしい。姉貴はため息をつくと、
ベッドの脇の木箱を開けた。

中には…酒瓶と男物の粗末な衣類、それに小さな皮袋があった。
皮袋を開けると、1枚の銀貨と大ききの異なる10枚程度の銅貨
が出てきた。

あの男の蓄えらしい…とすると、これはミアのものだ。

「待ってて…ちょっと出かけてくる。」

そう言つと、籠を背にミアが家を出て行った。

「貧乏なのか、幼児虐待なのかよく解らないけど、このままではいけないわ。私達で引き取るけど良いわね？」

「ああ、一人暮らしはかわいそうだ。でも、俺達だって此処で暮らしていけるか解らないよ！」

「その点は大丈夫。長老が言ってたでしょ。ハンターになれって明日、下の村に行きましょう。」

そんな会話をしながら、姉貴は自分のザツクの中をこそこそと何かを探し始めた。

取出したのは裁縫セット・何でも持って来てるような気がする。そして、木箱の中にあつた男物の衣服を切り裂いて何かを作り始める。

暇になつた俺は、ザツクからポットを取出し、水筒の水を入れて炉の脇に置いた。これでコーヒーが飲める。

「ただいま・・・」

ミアアが帰ってきた。

姉貴が（お帰り！）って返事をする。

姉貴の所にトコトコと歩いていくと（はい！）って右手を出す。

姉貴は怪訝な顔をして右手を出すと、銀貨1枚と大小の銅貨数枚がその手にのつた。

「如何したの・・・これ？」

「さっきの牙と薬草を売ってきたの。」

「このお金つてどれ位の価値があるの？」

「銅貨10枚でご飯が食べられるってご主人様が言ってた・・・銀貨は銅貨100枚分、そしてこの大きなほうは銅貨10枚分だよ。」

「どうやら、貨幣単位は10進法らしい。10倍毎に異なる貨幣があるみたいだ。」

「銅貨10枚でご飯が食べられるということは、だいたい1枚が10円程度になるのかな。」

「ザックからアルファ米を取出してお湯が煮立った鍋に入れる。乾し肉と乾燥野菜をいれて塩で味を調整・・・簡単だけど、雑炊の出来上がり！」

「お椀にすくうと、3人でおいしく頂いた。」

夕食が終わると、3人でこれからの事をもう一度確認することにした。

「まず、これからの暮らしを如何するかだ。」

「長老は、ガトルを倒せるなら下の村に行って、ハンターになればいいって言うていた。ガルドの牙はミアの話だと、銅貨25枚程度で売却できるらしい・・・という事は、」

「1日で、ガルドを4匹仕留めれば食事は出来るということだ。」

「寝る場所については、最初は野宿・・・不安はあるがガルド程度なら心配ない。」

「後は、ギルドでの依頼にどのようなものがあるかということだが、別に上を望む訳ではないので、暮らせる分に留めればそれも問題は無いだろう。姉貴を見ると、膝にミアを寝かしつけて針仕事をしている。」

「姉さん。何を作ってるの？」

「この子ねえ・・・下着すらないのよ。とりあえず上着は今の皮服でいいとして、下に着るシャツとパンツを作ってるの。出来れば、アキトには靴を作ってほしいけど・・・無理かなあ。」

「ウウン。とりあえず作ってみるけど、期待しないでね。」

早速、ザックからノートを取り出し、ページを1枚を破る。鉛筆を持って、寝ているミアの足から靴？を脱がせると、足の裏に紙を合わせて鉛筆でなぞり足の型紙を作った。

次に木箱を漁ると、鹿皮のような上着を見つけた。痛んではいたが、着る訳ではない。

木箱の蓋を利用して型紙より少し大きめに靴底を4枚切取る。

次に、靴の表だが・・自分の靴の構造を見ながらおおよその形で同じ形になるように2枚切取った。

「姉さん。クナイ貸してくれる？」

俺の注文に、姉貴は靴のケースに差してあるクナイをぽんと投げたてくれた。

クナイを使って皮ひもを4本切取る。

靴底2枚と靴の表の下側を丁寧にクナイで穴開けを行う。そして両者を皮ひもで縫い合わせると、簡単なモカシンブーツだ。履いた後で靴の表に開けた調節用の紐を閉じれば出来上がり。我ながらよく出来た。

ほら！って姉貴に見せようとしたが、既に姉貴は夢の中。

火の番のついでに、バックも作ってみる。これは、1枚の皮を3分の1程折って両側とベルトを通す場所を、穴開けの後に紐で閉じていけばいいので簡単だ。

時計を見ると12時を回っている。

炉に薪を放り込み、俺も寝ることにした。

ハンターになるために

次の朝、コーヒーの香りで目が覚めた。

コーヒーを入れたシエラカップを（はい！）って姉貴から渡される。

苦い味が、ぼんやりとしていた俺の頭を覚醒させる。

俺が寝ている内に、出かける準備は終わったようだ。

ミアは昨日と違って、足首までのパンツと長袖のシャツを薄い皮のワンピースの下に着ている。昨夜、姉貴が縫っていた成果だと思ふ。

足に履いているモカシンモドキは、俺が作ったものだ。とりあえず作ったものにしては、我ながらよく出来ていると思う。

腰には、紐をつけたバックを肩から提げている。あまり出来はよくないが、物を入れるには問題ないはずだ。

そして、背には・サミエルが持っていた短剣を背負っている。

ジツと見ていた俺に気付いたミアは、

「ありがとう。お兄ちゃん。」

と言って、姉貴の後ろに隠れた。

ずっと、年下の兄弟が欲しかったが此処に来てようやく適ったわけだ。

嬉しくなってしまう、ミアの頭をガシガシって撫でたら、姉貴に山菜鎌の柄でポコンって叩かれた。

「虐めちゃだめでしょ！」

メッ！って顔をしている。

触らぬ・何とかで、こんな時は話題を変えるに限る。

「もう、出かけるの？」

「そうよ。丸1日掛かるみたいだから、急いで準備してね。」

準備と言っても・・特にない。

昨夜借りたクナイを姉貴に返しておく。ザックを担ぎ、山菜鎌を持って準備完了だ。

携帯食料をコーヒで流し込むと、ポットの残り湯を炉に注いで火を消す。

家を出て、まずは長老の家に行く。

まだ、日も出ていない早朝だが、長老は家の前に佇んでいた。

「出かけるんかいの。この時間に発てば、夕暮れには着くはずじゃ。南の道を真っ直ぐに行くんじゃぞ。・・それと、ミアをよるしくな。・・」

「はい。では行ってきます。」

姉貴はそう言って、集落の南に向いた道を歩き出した。

出口の柵にはまだ番人もいなかったが、柵をずらして出た後は柵を基に戻しておいた。

道と言っても、丁度荷車が通れる程度の踏み固めた道だ。

周りは畑が広がっており、名前の知らない野菜類が育っている。そんな畑の中をウネリながら緩やかな下り道が続いていた。

姉貴はミアと手をつなぎながら俺の前を歩いている。ミアの長い尻尾が歩くたびに左右に振れるのが、何となくかわいらしい。気が着くと、揺れる尻尾に合わせて何時しかハミングしていた。

「ご機嫌ね！・・・この先の草原は、ガトルがたまに出るらしいから、気を付けてね。」

「ああ大丈夫。後ろは任せて・・・」

俺のハミングに気が付いたのか、姉貴が振り返って注意してくれた。

改めて周囲を見渡すと、道の傾斜に合わせた段々畑の造りが進むにつれて雑になってきている。村の傍と比べると歴然としている。村から、南に向かって少しづつ畑を切り開いてきたような感じだ。

道の途中に大きな岩があった。数本の立木も生えている。

岩の傍には焚火の跡があることから、長老の言っていた村への休憩所として利用されていたようだ。

時刻も丁度昼近く。ずいぶんと歩いてきたようだが、下り坂のせいかそんなに疲れてはいない。

姉貴の（食事しよう！）の一言で、この岩で休憩になった。

枯枝を集めて、焚火の跡を利用して火を焚いた。

ザックを探して、食料がないことを姉貴に告げると、ザックから紙包みを取り出して渡してくれた。

中には、アルファ米とチューブ入りの味噌汁の素、それにビーフジャーキーみたいな乾燥肉だ。3人で食べても2日程は持つ量だけど・・・あのザックの機能から、これだけでは無いと思う。

不思議そうに姉貴の顔を見ると、

「今は、これだけね。1月分位の食料は持ち込んできたけど、これから何があるか分からないから、少しは節約しないと・・・」

言い聞かせられてしまった。

確かに、そうだけど、たまには腹いっぱい肉を食べたい・・・

そんな中、「あれ！」ってミアが持っていた先割れスプーンで草原を指した。もう一方の手にはシェラカップがあったのでスプーンを使つたみたいだ。

「何？」って姉貴は小型双眼鏡でミアの指した方を見ていたが、「アキト。肉が走ってくるわ。準備して！」

ようやく、俺にも様子が見えてきた。

猪モドキの小さいのが数匹のガトルに追われている。

姉貴がクロスボーを準備しているとところを見ると、猪モドキを殺るつもりみたいだ。となれば、俺はガトルを退治して猪モドキを我が物にするのが役目。

猪モドキが岩の傍を横切ると同時に山菜鎌を振り上げて追いかけてきたガトルに飛び掛った。

着地と同時に1匹の背中を叩いて撲殺し、身を起こしながら手近かなガトルを鎌に引っ掛けて投げ飛ばした。

動きを止めると飛び掛つて来るのは犬の習性なので、走りながら次の獲物の頭を殴る。さらに、吼えているガトルを横殴りに首筋を払って首を折ってやった。

辺りを見渡して、他にガトルがないことを確認する。

ふうつと息を吐いていると、ミアが岩から下りてきて猪モドキの走っていった方へ走り出した。姉貴も後に続いている。

確か、右の牙だったよな。自分に確認しながらガトルの牙を頂戴する。貴重な換金部位だ。

姉貴の方に歩いていくと、猪モドキの血抜きをしている最中だっ

た。

臍物を抜き、首と足の静脈を切って立木に吊るしている。

「いい所に来たね。あの枝を切って簡単な橇を作って欲しいんだけど・・・」

「いいよ。ちょっと待つてね。」

姉貴の指差した木の枝をグルカナイフで叩き切り、Yの字になるように余分な枝を切取る。

そして、血抜きが済んだ猪モドキを橇に縛りつける。こうすれば、2本の枝が橇になり長手の枝を持って引き摺って行く事ができる。

猪モドキをよく見ると、額に小さな角が一角獣のように出ている。ミアが短剣でガンガン叩くと基からポキンって取れた。

大事にバツクに仕舞ったことから、猪モドキの換金部位は角だったんだと気が付いた。

それから焼く時間後、俺は平原の下り坂をズルズルと猪モドキを引き摺って歩いている。

先に行く2人は軽快に、何を話しているのか時々笑い合いながら歩いているが、今の俺はそんな気楽さは微塵もない。

たまに、遠くから俺を見るガトルがいるからだ。せっかく手に入れた肉を奴らに奪われないように、最大限の警戒を取りながら歩いている。

だいぶ日が傾いてきた頃、ようやく遠くに村が見えてきた。

ミアの村とは、断然大きさが違う。百軒を越えると思われる村の家々は、丈夫そうな丸太の柵で全体が囲われており、門すらも見える。どうやらこの道は、あの門に続いているらしい。

近づくにつれ、大きさが実感できる。

門も上部に櫓が付けられている。丸太を裂いたような雑な板で作られた両開きの扉は、片方だけでも荷馬車が通れる程の横幅だ。皮鎧を葺つい顔の男が、2m程の槍を持って、門番をしている。

ズルズルと猪モドキを引き摺って門をくぐろうとした俺達の前にいきなり門番が立ち塞がった。

「待て、見かけん奴だな・・何処から来た？」

「上の村から来ました。長老がガルトを倒せるぐらいなら、下の村へ行ってハンターに成れって。」

姉貴が丁寧 answers。

「上の村・・ああ、あの集落か。確かにここにはギルドがある。

イネガルの子供を途中で手に入れるぐらいなら、立派にハンターになれるぞ。よし、通れ！」

門番はそう言って道を開けてくれた。

「ありがとうございます。ついでに聞いて良いですか？・・ギルドの場所と、このイネガルですか、これを買ってくれる所を教えてください。」

「ギルドは、此処を真つ直ぐ言った先の十字路にある。盾の看板が目印だ。肉屋は途中の左側にある。骨付き肉の看板だから直ぐに判るはずだ。」

「「ありがとうございます」」

門番に礼を言って早速肉屋にイネガルという猪モドキを売りに行く。

なるほど・・骨付き肉が看板だ。

肉屋で銀貨1枚でイネガルを売る。但し、後ろ足1本分はその場でこちらの取り分とした。それでも、皮と肉で結構な儲けを肉屋は

期待できるみたいだ。

村のギルド

イネガルの後ろ足を粗雑な紙で包んだ荷物を担いでいると、何か獲物が小さくなったようで、ちょっとがっかりした気分になった。た。

でも、これなら直ぐにでも調理することができると思うと、そんな気分も吹き飛んでしまう。何しろ、久しぶりの肉だ・・・肉だよ・・・お肉様なのだ。

後ろでそんなことを考えているとは知らない2人は門番に教えてもらった十字路で盾の看板を探し始めた。

「あ！・・・あれだね。」

姉貴達が十字路を斜め横断して大きな建物に入っていく。

入口らしき所で俺を手招きしているから遅れると煩いので、急いで姉貴の所に向かった。

2階建ての大きな建物がギルドだった。木造ではあるが、俺の家より遥かにでかい。

入口の両開きの扉を開けて中に入ると、正面にカウンターがあり何人かのお姉さんがいる。ちょっと銀行にも似ている気がしないでもない。

カウンターの真ん中にお姉さんに狙いを定めて歩き出す。

「あのう、此处でハンターになれると上の村の長老に聞いたんですが・・・」

姉貴が恐る恐る用件をきりだした。

「はい！ 成れますよ。・・・成りますか？」

「成ります！」

「え〜つと・・・新規登録ですね。それでは、この用紙に必要な事項を記入して下さい!」

何か、軽いノリのお姉さんだが、どうやらハンター登録が出来るらしい。

姉貴に渡された用紙を後ろから覗いて見ると・・・読めない。

ギリシア文字とクサビ形文字が融合したような文字が小さく並んでいる。

「何これ? こんな文字見たことないぞ!」

「アキトも読めないの?」

姉貴はミリアに用紙を見せてみたが、ミリアも首を振るだけだった。

「あのう・・・読めないし、書けません。代筆お願いできますか?」

「はい。大丈夫ですよ。・・・此处ではなんですから、奥にどうぞ!」

そう言っつてカウンターの端にある扉から、中に案内された。

小さな会議室みたいな部屋で、お姉さんの質問に答える形で俺達のプロフィールが用紙に書き込まれていく。

「お名前は?」

「私がミズキ・ヤガミ。こっちが、アキト。この子はミリア。」

「御出身は?」

「ニホンだけど・・・」

「何処から歩いてきました?」

「上の村から・・・」

「出身は、アクトラスっつと!」

「得意な武器はなんですか？」

「私は、弓。アキトが剣かな？ ミーアは・・・」

「あたしは、これでいい。」

「短剣ですね。分かりました。」

「魔法は使えますか？」

「そんなのあるの？」

「魔法は使えないっ！」

「亡くなられた場合の連絡先は？」

「いません。」

「死亡時はギルドに付託っ！」

というような問答で用紙が埋められ、最後にお姉さんは直径5cm程の水晶玉を取り出した。

「個人の技量を計測します。一人ずつ持ってみてください。」

先ずは姉貴が右手で持つ・・・一瞬、ピカって光った。

「はい、いいですよ。では次の方。」

次は俺が持ち、光ったことを確認して、ミーアに渡す。

ミーアが持つ水晶玉が光ると、お姉さんは水晶玉を回収した。

「これで、全て完了です。あとは・・・そうだ！ 皆さん一緒に仕事をするんですね？」

「ええ、そうしたいと思っていますが？」

「それでしたら、チーム名を登録しておくと便利です。チーム

でないと受けられない依頼もありますから。」

「それでしたら・・・【ヨイマチ】にします。」

「はい。分かりました。」

お姉さんは3枚の用紙を書き上げると、改めて俺達を見た。

「次は、ギルド組織の注意事項です。一応簡単に説明します。分からない時や、困った時は、その都度説明しますから、カウンターで尋ねて下さい・・・」

お姉さんが話してくれた注意事項は次のような内容だった。

ギルドのホールにある依頼掲示板で仕事を探すことが出来る。

依頼掲示板に張り出されている用紙にはハンターレベルが記載されており、現在のレベルの1つ上までの依頼を受けることができる。依頼完了の報酬は依頼が完遂されたことを示すものを持参する必要がある。これとは別に獣等の換金部位を持ち帰った時は、その金額が報酬に加算される。

依頼遂行上の負傷等は事故負担。

依頼遂行に係る衣食住は事故負担。

武器、防具等の費用は事故負担。

装備等の一時預かり等である。

「ということは、ここに来る途中で手に入れた、これなんかも換金できます?」

姉貴はそう言って、ミアアのバックから、角と牙を取り出した。

「え!・・・出来ますよ。これは預からせて貰います。ホールで待っていて下さい。」

俺達は部屋を出るとホールに移動した。

確かにホール両側の依頼掲示板があり、粗末な紙に書かれた依頼用紙が一面に貼り付けられている。

「読めないのが難点ね。何とかしなくちゃ。」

姉貴が用紙を見ながら呟いた。

確かに、ハンターに成れても依頼書きが読めないのでは話の外だ。

「皆さん。いらして下さい。」

ホールにお姉さんの明るい声が響く。

そろそろカウンターに行くと、お姉さんがカウンター越しに3枚のカードを渡してくれた。

「これが、ミズキさん。これがアクトさん。最後はミアちゃんのです。」

これが、RPG等でお馴染のギルドカードってやつか・

名刺サイズの金属片。読めないから内容は分からないけど、いろんな項目に刻印が押されている。そして、下の部分に穴が2個開いていた。

姉貴のも同じように2個開いている。でも、ミアのは1個だった。

「皆さんのカードは、初心者ですので、赤のカードとなります。

下の穴は戦闘レベルに相当します。さっきの水晶球で調べたもので公平な分類ですよ。俗に、赤2つと言われるレベルです。・・それと、換金ですが・・130レクですので、銀貨1枚と銅貨3枚です。

「ありがとうございます。ところで、良い宿がありましたら紹介してください。」

さりげなく、姉貴がお勧めの宿を聞いている。

そして、現在歩いている先がギルドのお姉さんお勧めの宿（フィーネの宿）なんだけど、この距離って村はずれだよ。だいたい歩いてきたぞ！

「此処だと思っただけど・・・今晚は！」

小さな2階建ての家は、ギルドからだいぶ離れたところに立っていた。目印は、家の左に立つ大きな杉の木。

俺達が扉を開けて中に入ると、カウンターのおばさんにジロ！って睨まれた。俺達、お客さんだよな。

「今晚は。あのう、泊めて頂けますか？」

「よく、こんな外れの宿を見つけたねえ。」

「ギルドのお姉さんに紹介して貰いました。」

「サンデイの紹介かい。いいよ。泊めたげる。1人20レクだけど何泊だい？」

「余り持ち合わせていないので・・・2泊お願いします。それと、此処で食事はできますか？」

「朝は、1人5レク、夜は8レクで食事を出すよ。」

「3人分お願いします。それと、これを焼いてくれますか？」

俺は、担いできたイネガルの片足をカウンターに置いた。

おばさんはしばらく肉を眺めていたが、

「焼くだけなら、サービスでいいよ。所で余った肉だが・・・」

「差し上げます！」

「いいのかい。すまないね。さて、これが部屋の鍵だ。4人部屋だが問題ないだろ、食事は直ぐに作るからとりあえず部屋に荷物を置いてきな。」

姉貴は銀貨と銅貨を混ぜて支払うと、鍵を受け取った。

おばさんが指差す階段を上ると、通路の両側に部屋がある。

4つある一番奥の部屋が俺達の部屋だ。部屋番号はあるのだが、俺達には読めない。鍵についていた札の記号と同じ記号を探してどうにか部屋を確定できた。

部屋は2段式のベッドが2つと椅子4つのテーブルが1つ。片側の扉を開けると小さな木の風呂桶がある。トイレが無い所を見ると、外にあるのかな？

ベッド脇には木箱があり、簡単な鍵も付いている。

とりあえず木箱にザックを入れて、夕食を取る為に下へ降りることにした。

俺達が階段を降りる音に気が付いたのか、

「そのこのテーブルで待つといて。もう直ぐ出来るから。」

カウンターからおばさんが声をかけてくれた。

確かに、カウンターの反対側にテーブルがある。

5セットあるテーブルには2組の先客がいた。どうやら、食堂と宿の兼業をしているらしい。

彼らから離れたテーブルに着いてしばらく待つと、夕食が出てきた。

野菜中心のスープと固めの黒パン。そして、イネガルの焼肉だ。

他の客をチラって覗くと、焼肉無しで同じような献立だ。

「オイ！俺達には無えのかよ？」

客の一人が俺達の焼肉を目ざとく見つけて、おばさんに食いついている。

「生憎だねえ。彼女達が仕留めたイネガルの現物持込さ。明日はその肉でシチューを作るから楽しみにしてな」

「くそー、現物持込かよ。俺達にはまだイネガルは無理だぞー！
！」
「しかし、見たところ大分若いようだが、良く仕留められたものだな。」

「大方、横取りしたんじゃねえのかい。俺達だって、イネガルは年に何度も仕留められねえ。」

席を立って怒鳴りつけようとした俺を姉貴は服の裾をつかんで押し留めた。

「言わせておけばいいのよ。横取りには違いなし・・・」

2組の先客は、話している内にだんだんとヒートアップしてきたようだ。ひよっとして酒でも飲んでるのかな？

1人が俺達のテーブルに来るなり、俺に質問を投げかけた。

「実際はどうなんだ。殺ったのか？ それとも横取りか？」

「ガトルに追いかけていた若いイネガルを殺ったのは私です。追いかけていたガトルを始末したのは、こっちのアキトです・・・
確かに横取りですね・・・」

それを聞いた先客達も驚いている。

「ガトルに追われたイネガルの速さは伊達じゃねえ。それに、獲物を横取りされたガトルの執念深さはよく知っている。おめえらよくもまあ、無事だったものだ。ところで、おめえらのハンターレベルは幾つなんだ？」

「さつき、ハンターになったばかりです。」

姉貴はそう言って、ポケットからギルドカードをテーブルに置いた。

「赤2つ・・・いいか。今回はうまく行った。だが次もうまく行くとは限らねえ。身の丈にあった仕事を探すんだ。・・・いいな!」

先客達も頷いている。

乱暴者のように見えた先客達も同じハンターのようにだ。俺達を心配してくれているようで少し嬉しかった。

最初の依頼はキノコ狩り

食事の後、俺達の部屋に戻ったら、姉貴がザックをぐそぐそと何かを探している。

そして取り出したのは、海兵隊仕様の上下の迷彩服だ。更に、1本の刀まで出してきた。

「明日からこれにきなさい。それと季節が違うようだから上着は要らないかも・ポンチョを持っていけば大丈夫ね。」

姉貴に従って、服を脱ぎTシャツ1枚になる。迷彩のパンツにベルトを通してはくと、肩パット付きのサスペンダーの背中に取り付けたグルカナイフのケースと交差するように斜めに日本刀を取り付ける。

「姉さん・これって、忍者刀？」

「そうよ。欲しがってたでしょ。お爺さんの部屋にあったから入れてきちゃった。」

テへって舌を出して言わないでください。

確かに欲しかった品だ。反りのある日本刀と違い、反りが殆ど無い・どちらかと言うと直刀に近いが、実戦では斬るより突く方が効果的だ。しかも、鞘は薄金造り・木に鋼を巻きつけ漆で塗装している。さらに石突は金属製で先端を研いでいる。鞘も武器として利用できるのだ。

黒塗りの柄を手にとって抜いてみる・刀身も漆黑、刀身は約70cm十分な得物だ。

取り出しやすいように、四角い鍔が肩から少し出るようにしておく。

小袋に携帯食料と食器等を入れて、ポンチョに巻き込む。それを

サスペンダーの腰部についている専用ベルトで横に固定する。こうすれば、M29がきれいに隠れて見えなくなる。

GI水筒は右腰に着け、GIブーツを履きなおして、迷彩柄のキヤップを被れば・・・何処の戦場に行くのかと思いたくなるような出で立ちだ。

そして、姉貴が最後に渡してくれたものは指先が空いた皮手袋、それに・・・

「姉さん。これは無いでしょ。幾らなんでも・・・これは！」

「何が有るか分からないでしょ。用心の為よ。持ってなさい！」

驚くなかれパイナップル型の手榴弾だ。

とりあえずサスペンダーの右胸のスリングに通して、マジックテープでしっかりと抑えておく。

俺の方が一段落したところで、姉貴の装備を見てみると、服装が迷彩柄になった位でそれほど変化は無いようだ。

しかし、上着を脱いでTシャツにサスペンダーは、姉貴の大きな胸が更に強調される。あまり見ないようにしよう・・・。

ミアちゃんの方も、変化が無い。違いは姉貴が出したベルトを切詰めてワンピースの腰に俺の作ったバックを取り付け、ポンチョ代わりに俺の上着を丸めて横付けしたぐらいだ。

「さて、準備は出来たわね。明日ギルドに出かけてハンター業を開始します。・・・ザックは必要なもの意外はギルドに預けるから、最後によく装備を確認してね。」

何時の間にか沸いていた木風呂に入り、久しぶりにベッドで眠る。

ベッドで寝るのが久しぶりなせいか、夢も見ずに夜が明けた。

次の日、ミアちゃんの呻き声で目が覚めた。

隣のベッドでミアちゃんが姉貴の足の下でもがいている。

早速助け出して、姉貴を起こすと何でもないような顔でおはようの挨拶だ。

半分寝ぼけている姉貴を無理やり着替えさせて裏の井戸へ顔を洗いに連れて行く。

朝食は黒パンに野菜と薄切りの肉を挟んだサンドイッチみたいなものだった。

きれいに平らげ、お茶を飲んでいるとおばさんが紙包みを持ってきた。

「これは肉のお礼だけど、今日からハンターをするんだろ。・・
いいかい。昨夜のハンターも言ってたけど、無理はするんじゃないよ。」

「心配かけてすみません。大丈夫ですよ。無理はしません。」

姉貴が、おばさんに微笑んで答えている。でも、俺は誤魔化されな
いぞ。(絶対に無茶しますよ。)っていう顔だもの。

家並みから外れている宿屋からギルドへの道は結構な距離だ。

身一つで依頼がこなせるように装備を整えているので、ザックは一時的にギルドに預かってもらうために持参してきた。

朝早いせいか、村の大通り?には余り人がいない。たまに家の前をほつぎで掃除しているおばさんやお爺さんを見かけるとおはよう

!と挨拶するが、その度に丁寧に挨拶を返されるので疲れてしまう。

・・まあ、挨拶は礼儀の始まりって言うし、悪いことではないけれど・・・

「おはようございます！」って、元気な声で姉貴がギルドに入っていく。俺も遅れないように後に続いた。

つかつかとカウンターの・・・昨日出会ったお姉さんのところに歩いて行く。

「おはようございます。このザックを2つ預かってください。それと私達にお勧めの依頼を紹介してください！」

ニコリとしながらそう言った。・・・いいのかな？

カウンターのお姉さんも、びっくりしてたようだが、ああ！と手を打って納得したようだ。

要するに、俺達は字が読めない。依頼板の依頼用紙の内容も判らない。だったら聞けばいい。という訳だ。

「困りましたね。・・・所で持ち合わせがありますか？ ガイドを雇うのも良い方法だと思うんですけど。」

「「ガイド？」」

「はい。黒カードの人達が一時的にボランティアでハンターのガイドをしてるんです。それなりの経験もありますし、何と云ってもその人に合った依頼を選別してくれますよ。それと、荷物の預かり料は依頼期間中1個5Lになります。」

姉貴の頭に？が2、3個浮かんでるのが見える。

「ガイドの料金ってどうなりますか？」

「レベルによっても違いますけど・・・「ヨウマチ」さんなら黒レベルの初めでいいと思います。それでしたら20Lが前金そして完了報酬の1〜2割程度ですね。」

意外と安い。さすがボランティア。と思うほどの料金だ。手荷物

預かりも駅のコインロッカー程度の値段だ。

「お願いします。今日からお願いできますか？」

姉貴はポーチの中の布袋からお金を渡した。

「ちよつと待って下さいね。・・大丈夫です。今、呼んで来ますね。」

お姉さんはそう言うのとカウンターから離れ、奥の階段を上っていった。

しばらく待つと、お姉さんと一緒にミアちゃんと同じようなネコ耳のお姉さんが下りて来た。カウンターの扉を開けて俺達のところに来てくれる。

「彼女がガイドのミケランさんです。黒1つですからお役に立つと思いますよ。」

彼女をそう言うって紹介するとカウンターに帰っていった。

「ガイドのミケランにゃ。・・先ず皆のレベルが知りたいにゃ。」

ミケランさんをよく見るとミアと少し違っていた。

きれいな顔は丸顔で白いピンとしたひげがほっぺから何本か出ているし、シャツから出ている腕も短い毛に覆われている。

でも、使い古された皮の鎧と腰に下げた片手剣がにとてもよく似合ってる。

「これが私のカードです。アキトとミアちゃんも出しなさい！」
ミケランさんは、俺達が出したカードをしばらく見ていた。

「これだと、採取系の依頼がいいかもにゃ。」

そう言うって俺達のカードを返してくれた。

「こっちはにゃ。」

俺達はミケランさんに連れられて依頼板の一角に行った。

「この辺りが、皆のレベルに合った採取依頼にゃ。何かしたいことはあるかにゃ？」

「え〜と・・・初めてだから、簡単で高額になるのがいいんだけど。」

「ん〜と・・・この辺かにゃ。アリット茸の採取にゃ。東の森にあるはずにゃ。」

「アリットにやらミアも判るよ。村の森にもあったもの。」

ミケランさんは「賢いにゃ！」ってミアちゃんの頭を撫でている。

姉貴は俺を見て小さく頷いた。どうやら、アリット茸採取を引き受けるみたいだ。

まあ、キノコ狩りだし・・・ミアちゃんも知ってるみたいだから危険もなさそうだ。

「じゃあ、それにします。この後、どうするんですか？」

「これをカウンターに持っていくにゃ。」

ミケランさんは依頼板から用紙をひっぺがしてカウンターのお姉さんの所に持って言った。

「これにするにゃ。」

どれどれとお姉さんは用紙を見ていたが、「はい。判りました。」って言うと、大きな判子を用紙にペタンと押した。

「確かに依頼の受領確認を致しました。アリットは1本6Lで引き取ります。10本以上が完了条件になります。期限は3日ですの

で注意して下さい。」

そう言って、姉貴に用紙を渡してくれた。
早速出かけることにする。

「「では、行ってきます！」」

俺達はカウンターの姉貴さんに元気よく挨拶してギルドを出発した。振り返るとお姉さんが小さく手を振っている。

「ところで、準備したほうがいいものってありますか？」

姉貴が、ミアちゃんの手をつないで先頭を歩くミケランさんに恨めしそうに聞いている。ミアちゃんと手を繋ぎたかったのか？

「そっだにゃ・・籠があると便利かもにゃ。後は、お弁当だにゃ。」

ミケランさんの意見を取入れ、途中の雑貨屋で小さな籠（それでもミアちゃんが背負うと大きく見える）と、乾燥させた肉を購入した。

村の中の十字路を東に曲がって進むと村を囲んだ柵の門に出た。

「ミケランじゃないか。今日も薬草の採取か？」

「今日は、ガイドにゃ。東の森でアリツトの採取にゃ。」

どうやら門番さんと顔見知りらしい。「気を付けて行けよ！」の励ましに送られて俺達は東の森へ続く道を歩き出した。

逃げ回るキノコ

村から東への道は、荷馬車が通れる程の道だ。

道の両側は広い畑だ。キャベツみたいな丸まった野菜が育っている。まだ、黒い土が見えているところは、これから植えるか、もう種をまいたか・・そんなところだろう。

お百姓さんが何人か畑に出ているのが見える。明るい農村って感じのところだ。

しばらく歩いていくと、十字路に出た。

「農家の荷馬車が畑に行くための道にや。私達は真っ直ぐ行くにや。」

ミケランさんが説明してくれたけど、結構立派な道に見える。意外と農道って街道よりも村の人達には重要なのかも知れない。

「東の森は、泉の森とも言われてるにや。・・もう直ぐ、ほら！・

・この小川は森の北のほうにある泉から流れてくるにや。」

「そうなんです。きれいな小川ですね。」

いつの間にか姉貴はミアちゃんのもう片方の手を繋いで、3人並んで歩いている。

ミアちゃん頭の頭の上で2人で会話してるんだけど・・ちょっと、ミアちゃんが歩きにくそうに見えるのは気のせいだろうか・・

道の両側の畑がなくなると道幅は急に細くなった。小道って感じだ。

荒地を開墾しているお百姓さんがいるけど、道から離れているので挨拶は無しだ。

荒地が草原になるとようやく東の森が見えてきた。

森は南北に大きく広がっている。所々森が盛り上げているように見えることから、起伏も結構あるみたいだ。

小道が森に入る手前に、10m四方程度の広場があった。火を焚いた跡があり、少し大きめの石が5個、焚火跡を取り囲んでいる。

「ここで、お昼にするにゃ！」

ミケランさんの一言で、昼食の準備だ。

姉貴は装備を外すと、丸めたポンチヨを解いて中から紙包みを取り出した。

「アキト。お茶をお願いね！」

俺もポンチヨからポットと食器を取出し、固形燃料でお湯を沸かし始めた。

ミケランさんは森に入って行き、棒を2本持って帰ってきた。一体何に使うんだ？

皆が揃ったので、姉貴は紙包みから黒パンを取出して1個づつ配り始める。俺も、お茶をシエラカップに半分づつ入れて皆に配った。

「美味しいにゃ。このお茶も珍しいけど、皆で食べると美味しいにゃ。」

ミケランさんは黒パンをモゴモゴ齧りながらお茶を飲んでいる。

「ところで、アリットって森の奥深い所にあるんですか？」

「そうでもないにゃ。・・・この時間だと、森の広場で日光浴してると思うにゃ。」

ん？・・・日光浴してる・・・茸ってどちらかと言うと強い光は嫌うはずじゃ・・・いや、それよりも、この時間って、どういふこと？

「採るのは大変なんですか？」
姉貴も疑問を持ったようだ。でも、少し観点がずれてるような気がするけど・・・

「のろまな人には一生無理にや。私達、猫族には簡単にや。ミーアちゃんも大丈夫にや。・・・アキトは素早いかにや？」

「判断基準が判りませんが・・・ガトルは倒せましたよ。」

「なら大丈夫にや。」

2人の会話を聞いてたら余計判らなくなつたぞ・・・何で茸を採るのに素早い必要があるんだ？

「あのお・・・特別な採り方をしないといけないんですか？」

2人の会話に入り込んだ俺に、ミケランさんは振り向いた。

「特別って訳ではないにや。・・・取つたこと無いのかにや？」

「ありません。アリットって茸も今日初めて聞きました。」

「教えるにや。先ず、アリットを取り囲むにや。そして一斉に襲うにや。アリットは吃驚して逃げるから、追い掛け回しながら棒で叩くにや。」

「アリットって動けるんですか？」

姉貴が吃驚して質問した。

「素早いにや。でも、私達猫族の動きはもつと素早いにや。」

さすが異世界、とんでもない茸がいたもんだ。でも、なんだか想像すると楽しくなる。姉貴が草原で「まてー！」って言いながら棒を振り回して茸を追いかけてる姿を想像して思わず「プツ・・・」とふきだした。チラツと姉貴を見ると俺を見て片手を口に当てて笑っているようだ・・・ウムー・・・同じ事を思い浮かべたのだろうか・・・

「そろそろ出発にや。」
ミケランさんの合図で、俺達は装備を元に戻して腰を上げる。
森に入るなり、ミケランさんは腰に差した片手剣で藪を切り始めた。

「アリットを棒で叩くのは意外と加減が難しいにや。棒の先に粗朶をこんな風に縛り付けて、これで叩くにや。」

実演してくれるのはいいんだけど・・・ミケランさん、それではまるで箒です。

それでも、俺は見よう見まねで姉貴と俺と、ミアちゃんの箒を作り上げた。

箒を持って森に行く俺達を他人が見たら何と思うだろう・・・
俺のやる気はどんどん落ちてきているが、こんな事で大丈夫なのか？

鬱蒼と茂る森の中は大分暗い。それでも、ミケランさんはほとんど先を歩いて行く。森に変な動物はいないのだろうかと少し心配になるが、確か、黒1つ・・・俺達よりも遙か上のハンターだ。それなりの注意はしているのだろう。

突然、ミケランさんの足が止まった。

「この先にや・・・ここから右に折れるけど、音を立てないよう
に注意するにや。」

小声で俺達に注意するミケランさんに小さく頷いて了承する。

そろりそろりと小道を離れて森の中を進むと、先の方が少し明るくなる。

さらに進むと、木々が何故か生えていない小さな広場が見えてきた。

そしてよく見ると・・・エリンギみたいな茸が集団で日光浴をしている。大きさも少し大きめのエリンギだ。・・・しかし、ホントにあれが動くのか？

「いいかにや。・・・私が奥。アキトが右。ミヅキが左でミアちゃんはこのにや。私が飛び出したら、一斉に襲うにや。」

小さな声でそう言っていると、吃驚するような速さで森の中を移動して行った。

流石、猫族というだけのことにはある。あれだけ早く動いても物音1つしない。

俺達もミアちゃんをこの場に残して移動を開始する。俺達は人間なのでゆっくりと進んで行く。

右に回りこんで木立の間から広場を見ると、まだ気付かれてはいないようだ。

向かい側の木立から箒の先がチラチラ覗く。姉貴も位置に着いたみたいだ。後は、ミケランさんの合図を待つのみ・・・

突然、右手の藪の中から、「ミヤー！」って箒を振りかざしたミケランさんが飛び出した。

アリット達は驚いてこっちに逃げてくる。ピョんピョんっと跳ねるような動きはかなり素早い。

俺達も木立や藪から箒を振りかざしてアリットに向かう。

俺に驚いて急に方向を変えようとしたところを箒でピシヤリ！・・・これで、1匹？いや1個かな？

更に追いかけて逃げ惑うアリットを箒で叩く。

これって、採取？なのかなって素朴な疑問はあるんだけど・・・今は、ただ追いかけて叩くのみに専念する。

広場に逃げ回るアリットがいなくなつたところで終了だ。戦果を確認すると、10個以上はあるようだ。

1個づつミケナイさんが確認してミーアちゃんの背負つた籠に入れている。

「これは、ダメにや。・こつちは大丈夫にや。・」

どんな判断基準で選別してるか気になってミケランさんの傍に歩いて行く。

「アキト、大至急穴を掘るにや。」

仕事を仰せつかつてしまった。

「はい！」って姉貴がレスキューバックから折畳みスコップを取出す。

受け取つて、とりあえず穴を掘り始めたが・レスキューバックもザックと同じような機能があるらしい・でないと、これだけであのバックは一杯になるはずだ。

直径50cm、深さ1m程の穴を掘ると、ミーアちゃんがさつき撥ねたアリットを運んでくる。姉貴も両手に持つてきた。

「早く埋めるにや！」

少し焦つた感じのミケランさんに従つて、手早く穴に廃棄アリットを放り込む。

続いて土を被せて、トントンと足で踏み固めた。

「急いで此処から離れるにや！」

ミーアちゃんを抱えると、凄い勢いで広場を走りぬける。

俺達も訳が解らなかつたが、ミケランさんが走つていった方向に急ぐことにした。

いったい何処まで走つたのか解らないほどだ。

辛うじて、まだ元に戻らない雑木の倒された跡を手がかりに俺達は走っている。

「あそこにいるみたい！」

姉貴が前方を指差した。なんか2人でやってるみたいだが・・・
ようやく2人の所まで行くと、そこは小さな小川が流れていた。
籠の底に水辺の大きな葉っぱを敷いて、その上にさっき仕留めた
アリットを水で洗って入れていた。

「随分丁寧にするんですね。やはり、商品だからですか？」

姉貴が、ようやく水洗いが済んでほっとした表情のミケランさんに聞くと、

「違うにゃ。・・アリットはクルキュルの大好物にゃ。アリットに少しでも傷があると嗅ぎ付けて来るにゃ。」

籠に入れたアリットの上にも何枚かの大きな葉っぱを乗せながらミケランさんが説明してくれた。

え！・・それって、食物連鎖みたいな話かな？・・だとすると、あんなにすばしいアリットが好物のクルキュルって何だ？

「使えるアリットは7個にゃ。あとの3個は、明日の朝少し下の砂地で仕留めるにゃ。」

元氣よく立ち上がると、ガッツポーズでミケランさんが宣言した。
そうと決まれば、早速野宿の準備・・どれ、薪でも取りに行こう！

それはもうニワトリとは言えない

東の森の小川畔・俺達が野宿している場所だ。

パチパチという焚火の音が以外に大きく聞こえる。

後ろには大きな木があり、焚火の向こう側は小川が結構な水量で流れており、何となく安心できる。さらには、猫族のミケランさんがいるし危険が迫ってきたら注意してくれるだろう・・・何と云っても、黒1つだ。俺達よりずっと上のハンターだし・・・

「ところで、クルキュルって何なんですか？・・・危険な獣なんですか？」

食後のお茶をまったりと飲んでいた姉貴がミケランさんに質問する。

「獣ではないにや。こんな形の鳥だにや。」

そう言って、地べたに燃えカスの薪で簡単な絵を描いてくれた。

「こんな形にや。頭に鶏冠があつて、ちよつと小太り、それで飛ぶのは下手にや。」

「でも、足には、蹴爪があつてとても危険にや。」

ミケランさんって画才があるみたいだ。直ぐにそれが何なのか判ってしまった。

どう見ても、どう聞いても、ニワトリだ。

確かに小さい子には危険だろうが、俺でも簡単に捕まえられるぞ。

しかし、ミケランさんが脱兎の勢いで此処まで来たことを考えると・・・

・ニワトリよりも動きが素早いって事なのかもしれない。それなら、少し危険かも・・・

「動きがミケランさん並に素早いつてことですか？」
姉貴も同じように考えてたみたいだ。

「そうにや。この森に100匹位いるかもしれないにや。でもずつと奥に住んでるからアリット採りしてアリットに傷をつけない限り心配ないにや。」

「傷がついたアリットは埋めといたから、もう大丈夫にや。・・・
焚火の番は先にアキトとするにや。もう寝たほうがいいにや。」

そんな訳で、ミケランさんと焚火の番をすることになった。
ミケランさんをよく見ると、頭と耳の色が違っている。頭は茶色、
方耳は白、もう片方は黒だ。・・ひょっとして先祖は三毛猫？

ぼんやりと焚火を見ていると、ミケランさんが片手剣のケースの脇からパイプを取り出した。姉貴のお爺さんが使っていたキセルみたいな長さがある。

焚火の燃えさしを使ってパイプに火を点け、スパアって煙を吐き出した。

ネコってタバコが好きなのかな？って素朴な疑問はあるけど、自分も持っている事を思い出し、銀のケースから1本取り出して、同じようにタバコに火を点けた。

「あにや。アキトもやるのかにや。・・私らネコ族が一緒なら問題にやいけど、匂いが解らなくなるにや。」

「ミケランさんはなんでいいんですか？」

「カンがいいからにや。ミーアちゃんもいいはずにや。」

ネコの第6感ってやつかな？ ということは、現時点で危機はないってことだよな。・・

「少し、聞いてもいいですか？」

「言ってみるにゃ。解ることは答えるにゃ。」

そんな訳で、この世界の疑問をいろいろぶつけてみた。

そして解ったことは、

この世界がジェイナスと呼ばれていること。そして、小さな王国がいっぱいあること。都市や町もあるらしい。

暮らしているのは、人間だけでなく、獣人族、エルフ族、ドワーフ族等がいて、混血も盛んであること。ミケナイさんは猫種の獣人族だが、ミーアちゃんは人間とのハーフらしい。

魔法が存在しており、ハンターは数種の魔法を持っていること。ミケナイさんも持つてるらしいが教えてくれなかった。

魔法は、神殿の神官に料金を支払うことによって得ることができるとだ。あの村には神殿が無いとのことだった。でも、移動神官と呼ばれる人が辺境の村を巡回しているから、その人に対価を払うことによって魔法を使えるようになるって言われた。

ハンターの生活は結構厳しいものがあるらしい。ミケランさんも、2度程パーティーメンバーを亡くしているとのことだ。「高望みはダメにゃ。」って言われてしまった。

ハンターとして一人前として扱われるのは黒のカードを持った時からだそうだ。それまでは、半人前として簡単な採取をこなすことを進められた。

「でも、連れにガイドがいるときは別にゃ。星2つ程なら上の依頼を受けても大丈夫にゃ。」

しかし、アリット採取は赤2つ。もつと上があったのでは？という疑問に対しては、この依頼のリスクを判断したとのこと。

例のクルキュルである。赤2つでは対処出来ないってミケランさんのご宣託だった。

最終的に、簡単な依頼を数多くこなし、経験を積めってことでミ

ケランさんのアドバイスは終了した。

でも、経験を積んでも、危険な獣は判断出来ないような気がするけど・・・

そんな話をして時間を潰し、4時間経ったところで姉貴を起こして眠りに着いた。

ユサユサと体を動かされて強制的に睡眠を破られる。

どうやら、ミアちゃんが体を揺すっていたらしい。周りを見ると未だ薄暗く、夜明けには未だ程遠い時間のようにだ。昨日の昼に適当に合わせた時間では、朝の4時・・・いくらなんでも朝ではない。

「どうしたの?」

「にゃんかいるの!」

ミアちゃんがそう言っつて、指差したほうには姉貴が双眼鏡で何やら監視している。

急いで姉貴のところに行くと、姉貴は双眼鏡を俺に渡して前方を指差した。

姉貴の指差した先に動くものが見える。双眼鏡でよく見ると・・・どう見ても、ニワトリ、それも名古屋コーチンみたいな薄茶色の羽色だ。思わず涎が出てしまう。

さて、どうやって捕まえようかと考えてるときに、そのことに気がついた。

どう考えても、周囲の木々とニワトリの縮尺が合わないのだ。

慌てて、距離計を連動させて確認する。距離80でこの目盛だと・・・

「何だ!あの(モゴモゴ・・・)」

姉貴に手で口をふさがれた。

何と、あのニワトリの大きさはダチョウクラスの大きさがある。

ミケランさんが逃げるわけだ。あの大きさなら蹴爪の長さだけでも短剣クラス、へたな攻撃を加えたら怒らせて一撃である世行きとなる。

姉貴を見ると、クロスボーに足をかけて両手で弦を引いている。殺る気満々のようだ。ショルダーの矢筒からボルトを一本抜き取って、クロスボーの滑走レールにセットして俺に頷いた。準備完了ってことだよな。

ようやくミーアちゃんに起こされたミケランさんは前方のニワトリを見て、

「クルキュルにやー！」って言ったかと思うと、ミーアちゃんを捕まえて近くの大木に登ってしまった。

見た目そんなに恐ろしいとは思わないけど・・・

俺とミケランさんの叫びでニワトリはこっちに気付いたみたいで、こちらを睨んで警戒しているようだ。

姉貴が俺の脇で、クロスボーの照準器を覗き込んでいる。

先端が鉄の円錐で出来た、直径1.5cmのボルトを秒速200m以上のスピードで撃ち込むことができる。一体何を対象に作ったんだか解らなかったが、こんな事態も姉貴は想定していたんだろうか・・・

ニワトリはこちらを敵と認識したみたいで、こっちを睨みながら少しづつ近づいてくる。

パシュッ！と短い音がした。

ニワトリの胸にボルトが吸い込まれ、一瞬ではあったがニワトリがのけ反った。

当たった場所から鮮血が噴出している。

でも、それだけだった。近づくスピードが速まり、首筋の羽は逆

立っている。完全に攻撃モード全開の状態だ。

「早く、木に登るにや。」

頭上からミケランさんの声がするが、今からでは遅すぎる。登ったところで、あの大きさのニワトリなら10m近くは飛び上がれそうだ。

走ってくるニワトリを直前でかわして姉貴は槍を打ち込み、俺はグルカナ이프を叩き付けた。

その結果は、驚くことに跳ね返ったのだ。まるで、柔らかいゴムを攻撃したみたいだ。

ニワトリが前方でUターンをすると、再度俺達に向かって走ってくる。

「姉さん、隠れて！」

姉貴は直ぐに木の陰に隠れると、M36をホルスターから取出し狙いを付ける。

俺も、ナイフを投げ出すと、M29を取出して両手で構える。

バァン！

44マグの威力は凄まじい、狙い違わずニワトリの頭を吹き飛ばした。

それでも、ニワトリは走って俺の脇を通りすぎると後ろの立木にぶつかって倒れた。

しばらくの間、足が走っているように動いていたが、やがて緩やかにになり、そして止った。

どうにか、ニワトリを退治できたらしい。ミケナイさんもミーアちゃんと一緒に木の上からスルスルと下りて来た。

「倒したかにや。・・・とんでもない武器だにや。」

「あのう・・・使った武器については黙って貰えませんか？」

「いいにや。でも倒したことは報告するにや。」

ミケランさんの答えに満足して、M29をホルスターに戻す。

倒したニワトリの様子を姉貴と見に行っただけど、ホントに大きい。これだけで焼き鳥何人分つと考えると気が遠くなる。

攻撃が利かない理由も直ぐに判った。羽毛が何重にも重なっているのだ。これなら防弾チョッキ並みの防護が出来るだろう。

それでも、刺突には少し弱みたいで姉貴の放ったボルトは胸に深く突き刺さっていた。それでも動きに変化が無かったのだ。

まったくもってとんでもないニワトリだ。

「血抜きをするにや。足を縛って木に吊るすにや。」

ミケランさんの指示通りに木に吊るす。結構重い・・・ミーアちゃんより重いぞ！

「とりあえず終了にや。ご飯を食べてアリットを採るにや。」

いつの間にか辺りは大分明るくなっている。

ギニョーギニョーって変な声で鳥も鳴き出した。

「はい。今準備しまーす！」

俺は焚火の傍に戻ると、早速鍋に水を入れてお湯を沸かし始めた。

アリット採取終了

俺達は、リゾットモドキを美味しそうに食べながらミケランさんの講評を聞いている。

「クルキユルは、黒カードの連中が狩る獲物にや。それでもいっぱい人数を集めてするにや。ロープを一杯張った所に誘き寄せて、木の上から矢を射掛けるにや。少し弱ったところを槍で刺すのがやり方にや。」

どうやら、一人前の認証を受けた連中が10人以上必要とするらしい。俺達みたいな低レベルのハンターが狩ったらまずいのかも知れない。

「私達が殺したら拙かったのでしょうか？」

「そんなこと無いにや。たまに運が良くて狩れるものもいるにや。でも、反対の場合が殆どにや。」

それって、反対に狩られたって事なんだろうなきつと・・・

俺がM29のような高速重量弾であるマグナム44を発射できる拳銃を持ってたからよかつたものの、姉貴のM36だと38スペシヤル弾だから危なかつたかもしれない。つくづく規格外なニワトリ・いやクルキユルだと思う。

食事が済むと、ミケランさんの指示に従って、川下に移動する。クルキユルを木から下ろして担いでいくのは、やはり俺に役割が回ってきた。ニワトリモドキだからやはり食べられるみたいだ。

「ここがいいにや。」

そこには川岸に小さな砂地が広がっていた。

「昨日と同じにや。もう直ぐアリットが水を飲みにも此処に来るにや。隠れて襲い掛かれれば大漁にや。」

もう、何も言う気はない。アリット採取は小動物の狩りなのだと自分に言い聞かせる。

「ミヅキとアキトは川の上と下で待ち伏せにや。私とミアちゃんはこの木の上で待ち伏せにや。棒は持ったかにや？・合図は私がするにや。」

俺は担いできたクルキユルを茂みに隠すと、下流に行つて藪の中に隠れた。上流側の藪には姉貴はいるようだ。箒が揺れている。

しばらく身を潜めていると、アリット達がやってきた。

ピヨコン、ピヨコンって小さく撥ねるように列を作つて森の奥から次々とやってくる。

ペンギンが列を作つて歩いていてみたいに見える。損得抜きで見るとならば、きつと微笑ましい光景なんだろうなって思える程だ。

川岸の砂地に着くと、アリット達は動かなくなった。これがミケランさんの言う水を飲むってことだな。

「ミギヤー！」って叫び声を上げながらミケランさんが木から降りて箒でアリットを攻撃する。ミアちゃんも一緒だ。

「ウオオー！」って俺も叫びを上げて、こっちに逃げてくるアリットを叩く。

「オリヤー！」って声がすることから姉貴も頑張つてるに違いない。

5分にも満たない時間でアリット採取は終了した。とにかく逃げ足が速い。ピヨピヨってあつという間にいなくなつてしまった。姉貴の差し出す折畳スコップで急いで穴を掘る。その間に3人で選別と水洗いをしているようだ。

昨日と同じぐらいの穴を掘ると、早速3人が傷物アリットを運んできた。

「採り方が解ったみたいじゃ。8個は使えるじゃ。」
これで15個、ミツシヨンコンプリートって事になる。

傷物を素早く穴に埋めて、足早に森を後にする。でも俺はクルキユルを担いでいるし、ミアちゃんもアリットの入った籠を背負っている。おのずと歩く速度は遅くなるわけで、昨日お昼を食べた焚火跡に着いた時には、お昼を大分過ぎていた。

お昼は簡単に、お茶と干肉それに硬く焼き上げたビスケットのよ
うなパンだった。

雑貨屋で手に入れた、この世界の携帯食料だが、とても硬い。ミアちゃんがボリボリ齧つてるところを見ると、みんな歯が丈夫な
んだらうなって思ってしまう。

食事が終わると、またクルキユルを担いで歩き出す。籠は姉貴が
今度は担いでいるけど、俺の代わりに担いでくれる人はいなかった。

村に着いた時にはもう夕暮れ時、「ただいま！」って門番に挨拶
したけど、俺の担いでいる獲物を見て吃驚していた。声も出ないく
らいに・・・

肉屋に行つて、クルキユルを引き取つて貰う。

姉貴は、少し肉を分けてくれって言つてたけど、肉屋さんは大き
な肉の入った包みと蹴爪を渡してくれた。そしてクルキユルの値段
は、何と銀貨2枚と大きい銅貨5枚。250Lを渡してくれた。

「クルキユルは美味しいじゃ。そして羽根も防具の材料になるに
ゃ。」

ミケランさんが吃驚してお金を受け取った俺達に説明してくれた。ギルドに行くと、昨日のお姉さんにカウンター越しに終了を報告する。

はい！ってアリットをカウンターに乗せると、ご苦労様って言いながらアリットを調べて90Lを渡してくれた。

「爪も出すにゃ！」

ミケランさんの指示で、ミアちゃんはバツクからクルキュルの蹴爪を出した。

「殺ったのですか？」

お姉さんは吃驚したみたいだ。

「運が良かったみたいです。ミケランさんもいましたし・・・」

「出来るなら2度としないでくださいね。クルキュル討伐は黒5つ以上でやっとなんですから。」

そう言いながらも、はい！って銀貨1枚を渡してくれた。

さらに水晶玉を取出すと、カードの提示を求められた。

皆のカードを姉貴がまとめて出すと、一人ずつ前と同じように水晶玉を握っていく。

「はい。カードをお返しします。ミツキさんとアクトくんは星が1個つつ増えましたよ。ミアちゃんとミケランさんはそのままです。」

「じゅあ、これで終わりにゃ。また一緒に出来るといいにゃ。」
そう言って離れようとするミケランさんを慌てて姉貴が止めた。

「待って下さい。報酬の分配が未だですよ。・・・えーと、全部で440Lですから、ミケランさんの取り分は110Lでいいですね。」

「それだと多すぎるにゃ。今までだって1割位だったにゃ。」

「一緒にアリット採取したチームじゃないですか。山分けです。」
そう言って姉貴はミケランさんに銀貨と銅貨大を1個づつ渡した。
「ありがとにや。また一緒に行こうにや。」
ミケランさんが俺達に手を振ってギルドの階段を登っていく。確かに、今回に依頼はミケランさんがいなければ出来なかったに違いない。でも、アリット採取をしなければ危険な目にも逢わなかったような気がしないでもない。

「ところで、相談なんですけど・・・文字の読み書きを教えてくださいませんか？」

「チツチャイ子供相手ならあるんですが、ミヅキさん達にはちょっと・・・」

「そうですね・・・」
姉貴も字が読めない事の重要性に改めて気付いたようだ。でも、教えて貰える処が無いとなると・・・どうやって覚える？

お姉さんから2人のザツクを受取り宿に戻ると、おばさんに怒られた。

曰く、「宿代を払って泊まらないとは何事だ！」ってことだ。確かに急に決めたからね。

機嫌を取るべく、これを皆で食べましょって出したクルキュルの肉で一騒ぎ。

「こんなの10年早い！」って、それほどクルキュルは恐ろしい相手らしい。

それでも、その晩に1階の食堂でハンター達に振舞われた焼き鳥は美味かった。

その夜、姉貴と話合って、やはり文字が読めないことが問題だと思見が一致した。

「明日も、ガイドが雇えるわ。クルキユルで大分稼いだからね。其の時に依頼用紙で文字の読み方を教えて貰おうと思うの。」

「いいんじゃない。あしたもミケランさんだともっといいけど。」

「そうね。いろいろ知ってるし、文字も読めるけど・・・最後に「にゃ。」って付けるのが可笑しくて・・・」

「ミーアちゃんも「ね」が「にゃ」になるよ。猫族の特徴かもね。」

そんなことを話していると夜も更けてきた。いろいろあったけど、ハンターって結構楽しいかも！

薬草採取と魚釣り

次の朝、宿のおばさんの有難いお小言とお弁当の包みを頂いて宿を出た。

おばさん曰く、「いいかい。小さなことからコツコツと・・・が基本だよ。」と、どっかで聞いたようなフレーズではあったが、その言葉に間違いはないと昨日の件で十分理解したつもりだ。

そんな訳で先ず雑貨屋に向かった。

採取がメインになればミリアちゃん以外に採取品を入れる籠も必要だ。それに薬草等によつては草の根ごと採取するものもあるはず。たぶん専用の何かがあるだろうってことでギルドに行く前に立ち寄ることになった。

「おはようございます」って雑貨屋に入るとおじさんがカウンタ―でパイプを煙らせている。

「薬草採取なんかを使う道具はありますか？」

「あるよ・・・これを皆使ってるな。ケース込みで15Lだ。」

そう言つて棚から取出したのは、長さ20cm位の金属のナイフみたいなものだった。

ナイフと違う点は、片面が湾曲してスコップみたいだし、横幅も7cmはある。でも先端は尖っているし、両側も軽く研いである。このままナイフとしても使えそうだ。

「では、これを3本と、小さな籠を1個ください。」

姉貴は、代金を支払つと俺に品物を受け取らせる。おじさんは、おまけだと言つて小さな砥石も付けてくれた。

籠に姉貴と俺のザックを入れて肩に掛ける。ミリアちゃんは背負

えるけど俺には籠が小さくて背負うのは無理だ。

ギルドに行くと、姉貴が早速ガイドの依頼をすることにした。

「すみません。またガイドをお願いしたいんですが・・・」

「はい。ちよつと待って下さいね。・・・え〜つと、キャサリンさんがいますね。待ってて下さい。」

お姉さんはそう言っただけで階段を上って行き、しばらくすると若い女の子を連れて下りてきた。

「彼女がキャサリンさんです。黒1つですが、魔法も使えますよ。」

「キャサリンです。水の魔法が使えますよ。」

「よろしくお願いします。私は、ミヅキ。そっちがアキト。そして、ミアちゃんです。」

「それで、今日はどんな依頼を行うんでしょうか？」

キャサリンさんはそう言っただけで首をチヨコンって横に傾ける。仕草的には、可愛いかも知れないけど・・・どう見ても姉貴よりは上だ。そんな仕草は卒業しないとイケないような気がする。

「前はアリット採取でしたから、出来れば簡単な採取系の仕事をしたいです。文字が読めないので選んで欲しいんです。」

「解りました。では掲示板に行きましょう！」

俺達はキャサリンさんに引きつられて掲示板の所に行くと、彼女は掲示板の下の方を探し始めた。

「薬草採取がありますね。依頼数は多いんですが、この季節なら何とかなると思いますよ。」

「どんな内容ですか？」

「え〜と、採取依頼。対象は薬草のサフロン30本以上、毒消し草のデルトン10本以上。報酬はサフロン：2L、デルトン：3L

です。」

「それは、何処に生えてるんですか？」

「日当たりの良い小川の土手等に生えてますよ。現物は現地で私が教えましょう。」

「では、それにします。・・もし時間があれば依頼書の読み方を教えてください。」

「いいですよ。では、出発しましょう！」

姉貴はキャサリンさんから依頼書を受取ると、俺の籠からザックを取り出しカウンターに持っていった。

カウンターでガイド料を払い、依頼書にハンコを押して貰うと、前のようにザックを預ける。これで、準備完了だ。

早速ギルドを出ると、村の門番さんに挨拶して、泉の森に向う。

姉貴は早速キャサリンさんに依頼書に書いてある文字の読み方を教わっているようだ。アリット採取の依頼書も取出して、キャサリンさんと話し込んでる。

俺とミーアちゃんの籠持ち組は、姉貴達の後ろをのんびり手を繋ぎながら歩いている。たまに振り返って俺を見る姉貴の目がちよつと怖い気がするのはいのせいだろうか・・

しばらく歩いていると十字路に出た。小川はこの先のはずだ。

木橋の架かっている小川に出ると、橋を渡って今度は川下に歩いていく。

「畑近くの薬草は農家の人の収入源ですからね。離れたところで採取です。」

そんなものかと思いつつも、皆でキャサリンさんに付いて行く。

村を出て2時間近く歩いただろうか、キャサリンさんが「ここで

「す。」って言って止まった所は、小川までならかな傾斜地が続く場所だった。

キャサリンさんは、土手の草むらを少し探して、2本の草を俺達の所に持ってきた。

「この、ギザギザ葉っぱで長いのが、サフロンです。そしてこの丸い葉っぱで短いのがデルトンです。」

俺的にはヨモギみたいなのがサフロンで、タンポポみたいなのがデルトンって覚えることにした。

「採取依頼ですから、根の近くで採取する必要があります。採取用のナイフはありますか？」

「これですね！」って姉貴は俺が降ろした籠から、スコップみたいなナイフ・・・（これからはスコップナイフと呼ぼう）を取出した。

「ありますね。持ってない時は皆さんのナイフや短剣をつかうことになると思います。」

「じゃあ、始めましょう。」って、皆で一斉に薬草採取を始めた。タンポポ、タンポポ・ヨモギ、ヨモギ・ヨモギ・・・って呟いてたら、「何の呪文ですか？」ってキャサリンさんに聞かれてしまった。

とりあえず、「早く見つかる、おまじないです。」って答えただけで、遠くで姉貴が笑ってた。

昼近くになったので、採取作業をひと段落して昼食を取ることにした。

近場で薪が取れないので、固形燃料でお湯を沸かす。

ポットのお湯が沸く様子を見て、「へえ、こんな便利なものがあるんですね。」ってキャサリンさんが感心してた。

シエラカップにお茶を入れて皆に配ると、姉貴が宿のおばさんに

作ってもらったお弁当を配る。お弁当の中身は・・・野菜と薄く切ったハムを挟んだ黒パンだ。

モシャモシャと食べていると、ピチヨン！って音がした。

「お魚がはねた！」

ミーアちゃんが水面を指差した。

「どんな魚なんだろうね。」って姉貴がミーアちゃんに微笑んでる。

「たぶん、リリックだと思います。この小川に結構いるんですよ。食べても美味しいですし・・・」

そう聞いては黙っていられない。

早速周囲を探す・・・あった。たまたたって走って行き雑木の真直ぐな奴を1本切取ると、枝を払って即席の釣竿を作る。

腰のポーチからサバイバルセットを取出すと釣針と糸を出す。糸を釣竿に結び、糸の途中に適当な小枝で浮きを作る。糸の先に釣針を結べば出来上がり！

釣針にハムの欠片を付けるとポチャンと水面に投げ込んだ。

後は、待つだけだ・・・

「お兄ちゃん、今ピコピコってなってたよ。」

「ミーアちゃん。まだ、待つんだ・・・」

皆が俺の後で水面の浮きを見詰めてる。

そして、浮きがグリーンって水中に沈んだ時、竿を持つ手を軽く返す。この動作だけで釣竿の先端は2m近く上がり、ガツチリと魚を釣針に掛けることが出来る。

たつまち、グン、グリーンっと釣竿を引き込まれる。結構な大物だ。適当にいなして魚を水面まで上げ、空気を吸わせる。これでおとなしくなるのだ。

岸边に近づけて、一気に取込む。陸に揚がった魚はバタバタ跳ねていたが、やがて動かなくなった。

「これって、マスだよな？」

「マスじゃなくて、リリックです。美味しいですよ。長持ちするように表面を炙るんですが・・・」

今度は、姉貴が素早く岸边で辺りの枯草を焚きはじめた。釣竿を作るときに払った小枝に内臓を抜いたリリックを差して炙り始める。

「次は？」って要求してるし・・・

でも、直ぐに次が来た！ 同じように取込むと姉貴に渡す。

今度は、内臓の抜き方をミーアちゃんに教えているようだ。串の刺し方まで教えてる。

ミーアちゃんが焚火の端にリリックを刺した時、更なる獲物を釣り上げた。

「ホントにお上手ですね。皆さん苦労して取っているんですよ。」

「釣をしらないんですか？」

「似たようなことはしてるんですが、さっき見たような曲がった針は初めて見ました。」

ひよつとして、直針つてやつ？ 真直ぐな針の真中を糸で結んで釣るって話は聞いたことがあるけど・・・

そんな事を考えながらも、次々と釣り上げる。それをミーアちゃんがせつせと炙っていく。

さて、こんなものとミーアちゃんの方を見ると小さな焚火の周りに15匹位魚が炙られている。

姉貴の方は・・・キャサリンさんと俺達が採ってきた薬草を分類し

ている。

「サフロンが40本、デブリンが25本ですね。採取完了ですが、戻りますか?」

キャサリンさんの完了確認で、姉貴が小さくガッツポーズをしている。ホントに子供っぽいんだから。

「アキトの方はどうなってるの?」

「大体、15位獲れたよ。売ればもつといいんだけど・・・」

「売れますよ。確か上のほうにそんな依頼がありました。誰かが依頼を受けていれば、食堂で買取ってくれます。」

まだ明るい内にギルドに帰ると、早速依頼完了の確認を受ける。

ついでにリリック獲りの確認をしたところ、依頼用紙を持ってくればいいとのことなので、早速掲示板からキャサリンさんが用紙を剥がしてきた。

「リリックは10匹以上で1匹5Lですね。」

数を確認すると15匹・・・10匹で依頼を完了し、3匹は持ち帰り、後の2匹は・・・

「あにゃー。アキト達にゃ。今日は、キャサリンと行ったにゃ。

私は飲みすぎて今日は休みにゃ・・・」

「これ、今夜キャサリンさんと食べてください。」

俺が2匹のリリックを差し出すとミケランさんの目が輝いた。

「リリック・・・リリックにゃ・・・リリックにゃ。」

万歳してる・・・今度は踊りだした・・・俺の両手を持ってぶんぶんしてるし・・・そんなに美味しいのか?

姉貴がお姉さんに頂いた報酬は、205L。

「キャサリンさん。今日はご苦労様でした。」そう言って、52Lを姉貴はキャサリンさんに渡した。

「ガイドの報酬は1割です。こんなに頂けません。リリックまで貰ってますし・・・」

「今日は1日、私達のパーティーの一員でしたから、報酬は山分けです。」

どうもありがとって、キャサリンさんはまだ浮かれているミケランさんを連れてギルドを出て行った。

また明日って、お姉さんに挨拶して宿に戻ると早速宿のおばさんにリリックを料理して貰った。

さらに盛られたリリックの香草焼き・・・絶品だ。

ミアちゃんが「こんな美味しいの初めて！」って言うてるし、姉貴もあまり好きではない魚料理を残らず平らげた。

ミケランさんが踊りだす訳だ。

ミケランさんの頼み事

食事が済んで部屋に帰ると、姉貴がにっこり笑って依頼書をオシリのレスキューバツクから取り出した。

「キヤサリンさんのおかげで、文字の読み方が段々解ってきたわ。」
「文字って言っても、ギリシア文字と楔形文字の合体型だろ。辞書も無いのに無理だと思ってたけど・・・」

「そうでもないのよ。先ずこの依頼書だけ・・・」
姉貴はザツクからノートとボールペンを取り出す。そして、ノートの文字を書き始めた。

「この文書には、これだけの種類の文字が使われてるわ。そして今日の依頼書の文字を追加すると・・・これだけなの。全部で30種類。アルファベットより多いかも知れないけど、濁音、半濁音、伸ばす、詰めるの文字が独立して存在することに注意すれば、殆どローマ字読みが出来るのよ。」

「ちよっと待って、それだとこの世界は日本語が母体になってることになるよ・・・確かに、日本語で会話が通じてるけど・・・」

「あまり気にしないことね。今は読む糸口が出来た事を喜ぶべきだと思うけど。」

「それと、数字はこの楔形文字ね。1から9までの文字はこうなってるわ。それで、ゼロの概念が此処にはあるのよ。1の文字の横にこの文字を付けると、10になるし、更に横に同じ文字を付ければ100になるの。」

「10進法をつかつてるのか・暦も出来たら解るといいね。」
「その辺はおいおいと教えて貰うわ。ところで明日なんだけど、
ハンター業はお休みして、ミアちゃんの服を買おうと思うんだけど、
いいかな？」

姉貴はザックにノート類を仕舞うと、姉貴のベッドで早々とお休み中のミアちゃんを見ている。

確かに、ミアちゃんの服は碌なもんじゃない。シャツだって、靴だってそうだ。

本来、採取みたいな依頼はそれ程高額収入にはならないはずだが、運がいいのか悪いのか、そこそこの収入を得ている。

ここは、ちゃんとした服装をそろえてやったほうがいいに決まってる。

「俺は、いいと思うな。明日の朝、宿のおばさんに仕立て屋さんを聞いてみたら？」

「そうだね。じゃあ、おやすみなさい。」・・・「おやすみ！」

次の朝、俺達は部屋の扉をドンドンって叩く音で眼が覚めた。
部屋のカーテンの隙間からはまだ朝日が差し込んでいないし、腕時計は6時を指してる。

誰だこんなに早く・・・と思いながらも、服装を整えて姉貴達の方も終わった事を確認して、扉の横に歩いて行く。

姉貴達が扉の正面からずれた事も確認する。

「こんなに早くから、何方ですか？」

「ミケランにゃ。開けて欲しいにゃ。」

俺は採取鎌を手に取ると、ゆっくりと扉の鍵を開けた。

ボタンって扉が開くとミケランさんが入ってきた。どうやら1人のようだ。

「聞いて欲しいにや。ギルドに大量のリリック獲りの依頼が入ったにや。手伝って欲しいにや。」

急いで話すミケランさんの迫力に負けて、手伝う事を約束しちやっただけど・・・

今日は、ミアちゃんの服を買う日って決めてただけど・・・どうしよう！

「ミケランさんは1人なの？」

「キャサリンが一緒にや。」

姉貴はちよつと考えて、俺を指差した。

「アキトとミケランさんは先行。私とキャサリンさんはミアちゃんの服を買ってから行くわ。」

「それと、ちよつと待っててね。」

姉貴はザックを漁りだした。ここに入れといたんだけど・・・等と言っているが何が出てくるのかな？

「はい！」って渡されたものは、俺の愛用の釣竿だ。4.5mのカーボンロッド振り出し式だ。仕舞えば50cm位に短くなる。

万能竿だけど先調子で山女から鮎まで何でも狙えるのがウリだったんだけど。何で姉貴のザックに入ってるんだ！

続けて、「これもね。」って渡されたのが小型のタックルボックス。当然、俺のだ。確かに竿だけじゃどうしようもないけど・・・

とりあえず、ポンチョに竿を差し込んで、ミケランさんと出かけることにした。

1階の食堂に下りると、キャサリンさんがお茶を飲んでいた。

「ごめんなさいね。昨日捕ったりリリックを町の商人が聞きつけてギルドに依頼したみたいなの。20匹で2000L破格の報酬だわ。」

「確かに美味しい魚でした。」

「それに猫系の獣人は、あれに目がないのよ。ミケランが一生懸命なのは、また自分が食べたいからなのよ。」

「そんなこと無いにゃ。・・駆け出しハンターにいい依頼を紹介したいだけにゃ。」

ミケランさん必死の弁明ですが、信じる人は誰もいない。

それでもキャサリンさんはミケランさんの話を聞いてあげてる。優しい人なんだなって思ってしまう。

台所から姉貴が出てきた。俺の所に来ると、「餌はこれでいいでしょ。」ってハムの切れ端がたくさん入った紙袋を渡してくれた。

「お弁当は、後で3人で届けるから、頑張つてらっしゃい！」

姉貴とキャサリンさんに送られて、俺とミケランさんは小川へと向う。

まだ朝早い時間だけれど、森へ向う小道は畑に行く農家の荷車や高額依頼料に目が眩んだハンター達が歩いている。

「早く行かないとみんな捕られちゃうにゃ。」

ミケランさんがそんな事を言っつて俺を急がせるが、皆はどうやって捕るんだろう？

キャサリンさんはそんなに釣れないって言っつてたけど、何か秘策でもあるのだろうか？

「ところで、ミケランさんはどうやって、リリックを獲るの？」

「私は獲らないにや。アキトが獲るのを見張ってるにや。」

自信を持って答えられてしまった。でも、こうもハンターが多いとトラブルが起きる可能性も有るのだろう。そう考えれば、黒1つのミケランさんは頼もしい用心棒と言える。

小川に架かる橋を渡って川下に歩いて行く。

「この辺で昨日はリリックを獲ったんだ。ほら、焚火の跡があるでしょ。」

ミケランさんに教えたけど、そこにはもう何組かのハンターが釣をしていた。

釣と言っても竿を使わずに、針に餌を付けて、糸の途中に石をつけた奴を川に投げ込むやり方だ。そんなんで釣れるのかと不思議思う。

更に川下へ行くと、ちょっとした木立の蔭が淵になっている場所があった。

小川の水の色がその辺りだけ紺色に変わっている。ウム・・・いいポイントだ。

「ミケランさん。ここで釣るよ。ホントに見てるだけなの？」

「そうにや。私が見張ってるから安心して獲ってにや。」

ポンチヨから釣竿の袋を取出して、腰のポーチからタックルボックスを取り出す。・・・たぶんこれでいいはず・・・と虹鱒用の仕掛けを引張り出して、竿に糸を結ぶ。

タックルボックスは邪魔になるのでポーチに戻す。

竿を伸ばしながら、糸巻きから糸を手繰りだす。全部出し終えると、丁度釣針の位置が手元にくる長さだ。

適当に浮き下を調整して、釣針にハムの欠片を刺す。

そして、水の色が変わる辺りにポチャンっと投入する。

直ぐに浮きがスーっと引き込まれる。サッと手首を返すと腕にグググーっと引きが伝わる。

竿の弾力で魚を弱らせて手元に寄せると一気に引き抜く。・・・
匹ゲット！

「凄いにゃ。もう一匹目にゃ。」

ミケランさんは嬉々としてリリースの内臓をナイフで取ると、茅みたいな長い茎に魚を突き刺して次を期待している。

餌を付け直し投げ入れると直ぐに当りが来る。

次々と釣り上げ、ミケランさんに渡していく。それをミケランさんが片っ端からナイフで処理していく。何か流れ作業みたいだ。

「しかし、見ていてあきねえな！」

うん？振り向くと、知らない壮年の男がパイプを煙らせながら、俺達の作業を見ていた。

「何時からいたんにゃ。見てもあげないにゃ。」

ミケランさんが早速抗議をしているが、相手は無視してるみたいだ。

「さつきからだが、そんな獲り方は始めて見るな。」

ちよっと一休みしたかった所なので、一旦竿を下ろした。

背中のグルカナイフを抜くと、雑木を払って薪を取る。男が座ってる辺りが平らなので、薪を重ねて焚火を作った。

早速、ミケランさんがリリースを串刺しにて遠火で炙り始めた。

ポンチョからポットを出すと、水筒の水を入れて焚火の傍に置く。

「コップは持っていますか？」
俺の質問に「ああ、持ってる。」と答えると、男は焚火に寄ってきた。

銀のケースからタバコを1本取ると焚火の薪で火を点ける。
適度な労働の後の一服は格別だ。・・美味い。ミケランさんも一服してる。

「その煙草も変わってるな。パイプ無しで使えるのか・・」
男は興味深々だ。

「始めまして。俺はハンター初心者のアキトと言うものです。あちらのミケランさんの指導を受けています。」

「おお・・ご丁寧に。俺は、グレイ。黒2つのハンターだ。ギルドに行く今日は小川が面白いと言うので来て見たが、なるほど来たかいが有った。」

ミケランさんは黒2つの言葉に安心したようだ。ハンター同士の争いはご法度。殺してもすればギルドが国中に討伐隊を組織するって聞いたことがある。

「もし良かったら、アキトのナイフを見せてくれないか？」

「これですか？」

俺はグルカナイフをグレイさんに手渡した。
握りを確かめ、振った時のバランスを見て、最後に刃先をじっくりと見ている。

「これは、凄いな・・俺もナイフを使うがこんなナイフは初めてだ。是非これを作ったドワーフを教えて欲しいものだ。」

男はそう言う。「ありがとう」って俺にナイフを返してくれた。

「これは、ドワーフではなく人が鍛えたものです。でも、その人にもう逢う事は出来ません。」

「そうか、亡くなったか・・・しかし、人の身でそれ程の鍛造が出来るものがあるという事は、世界は広いということか・・・」

グレイさんは残念そうに言った。

「これでも食べて諦めるにゃ。」

ミケランさんが串焼きのリリックを1本グレイさんに手渡した。

俺にも1本くれたけど・・・これって依頼品だよねって、ミケランさんも1本食べてるし・・・

釣りの見物人

「え！ パトロール？」

グレイさんは、串焼きにしたリリックを俺が入れたお茶を飲みながら話してくれたことを要約するとそんな感じだ。

リリックの高額買取で村のハンター達が一斉にリリック獲りに出かけたらしい。大勢のハンターが集まるとちよつとした事で争いが起きる可能性が十分にある。

いくらハンター内の掟が、相互不干渉であつてもちよつとした喧嘩までご法度であつては息が詰まる。しかし、ハンターは常に武器を携帯しているから死人が出るような喧嘩になる前に仲裁してやる必要があるとの事だ。

「村のハンターで黒の上位者3名が見回ってるってことだな。全く迷惑な話だが、リリックは食えるし、珍しい物も見ることが出来た。俺的には満足している。」

「ハンターについて少し教えていただけませんか？ なったばかりで解らないことばかりなんです。」

「ああ、いいとも。」

そんな事で新たに解ったことは、黒レベルのハンターは毎年3回は、低料金でギルドの求めに応じなければならぬという事。これは、ミケランさん達のガイドやグレイさんのパトロール等がそれに当たるという事だ。

でも、技量的に低い黒レベルと、高い技量を持つ銀レベルには該当しないようだ。最も、銀レベルは王国に数人とのことだから、いろいろと忙しいのだろう。

更に、ギルドの緊急要請という全レベルハンターの一斉招集があ

る。これは、魔物の襲来等が発生した場合等に王国の軍隊に一時的に編入されるもので、毎年何処かの国で行われているとの事だ。召集期間中の食事と住居は提供されるし、召集期間に応じた報酬も支払われるとのことだが、その戦いで命を落とす若者も多いとの事だ。

「脅かす訳じゃないが、黒5つまではこの村にいたことだ。人口が多ければ多いほど魔物襲来の可能性が高まる。獣討伐を数回引受けて自分の力量を確認しておけ。」

「アキトはガトルや、イネガルこの間は、クルキユルも倒したにや。」

ミケランさん・・・この場でそれを話すのはどうかと思いますが・・・

「ホントに赤3つなのかな？俺でもクルキユルは願ひ下げだぞ！」

「運が良かっただけです。ミケランさんもしましたし・・・」

「ちょっと、付き合え！」

俺の弁明も空しく、グレイさんは俺を立たせると、自分の装備を外しはじめた。

「どうした。ちょっとした小手試しをしたいんだが・・・武器は無しだぞ。」

ぼうつと立っている俺にグレイさんはそう言って催促する。

仕方なく装備ベルトのバックルを外して、サスペンダー毎脱ぐように装備を外した。

軽く屈伸をして準備運動を終了させる。

焚火から離れてグレイさんが立っている。スタスタとその前に行き、軽くお辞儀をした。

グレイさんを前にすると、やはり凄い威圧感だ。

身長は俺より少し高い位だが、筋骨隆々として格闘技の選手みたいに見える。

2 m程の距離を取って、左手を低く前に出し、右手を後方上に、そして体を低く構える。

「始めて見る構えだが、それでいいのか。・・・行くぞ!」

言った時にはもう俺に向って素早く足を踏み出して顔面に上から拳が向ってきた。

左手で、外側に撥ね退けるように回避すると同時に相手の手首を握る、体を半回転させると同時に左手を捻りながら右手でグレイさんの肩を軽く押し上げると・・・グレイさんの体が前のめりに回転して地面に叩きつけられた。

「何をしたんだ。魔法か?」

「グレイさんが自分で自分を投げたんですよ。腕を折られないように体が反応したんです。」

「そうか・・・詠唱も無しに魔法は使えんしな。・・・行くぞ!」

今度は回し蹴りで俺の脇腹を狙ってきた。海兵隊のマーシャルアーツみたいだけど、この手の攻撃方法は簡単に対処できる。

半歩下がって体を半回転させると相手の後が取れる。更に半回転させて同じように回し蹴りでグレイさんの後頭部を狙う。

グレイさんは分かっていたように両腕を交差させて俺の蹴りを防いだが、それは俺も予想していた。

一気に体を落とすと、両腕で体を支え両足でグレイさんの膝を蹴り抜く。

「ウガア!」って叫んで俺のほうに倒れてくるところを体を転がして下敷きになることを防いだ。

と、其処へ、ドドオーン!!と爆炎が轟いた。

慌てて、 그레이さんは飛び起き俺と共に辺りを見回す。

「コラー！ 何やってるの2人とも。喧嘩はダメでしょ！！」
デカイ声が遠くから聞え、何人かの人影も見える。走ってくるその姿が大きくなると・・・姉貴達だった。

やって来たのは4人。姉貴達とエルフの女性だった。

「はじめまして。マチルダです。」

と言った後は、 그레이さんへの口撃だ。まるでおれの母さん並に威力がある。みるみる 그레이さんが頂垂れ始めた。

「あのう・・・喧嘩してた訳じゃないんですけど・・・」
俺が弁明しようとしても、「この際だから言い聞かせてるんです。」の一言で、更なるお叱りを 그레이さんに浴びせている。

とりあえずほっといて、姉貴達に近づいた。ミアちゃんが姉貴に隠れている。

「ほらほら、ちゃんとお披露目しないと・・・」
姉貴が後のミアちゃんを押し出す。

うん。可愛い・・・薄茶色の綿のシャツとパンツ。上着はなめし皮のワンピースだが、皮の縫目を全て一つ一つ縛って垂らしているからインディアン少女のようだ。足には短いブーツを履いている。腰のベルトには俺製作のバッグとスコップナイフのケースが腰の後ろになるように取り付けてある。

「可愛いよ。ミアちゃんは何を着ても似合うね。」
そう言ったら、顔を赤くして素早く姉貴の後に隠れてしまった。

キャサリンさんはミケランの傍で状況確認をしているようだ。
どうやらメンバーが揃ったみたいなので、水筒の水をポットに注ぎ足してお湯を沸かし始まる。

「あのう・・・お昼と一緒に食べませんか？」

姉貴が取込み中のマチルダさんに声を掛ける。

「すみません。内のグレイは直ぐにこうなるんです・・・」

「ありがとう、頂くよ。」

2人も焚火の傍にやってきた。グレイさんは少し足を引き摺っている。それを見たキャサリンさんが急いでグレイさんに近づいた。グレイさんの引き摺っていた足に右手を当てると何やら呟いている。

「サフロ！」

最後に言った言葉と同時に右手が光ったかと思うと、キャサリンさんが立ち上がった。

「癒しの魔法を掛けましたが、どうですか？」

グレイさんは真直ぐ立ったり、ピョンつと跳ねたりして足を確認している。

「大丈夫だ。ありがとう、助かった。」

「私からも、礼を言います。まさかこんな所に水の魔法の使い手がいるとは思いませんでした。」

お弁当は何時もの黒パンサンドにお茶だけど、後から来た人達にはリリックの串焼きが1本づつ追加だ。俺達は先に頂いたんだけど、ミケランさんは羨ましそうに姉貴達を見ていた。

「ところで、どれ位釣れたの？」

「これだけにや。20匹以上あるにや。」

キャサリンさんの質問にミケランさんが自分の事のように報告する。

「凄いですね。橋の下の方で獲ってる人達はまだ数匹ですよ。」
マチルダさんが驚いている。

「そうだろう。だから俺もここで見てたんだ。」

「見てるだけならそうしなさい。何で自分より格上のハンターと手合わせなんかするんですか。」

「でも、アキトは赤3つだぞ。おれの方が格上だ。」
自信を持って答えるグレイさんにマチルダさんは驚いたようだ。

「たぶんグレイさんよりも技量が上の方でも、素手の攻撃は防がれると思います。私達が習得した武術は相手の攻撃を利用した攻撃ですから、強ければ強い程反撃力が上昇します。」

「最初に投げ飛ばされたあれか？ 確かに何時投げられたか分からなかったが。そういえばアキトは俺が自分で身を投げたと言っていたが。」

「その通りです。私達には不自然な形を自ら本に戻す自然な動きが備わっています。ですから相手に不自然な体制を強いれば・・・」

「自分で転がるのか・・・とんでもない武術だな。言われてみればその通りだと納得するが。」

「でも、欠点が1つ。自ら攻撃できない。ですから、さっきの技も防衛手段に特化した技なんです。」

姉貴とグレイさんの会話でマチルダさんの疑念も少し薄らいだよ
うだ。

少し変わった護身術とでも思ったみたいだけど、合気道の本質は
そうではない。そこは姉貴も言う事はなさそうだ。

昼食を終えると、また俺は竿を握り、リリックを釣り始める。

たちまち数匹を釣り上げると、マチルダさんが驚いて見ていた。

「お昼をどうもありがとう。まさか、ここでリリックを食べられるとは思わなかったわ。」

マチルダさん達は俺達に丁寧に礼を言って、小川の上下に分かれて歩き始めた。

今回のリリック獲りの監視が目的だと言っていたし、本来の任務に戻ったようだ。

しばらく釣り続けたが、入れ食い状態なのでたちまち焚火の周りはリリックで一杯になった。

竿を収めて片付けを始める。

「沢山獲れたにや。」

ミケランさんが喜んでる。それをキャサリンさんが苦笑いしながら見てる。

姉貴が背負ってきた籠に、岸边に生えていた大きな葉っぱを敷いて戦利品包む。これなら、周りから注目されずに済みそうだ。

小川を上流に辿って橋の方に歩いていくと、ハンター達が小川の傍にいっぱい集まっている。

人は多いのだが、釣れてるところを一度も見ずに橋についた。やはり、リリック釣りはこの世界では難しい依頼なのだろうか。

そんな事を考えながら帰路についた。

ギルドに収めたりリックは30匹。俺達の人数分は差し引いてだ。それでも、2匹程余計に貰ったミケランさんは大喜びだ。

カウンターのお姉さんから貰った銀貨3枚をミケランさんは姉貴に差し出したが、姉貴は1枚だけ貰って、残りをミケランさんに渡した。

「こんなに貰えないにや。獲ったのはアキトにや。」

「だから、1枚貰いました。今回の依頼はミケランさんが教えてくれたものだし、リリックを処理したのはミケランさんですよ。」

宿に帰るとおばさんにリリックを渡し、1匹だけミアちゃんに料理して貰った。2匹貰えると知ったおばさんの喜びもミケランさん並だ。

聞けば、若い頃に食べたのが最後だと言っし・・俺達漁師になっ
たほうが良いのかも思ってしまっ。

畑を荒らす白い奴

ハンターの就寝時間は結構早い。

これは一日中、出歩いていることから結構疲れるためだ。それに、ギルドでの依頼は早い者勝ちなので、早起きして依頼を受ける者が多いためだと思う。

「依頼を受けてから朝飯が普通だな。」ってグレイさんも言っていた。

郷に行つては郷に従えの言葉を実践しようと思つたと早々とベットには入つたが、今までの生活習慣を急に変えることはできず、しばらくは姉貴と話をすることになる。

今夜はグレイさんに教えて貰つた一斉召集と魔族の話をした。

「そうなの。一斉召集についてはギルドでの話に無かつたわね。明日聞いてみましょう。それと魔族だつて、どんなのかな？」

「赤らつまではこの村に居ろつて言われた。人が多いほど可能性が高いそうだよ。」

「まだ3つだから、しばらくこの村にお邪魔することになるわね。」

「いや、ミアちゃんが1つだから、まだまだ居る事になると思ふけど・・・」

「ミアちゃんつて武器は使えないのかしら？」

「あの部落ですつと薬草採取で暮して、危険が迫れば木に登つてみたいだし、使えないと思ふよ。」

「でも、何時かは使う事になると思ふの。ミケランさんに相談してみようか。同じ猫族みたいだから。」

「そうだね・・・じゃあおやすみなさい。」

そんな訳で早速次の日はギルドに押しかけ、ガイドを依頼する。

「昨日はありがとにゃ。」って言いながらやってきたミケランさんに早速相談を持ちかける。

「そうにゃ・・・猫族は素早いにゃ。だからこれを使う人が多いにゃ。」

そう言って、腰の片手剣を叩く。

やはり、片手剣か・・・でも、ミアちゃんには重そうだけど・・・

「最初からミケランさんみたいないな剣じゃないとダメですか？」

「いろんな種類があるにゃ。でもアキトみたいなのは見たことないにゃ。」

「150L位で買えますか？」

「そこそこの物が買えるにゃ。武器屋に行ってみるにゃ。」

皆でぞろぞろと武器屋に行く事になった。もっともたいした距離ではない。ギルドの通りの向かい側なのだ。

「おはようございます。」って入ってみると、有るわ有るわ、陳列棚いっぱいにあるんな武器がそろえてある。

カウンターの奥から男が出てきた。

「おはよう。誰の武器だね。」

「この子の武器が欲しいんですが、片手剣で軽そうなのはありますか？予算は150Lなんですけど・・・」

「それなら、この辺だな。」

そう言って、武器屋のおじさんは3本の片手剣を棚から下ろしてカウンターに並べた。

それぞれが特徴的だ。両刃の直刀、片刃の直刀、少し反りのある片刃。

持ってみると、バランスが良いのか以外に軽く感じる。

さて、ミケランさんの持つてるものは・・・とミケランさんを見ると、俺の視線に気が付いたようだ。

「私のは、これにや。」って腰の片手剣を抜いた。店が狭いので直ぐに戻したけど、少し反りのある剣だった。

「猫族の人には、これが人気だね。」

おじさんも、反りのある片手剣を一押しする。

ここは同族のミケランさんに倣って、武器屋お勧めの剣を購入する事にすべきだと思って姉貴を見ると、顔に片手を当てて考えてる。

「何か不満なの？」と姉貴に聞いてみた。

「これだと、ミアちゃんのベルトに下げる形でしょ。まだ小さいから歩く時邪魔になるし、イザという時に走って逃げる事ができないと思って・・・」

「ははは・・・そんなことを考えてたのかい。そこまで考えてくれる者が一緒だと嫌ちゃんも安心できる。その答えは簡単だ。ケースの下の方に金属のリングがあるだろう。それを利用すると、こんなふうに背中に背負う事が出来るんだ。」

武器屋のおじさんは近くの引き出しから革紐を取り出し、ケースへの取付けを見せてくれた。

「それでは、この剣をお願いします。」

姉貴の返事に「分かった。」と言って、ミアちゃんの背中に取り付けてくれた。

よく見ると、革紐ではなくベルトだ。小さな肩当ても付いている。最後にケースのリングに革紐をつけて腰のベルトに結び付ける。

「よし、なかなか似合うぞ。それ程重い剣ではないが、走ってずり落ちないように腰のベルトに紐で結んでおいたぞ。」

「ありがとうございます。」って姉貴は代金を支払う・・・ぴつたり150Lみたいだな。あれ、RPGだと値切るのが基本のような気がするけど・・・

ミーアちゃんが片手剣を背負った姿を満足そうに姉貴達は見て
いる。

「ミーアちゃんの装備が出来たところで、簡単な討伐依頼をした
いんですが。ミケランさん、また選んで貰えませんか？」

「分かったにや。ギルドに行くにや。」

ギルドの掲示板をミケランさんが見ている。最も、赤レベルの討
伐依頼なんてあまり無いみたいだ。

「これが良いかにや。」

ミケランさんは掲示板の下の方から1枚の依頼書を外した。

「カルネル退治にや。畑のカルネルを退治して欲しい。報酬は5
0Lにや。」

「あのおう・カルネルってなんですか？」

まだ、俺達には名前で姿が分からない。アリットみたいなことに
ならないとも限らないから、姉貴の質問は当然だ。

「カルネルは植物にや。カルネって言う植物が魔気で変異したの
がカルネルにや。大きさはミーアちゃんより頭1つ小さいけど、動
き回って攻撃するにや。」

どんな植物だそれ！って感じだけど、依頼書には赤丸が3つ付い
ている。赤3つで丁度いい依頼ってことだから、ミーアちゃんにギ
リギリ対処出来るレベルだ。

俺達で弱らせ、ミーアちゃんで止め。・・どちらかと言うとレベ
ルアップの裏技みたいな対処方法のような気がする。

早速、カウンターのお姉さんにハンコを押して貰うと、ザックを
預けて4人で指定された畑に出かける。

畑の位置は泉の森へ行く小道を歩いて途中の十字路を北に向った
所だった。

今回、姉貴はクロスボアを預けてきた。身軽に手作りの短槍と短

刀・・・俺は短刀とは認めない、あれは小刀だ。＼が目に付くけど、丸めたポンチヨの下にはM36があるはず。

山に向って段々畑が広がっている。道は緩やかなのぼり坂だ。

いくら緩やかでも長時間歩くと結構キツイ、少し汗ばんできたのは気候のせいばかりではないはずだ。

「ここにや。ほら、あそこにいるにや。」

ミケランさんが立止まって、畑の森の方角を指差す。

姉貴は双眼鏡を取出すとその方角を見て、一瞬吃驚したようだったが、俺に双眼鏡を渡して見るように促した。

そして、双眼鏡で見たものは・・・

大根だ！大根が群れている。白くて細長く、頭には緑の葉っぱも付いている。でも、小さいながらも目と口があるようだ。そして二本の足？ですばしこく動いている。腕は体に比べて長細く、手は無い。畑の畝に栽培されたホウレン草みたいな野菜を腕で丸め取って食べている。歯もあるみたいだ・・・

「カルネルは素早く動いて噛付くにや。それに、腕が伸びて絡みつくから注意するにや。」

「でも、その前に一休みするにや。」

ミケランさんはそう言って、畑の畦に腰を下ろし、水筒の水を飲んでる。

俺達も同じように一休み。

「作戦を立てるにや。畑の上からアキト。下から私。真中がミツキとミーアちゃんにや。」

「3方向から退治していくにや。畑を出て森のほうに逃げ出した

ら私が素早く森側に回り込むにや。その時はミツキが私の場所に急いで移動するにや。」

一箇所に追込んで最終的には包囲殲滅するって事だよな。・・ミアちゃんも1方向を最終局面で担当することになるけど、範囲が狭いなら、俺達が協力出来るから問題ないだろう。

「アキトと私が移動し終えたら合図するにや。そしたらミアちゃんと前進するにや。」

ミケランさんに俺達は揃って頷くと、俺は畑の上の方に急いだ。大根達をほぼ真下側に移動すると姉貴に向かって手を振った。畑の下側でミケランさんが手を振っているのが小さく見える。

姉貴達がカルネルに向って進んでいく。ミアちゃんは剣を抜いているみたいだ。日に当たってキラキラ光っている。

俺も、採取鎌を持って下に下りていく。見た目ダイコンだし、強く叩けば砕けるんじゃないかな。

「ウニヤー！」って叫びを上げてミケランさんがカルネルを両断した。そして、次のカルネルもぶった切っている。

俺も、「オオリヤー！」って手近なカルネルをぶつ叩く。ゴリ！って鈍い手ごたえがあってカルネルが数辺に割れる。

先の鍛造鎌による衝撃で面白いようにカルネルを破壊できる。

姉貴の方を見ると、槍では両断できないみたいだけど、傷を負わせてふらついているカルネルをミアちゃんが剣で両断している。

ミケランさんが森の方に移動を始めた。それに合わせて姉貴が右に回りこみ始める。

俺は素早く左側のカルネル達を倒すと、前進しながらミアちゃんの方に少しづつ移動する。

カルネルの数は多いけれど、一方的な殺戮に近い。それでも、ミ

「アちゃんはチョコチョコと移動しながら懸命に剣でカルネルの胴体を輪切りにしている。

やはりハンターなりたてには丁度良い討伐だなんて考えながら、包囲陣を狭めていく。

そして、最後のカルネルを「エイ！」ってミアちゃんが倒した所で、ミアちゃんの始めての討伐は完了した。皆で倒したカルネルは数十匹を越えている。

姉貴と良かったねって喜んでいると、ミケランさんが俺達を叱責した。

「油断しちゃダメにや。．．これだけの数が揃ってれば、カルネラがいてもおかしくないにや。」

そして、周囲を窺っている。
カルネラって何？って聞こうとしたところに、畑の土をドバツ、ドバツって割りながら、白い触手がウネウネと5本現れた。俺達を取り囲んでいる。

「カルネラの触手にや。触手を攻撃して本体を出すにや。．．アキト、叩いてもダメにや。」

ミケランさんが言った時にはもう俺は触手の1つに採取鎌を叩き付けていた。

ブヨンって手ごたえがして採取鎌が弾かれる。

鎌を投出し、グルカナイフを左手に持ち、改めて触手に斬りつけると、スパツって両断出来た。

地面に落ちた触手がウネウネってしばらく動いている．．ちよつとグロい。

半分の長さになった触手を更に半分にする。俺の身長程に短くなつた時、ズズズウーって畑が割れて本体が現れた。

直径1.5m、高さ4m程の大きさだ。形はカルネルと同じだが、

俺を見てる眼光は鋭く、直径1m程の口には鮫みたいな歯がびっしりだ。

「カルネラは赤5でも苦勞するにや。少しづつ切り刻むにや。」
ミケランさんの指示で触手で叩かれないように本体を少しづつ刻んでいく。

ダイコンのぶつ切りを作っているような感じだが、結構短くなった触手をブンブン振り回すので、ヒットエンドランが俺達の攻撃方法だ。

触手が有って1人の状況では確かにカルネラは脅威だろう。でも、触手を無くした状態では素早く動く事も出来ず、噛付き攻撃だけになることから、4方向からの攻撃で十分対処できる。

最後は殆どタコ殴り状態であったがどうにか倒すことが出来た。

動かなくなつたカルネラの頭部の葉っぱの下辺りをミケランさんが剣で何度も突き刺して何かを探っている。

「ここにや！」と言つたかと思うと、剣で抉るように何かを取り出した。

「カルネラになると魔気が結晶化するにや。大概是頭辺りにあるにや。」

そう言つて姉貴に小石程の球体を渡した。

「これって？」

「魔石にや。濁つた赤・品位が低いにや。けど換金できるにや。」

「魔石は、高い品位になると透き通つた紫になるらしい。でも、低レベルの魔物だとこんな物らしい。」

「カルネルやカルネラつて魔物なんですか？」

「そうにや。植物や獣が魔気を吸い込んで魔物になるにや。人もなるときがあるにや。」

魔物は生態系から逸脱した突然変異種と考えればいいのか？
そうすると、かなり突拍子もない能力を持つものもいることになる。
これはあらかじめ調査する必要があるかも知れない。

畑はめっちゃめっちゃになったが、依頼書には畑の事に触れてないからこれでいいのだとミケランさんが説明してくれた。

「カルネルを土に埋めれば良い肥料になるにや。後は農家の仕事にや。」

なんて言っている。

でも、依頼書の依頼内容は良く読む必要があるそうだ。ハンターは依頼書の通りの仕事をする。何か契約社会の縮図を見ているようだ。

ギルドで依頼終了の報告をした後で、魔石の換金を頼むと100Lになった。都合150L。ミケランさんに40Lを分けて、ミアちゃんのデビューは無事終了した。

初めての一斉召集

朝からカウンターの姉さんとお姉さんと俺達は、ギルドの小さな部屋で今までの疑問点を纏めて聞いている。

依頼を受けるためにギルドに行ったが、俺達のガイド役になっていたミケランさんは村を離れていた。そういえばガイドを何回かするの黒レベルの仕事みたいな事を言っていた。

そんな訳で、ハンターとしての疑問点に答えてくれる人がいなかったたので、カウンターの姉さんに相談した所、ここで聞きますつて連れてこられた。

俺達が聞きたい事は、3つある。1つはギルドの一斉召集。2つ目は、魔獣とはなにか。そして、俺達が知らないその他のハンターに関わる事項だ。

「先ず、一斉召集ですが、町村のギルドの求めに応じて、その町村にいるハンター達が同じ依頼を受けることを言います。多くは魔獣等により町村が襲われる恐れが高い場合召集します。ハンターレベルが赤5つ以上に者が対象となり、それ以下のレベルについては自由参加なので、貴方達はまだ召集範囲ではありません。召集が発令された場合に参加しない場合は罰則として一定期間ハンターの資格を停止されます。近年での召集例は2年前にエントラムズ公国のカレイム村で起こりました。魔獣襲来により召集されたハンターは13名。内4名が死亡しています。このマケトマム村では村創立以来起こっていません。でも、ある程度レベルが上がって、旅立つ者には今の話をしています。」

「次の、魔獣ですが、大気中の魔気を吸収して体が異常に発達した獣や植物を一括して魔獣と呼びます。魔獣の上位に位置するものは、取り込んだ魔気を結晶体に変化させることがあります。この間

のカルネラが持っていた球体です。これは魔法の補助効果を持つていることからギルドで買取ります。色は赤から紫まで変化に富んでおり透明度の高いものほど高額です。」

「最後に・・・そうですね。ギルドカードを持つハンターは税金の義務がない。それに、ギルドカードは身分証としての機能持っているので、他国へ移動する際にも無審査で出入りできること位でしょうか。」

ハンターになって直ぐには関係ない話のようだ。これらの話はハンター内では暗黙の了解事項であり、面と向って質問されたのは初めてらしい。

確かにハンターギルドのシステムを小さい頃から見聞きしていれば当然の事かも知れないが、俺達に知る術はない。こうして聞いて確認するしか方法がない。

「話を変えますが、依頼書に書かれた採取対象や、討伐対象等を詳しく知るにはどうしたらいいですか。・・・ガイドを雇うのが一番なんです。何時も雇うわけには・・・」

姉貴が少し俯いて小さな声で聞いている。少し同情を誘ってるみたいだけど・・・

「凶鑑を購入しますか？ ある程度の知識は得られると思います。」

「凶鑑なんてあるんですか？」

俺達は吃驚した。それなら何で早く教えてくれなかったんだ。

「でも、売れたのは去年1冊だけだったんです。王都の子供向けに編集したので、町村の子供達なら誰でも知っていますし・・・」

「買います！おいくらですか？」

「ちょっと待ってください。」ってお姉さんは部屋を出て行った。姉貴と顔を見合わせ、ため息をつく。何で今頃って感じた。

しばらくすると、ちよと黄ばんだB5サイズの本を持ってきた。

「これが凶鑑です。王都の魔道師が複製したものです。が原本と全く同じです。」

頁を捲ってみると、カルネルがあった。人間を片側に、カルネ、カルネル、カルネラと大きさが変わるのが一目でわかる。内容も、魔獣でカルネラが魔石を持つ事まで書いてあるし、触手注意と但し書きまできちんと記載されている。

その他の頁でも似たような構成で非常に解りやすい。

「あのう・・・お値段は？」

「売れ残りなんで、半額の100Lでどうでしょうか。」

姉貴は即決で支払いを済ませると、腰のレスキューバックに収納した。

「今の所は他に疑問はありませんが、解らなくなったらまた教えてください。」

「分かりました。朝晩はハンターの方達で忙しいんですが、日中なら時間もありませんから。」

「それでは、失礼します。」

姉貴の隣で爆睡中のミアアちゃんを起こしてギルドを後にした。

「ミアアちゃん。ミアアちゃんが持つてる短剣貰っていいかな？」

「もう使わにゃいから良いけど・・・にゃんにするの？」

「お姉さんの武器を改造したいの！」

また何か考えたみたいだっって目を姉貴に向けると、

「アキト、この槍をクナイから短剣に変えてくれない？」って言われてしまった。

この間のカルネラ戦ではクナイの刃長が短いんで苦労してたみたいだから、槍先を短剣に変えるということか？短剣なら刃長は30cm近いからクナイよりはマシになる。

「いいよ。宿に帰ってから改造してあげる。」

宿に戻ると、「今日は依頼を受けないのかい？」っておばさんに言われたけど、苦笑いでごまかした。

「無理しないで、簡単な物を選んだよ。無ければ待てばいいさ。」「って言われてしまった。どうやら仕事にあぶれたと思われたらしい。」

部屋に戻ると、姉貴はさっきの凶鑑を取出して読書開始！しばらくは反応無しだろう。

俺は、ミーアちゃんから短剣を受取ると、握りを分解してみた。

短剣は薄い鉄板を加工したもので、握りの部分は刃先から伸びた鉄板を両側から木片で挟み、きつく紐を巻いた物だった。鉄板なら加工は簡単だ。姉貴手作りの槍からクナイを外し、木の切り込みに短剣の柄の鉄板を装着すればOKだ。

短剣を見ると、手入れを殆どしていないようで錆が目立つ。雑貨屋さんに貰った砥石で槍にする前に刃先を綺麗に研ぎ直した。

全体の錆を落とし、刃先も一応研ぎ直したところで、柄の先に短剣取り付けた。抜止めの金具は少し短かったが短剣の柄に使っていた物を流用する。最後に革紐できつく巻きつけて縛れば出来上がりだ。

最後に、短剣のケースのベルト取付け部分を切り落として槍の穂先ガードにした。

「姉さん出来たよ！」

こつちを向いた姉貴にはい！って渡すと、どれどれって手に持ってバランスを確かめる。

「予想通り。これ結構使えると思うよ。」
満足しているみたいで一安心。

「ところで、図鑑の方はどうなの？」

「うん。結構面白い。それに何と巻末に地図と生息分布図まであるのよ。これで見ると・・・この辺の凶暴なのはクルキュルとガトルそれにイネガルってところかしら。」

「じゃあ、明日は討伐を試してみる？」

そんな話をしていると、階段をドタドタと駆け上がってくる音がして、俺達の部屋の扉をドンドンと誰かが叩く。

ミケランさん？って姉貴と顔を見合わせたか、彼女はもう村にはいない。

用心深く、扉の鍵を開けると、弾かれたように扉が開いた。

「アキトはいるか？」

キヨロキヨロと部屋を見回す男は・・・グレイさんだ。

「ここにいますけど・・・」

後から声をかける。驚いたように俺をみたグレイさんにはゆとりがない。

「ギルドの一斉召集があった。お前は赤3つ、一斉召集に参加する義務はないが人手が足りん。付き合ってくれ！」

「かまいませんが、何があつたんですか？」

「ガトルの襲来だ。魔獣ではない。確かガトルを倒したって話だな。」

姉貴が俺を向いて頷いた。なら話は簡単。

「手伝います。姉貴も十分戦えますが、ミーアちゃんは・・・」

「ギルドの娘に頼んでおく。それでいいな！・・・ギルドで待つてるぞー！」

グレイさんはドタドタと階段を駆け下りていった。

急いで装備を身に着ける。どの位続くか分からないのでミーアちゃんのバックにザックに残ってたお菓子を詰め込んでおく。非常食の代用だ。

俺達もギルドに急いだ。村中慌しい、扉を打ち付ける者、屋根に登って弓を用意する者等様々に準備をしているようだ。

ギルドの扉を開けると10名程度のハンターがホールで待っていた。

カウンターのお姉さんにミーアちゃんを頼み、姉貴とハンター達の中に入る。

しばらく待つと、ギルドの2階から壮年の男が現れた。

「皆揃ったか。この村で初めての一斉召集だ。相手はガトルだが数が多い、200以上は確実だ。生憎、村のハンターで黒は4人だ、赤5以上は6人。しかし有難いことに赤5以下の者も参集してくれた。魔獣ではなくガトルなのがせめてもの救いだ。」

「村の出入り口は2箇所。俺が東で、西はグレイだ。グレイ、半数を連れて西へ行け。人選は任せる！」

「俺がグレイだ。マチルダ、サラミス、サニー、それにアキトとミツキは俺と来い。行くぞー！」

俺達6人はグレイさんを先頭に西の門に急いだ。

程なくして門に着くと、2人の門番が門を閉じ、村内に移動式の

柵を設置している所だった。路地には荷車や籠等が軒先まで積み重ねられ、通行出来ないようにしている。

門の内側のちよつとした広場に俺達は集まると配置の打合せをする。

「俺とアキトは前列だ。マチルダはあの屋根に上り魔法で援護。サラミスは両手剣か・俺達の後だ。サニーとミツキは弓だな、あの屋根で援護だ。」

グレイさんはテキパキと俺達の場所を指示した。

「質問はあるか？」

「俺は赤7つだ。マチルダさんが黒なのは知っている。そのアキトは俺より上なのか？」

「良い質問だ。アキトは赤3つ。お前より4つ下だ。だが、赤7つと肩を並べるよりは俺はアキトを選ぶ。少なくとも俺より強い！」

「他に無ければ準備しろ。そこで待機だ。」

俺は地面に腰を下ろすと、銀ケースからタバコを取出し、1本を口に咥える。100円ライターで火を点けると、プカーって煙を吐き出した。

グレイさんもパイプを取り出したが、火種が無くて困っている。とことこと歩いていき、ライターで点けてあげた。

「すまん。」

「いえいえ、誘って頂いて光栄です。」

屋根の上の姉貴を見ると、しきりに俺を指差して自分の胸を指差している。・・・これを使えってことか！

とりあえず手を上げて答えると、姉貴は頷き返した。

待つのは苦手だが男3人で一服しながら雑談するのもいいもんだ。こんなこのつちに来てから始めてかも知れない。

「ホントに強いのか？」

「クルキユルも倒したそうぞ。」

サラミスは俺より少し年長みたいだ。グレイさんの話を聞いて吃驚している。

「あれは、姉さんがボルトを撃って弱らせてくれたからですよ。」

「あの太い矢か！でも1本ぐらいでは対して動きは鈍らん。あまり謙遜するな。」

「でもゴツイ弓だな。弦が3本も有るし、訳の分からんものも沢山付いてる。」

「3本に見えますが1本ですよ。あのカラクリで弦を引く力を半分になっているんです。普通サイズのガトルならボルトが貫通しますよ。」

「とんでもない威力だな。しかし速射できるのか？」

「それが難点なんです。でもイザとなれば姉貴は俺より強いですよ。」

「それで、あの短い槍を持つてるのか・・・」

「きたぞ！！」

門の櫓で様子を見ていた門番が外を指差して叫んだ。何時の間にか背中に矢を背負って手には弓を持っている。

もう1人は弓を引き絞って狙いをつけている。低い唸り声も聞えてきた。

押し寄せるガトル

俺達は、柵のような扉から数m程度はなれて扉越しにガトルの群れを睨む。

しきりに唸り声を上げながらこっちを窺っているようだ。

パシ！つと弓の弦が鳴ると、ガトルの群れが蠢く。櫓の高さは5m程で、ガトルの群れに放つ矢は適当に放つてもガトルに当る。

連続して放たれる矢に何匹か傷ついたのだろう。ガトルが血の匂いでますます興奮してきたように思える。

「いいか。扉をこじ開けて来る奴を殺る。群れが入る直前にサラミスはマチルダの援護に向かえ。階段を上ってくるガトルを食い止める。俺と、アキトはあそこの小屋の屋根でガトルを誘う。いいな！！」

「了解！」「」

グレイさんの檄に即答で俺達は答える。後ろを見ると、俺達が走ってきた道は荷車や梯子等で高くバリケードが築かれている。

なるほど、ここで俺達が囿になって村の家並みに行かせないという訳だ。

軽く屈伸をして緊張を解す。得物は、とりあえずこの採取鎌でいいだろう。何ていっても4匹をこれで叩き殺してるし・・・

群れが、扉の直ぐ前まで押し寄せてきた。扉の柵を齧り始めている。グレイさんが右手で片手剣を抜いて構える。後ろのサラミスはとつくに長剣を抜いて地面に軽く突いて両手を沿え待ち構えている。俺も、左手で柄を掴み2、3回軽く鎌を回した後、先端を下にして低く構えた。

ガトルルウ・・

一匹のガトルが門と扉の隙間を無理やり通ってグレイさんに向かって行く。

グレイさんは動かない・・そしてガトルが飛びつく寸前に体を半回転させてガトルの背中に剣を叩きつける。ギャ！っという叫びがガトルの最後だった。

次々に扉上部の隙間からガトルが村に飛び込んでくる。

俺のに向かってきたガトルに走りこんで鎌の背側を叩きつける。更に、体を回転させて次のガトルの頭を叩く。ガツ！っ骨が碎ける感触が伝わってきた。

サラミスの向かおうとするガトルに「ウオオ！！」って叫んで牽制し、こちらに注意を向ける。隙を見せたガトルはサラミスの長剣で両断された。

グレイさんは一所に留まり、襲ってくるガトルを最小の動きで剣を振るっているが、サラミスは長剣を振っていた為か、長剣を振った後の隙がだんだんと長くなってきた。

「サラミス、先に後退しろ！」

グレイさんがサラミスに向かって叫んだ。やはり疲労を見て取ったのだろう。

「まだいけます！」

サラミスが怒鳴り返す。

「これからが正念場だ。ここで怪我をさせるわけにはいかん。後退しろ！」

2度の後退指示に、顔を赤くしながら長剣を担いでマチルダさんのいる屋根へ続く階段を駆け上がっていく。

その後を一匹のガトルが追いかけるが、その背中にスタッ！っとなんてさんの放った矢が突き立ち、ガトルはその場で転倒した。

扉の上部を結わえ付けていた革紐が数箇所切れている。おかげでガトルは容易に村に進入出来るようになってきた。下のほうの革

紐が切れるのも時間の問題のような気がしてきた。

次々と襲ってくるガトルを殴り殺す。グレイさんの周りもガトルの死体が随分と溜まってきた。

櫓の門番達は矢を使い果たしたようで、槍で扉を破ろうとしているガトルを牽制している。

そしてついにその時が訪れた。扉の丸太を繋いでいた革紐が4箇所切れて2本程が脱落したのだ。

今まで以上の数のガトルが俺達に押し寄せてきた。

「アキト、小屋の上だ!!」

グレイさんが俺に向って叫ぶと同時にマチルダさん達がいる家の前にある小さな小屋に走り出す。

俺も何匹かを撲殺しながら小屋に急ぐ。

ドドオオーン!

音に驚いた俺が見たものは、爆炎に吹飛ばすガトル達だった。あれは、見たことがある。グレイさんと手合わせしてた時に起こった爆炎と同じだ。ということは、マチルダさんが俺を援護してくれたんだ。

ようやく小屋の屋根にたどり着き、広場に向き直った時には、ガトルが群れをなして村の門を突破してるのが見えた。

「いいか。俺達は困だ。俺達の前に集まったガトルをマチルダが吹き飛ばす。無理に殺ろうとするな!」

「分かってます。」

あまり疲れを感じない。少し、ハイに成っているようだ。

小屋の屋根までの高さは2m程でガトルが飛び掛ろうとしても一旦前足を屋根に付かねばならない。其処をグレイさんが剣で、俺は

鎌の柄で攻撃する。

ある程度密集した所へ、マチルダさんが俺達を巻き込まないように魔法で攻撃する。何と言うのか分からないが、手榴弾の小型版って感じの魔法だ。

マチルダさんのいる家の屋根に行く階段の上には、サラミスが長剣を振るって階段を駆け上がってくるガトルを確実に仕留めているようだ。

姉貴の方は、階段の上に姉貴が手製の槍で待ち構えている。姉貴の方に向うガトルが少ないのか、姉貴だけで十分みたいだ。

そして、サニーさんが俺達の死角を突いてくるガトルを弓で狙撃してくれる。30mは離れているのに、必殺の腕前だ。

連続で俺達の周囲に爆炎が広がる。周囲には焼け焦げたガトルの亡骸が所狭しと広がっているが、一向にガトルが減る気配がない。

しかし、日が落ち始めようとした時、ついに終わりが見えた。

門を越えるガトルがもういないのだ。まだ俺達は沢山のガトルに取り囲まれているが、これを殺ればこの戦いは終了する。

一匹づつ確実に仕留める。もう援護の魔法も来ないし、サニーさんの矢も飛んでこない。

魔法にも使用制限があるのだろう。そして、サニーさんは矢が尽きたんだと思う。俺の周囲には矢を受けて倒れたガトルが20は越えている。

そして、グレイさんが一匹のガトルの首を刎ねた時、俺達の周りに動くガトルはいなかった。

「オオイ！・・・外はどうだ！！」　グレイさんが櫓の門番に村の外の様子を聞いている。

「もう、いねえぞー!!」 門番は槍を振りあげながら答えてくれた。

やっと、終わったみたいだ。俺は、その場に膝を着いた。

「まだだ。門の修理を終えてから一休みしよう。」

そう言って、グレイさんは屋根から飛び降りて、門の方に歩いて行く。

俺も大急ぎで後を追う。直ぐ後からはサラミスが走ってきた。

姉貴を見ると、サニーさんと矢の回収をしている。短いのは、姉貴のボルトみたいだ。

門の扉は大分痛んでいた。でも、元々丸太を柵みたいに組んで革紐で結んだものだから、修理にそれ程苦労しない。

「倒したガトルの牙は参加者全員で均等割りだ。レベルに関係はないから心配するな。」

グレイさんが俺達を見てそう言った。

ガトルの始末は村の男衆がやるんだそうだ。女衆はこの後の宴会準備に忙しいらしい。

若い男が村の奥から駆けて来た。道を塞ぐバリケードをよじ登って此方に声をかける。

「怪我はありませんか! 東は何とかなりました。私が連絡員として残りますから、ギルドで休憩してください。」

「ありがとう!」

グレイさんはそう答えると、マチルダさんと姉貴達を先に戻らせる。

「俺達はもう少しだ。後1本横木を結べばこの扉は元に戻る。」
俺達はグレイさんに頷くと作業を継続する。

門番も1人が降りてきて、扉の外の矢を回収している。門番も結構な数を矢で倒してるみたいだ。

扉の修理を終えると、若い男を広場に残して、俺達はギルドに向う。バリケードは結構高く積まれていて乗り越えるのに苦労した。結構疲れが体に来ていたみたいだ。

グレイさんはそれほど疲れを見せていないが、サラミスは足を引き摺っている。やはり経験の差なのかなと重いなながら俺も重い足取りでギルドに向った。

ギルドの扉を開けると熱狂の渦だった。皆がこの村始まって依頼の最初のギルド一斉召集によるガトル襲来を乗り越えたことを喜んでいる。

それに、少し酒も入っているようだ。姉貴が赤い顔をして「ハイ！」って渡してくれた木のコップに注がれた物をゴクリって飲むと、それはアルコール分の少ない発泡酒だった。

「皆、飲んでるか！ どうか切り抜けた、感謝する。しかし、東の門では残念ながら、2人の重傷者を出してしまった。幸い、水魔法の使い手がいたので命は助かったが、2月は休業だろう。しかし、その間の面倒はギルドが保障してくれる。路頭に迷う事はないはずだ。西の門は負傷者無し。驚く限りだ。」

今回の仕切りをこなした男が報告する。その顔もやり終えたことに笑みが浮んでいる。

「今ギルドで、倒したガトルの集計が出た。221匹だ。牙の換金は4425Lになる。今回の参加者は14名。1人310Lで残りは負傷者に付加する。いいな！」

「ちよっと待て、確か西に6名、東に7名のはずだ。後の1名は何だ！」

「そこにいる嬢ちゃんだ。俺達のガードを通り抜けたガトルが1匹、扉の開いていたギルドを襲った。危なく職員が殺られるところを嬢ちゃんが刺し殺してくれた。今回の分配資格は十分だ。」

それを聞いた俺は吃驚したが、姉貴はよしよしってミーアちゃん
の頭を撫でている。

意外とミーアちゃんって、冷静で度胸がある。俺達はギルドのお
姉さんに報酬を貰い、宿に帰ることにした。

泉の森の調査

宿に戻るとおばさんが歓待してくれた。

近所のおばさんや若い娘さん達も手伝って豪勢な食事が整えられ、酒の壺があちこちのテーブルに置いてある。

同じ宿に泊っているハンターやこの宿の飯を食べに来るハンターがもう席に座って飲んだり食べたりしている。

「遅かったじゃないか。あんた達は此処だよ。」

おばさんが階段に近い席に案内してくれた。

宿は村内の家並みから離れているのに、随分と人が集まっている。一旦部屋に戻り、装備を外したかったが席に早速運ばれてきた料理と木のコップを渡されてそのまま皆と騒ぐことになった。

俺達が召集に参加していたことが分かると、次々にお酒が注がれ始めた。

元々そんなに飲めないことから、たちまち顔を赤くしてテーブルに突っ伏すはめになる。姉貴の方は、顔を赤くはしているが次々とお酒を飲んでいる。酒豪みたいだって思いながら料理を恨めしそうに眺める。

「ご苦労だったな。」

2人の男が俺達のテーブルに着いた。

少し顔を上げて眺めると、グレイさんとギルドで采配をしていた人物だ。

「俺は、カンザス。黒6つだ。グレイから話は聞いた。グレイ並みに動いて赤3つとは驚いた。明日、ギルドでレベルの確認をしとけ、上がっているはずだ。・・ここからは相談だ。明日、ガトルが何故押寄せる羽目になったか調査をしたい。同行できるか？」

「それって、危険はありますか？それと、どの位の期間を考えています？」

姉貴が尋ねる。俺達だけなら問題ないかも知れないけど、ミアちゃんを考えると少し不安もある。

「3日程度を考えている。やってきた方向から泉の森の東側までを調査したい。参加者は俺達とマチルダ、サニー、それにサラミスが名乗りを上げた。単独でクルキユルを倒せるものはないが、このメンバーでなら数匹は倒せる。危険性は低いと考える。」

「ミアちゃんは私達のチームです。参加しても問題ありませんか？」

「今回もガトルを1匹倒している。猫族の敏捷性は折り紙つきだ。問題無い。」

「じゃあ、参加します。」

「明日の朝ギルドで待つ。野宿と食料の準備をしておけ。」って俺達に言うと2人は足早に宿を出て行った。

姉貴は席を立つとおばさんのところに行き何やらお願いしている。おばさんが頷くところを見ると簡単なお願이었다ようだ。席に戻ってくると、俺の腕を持って無理やり立たされた。

「明日の準備をするから部屋に戻るわ。歩けるの？」

俺は大丈夫だ。ただ床が揺れてるだけだ。って言ったら、ミアちゃんが支えてくれた。

何とか階段を上り、装備を外すとベッドにダイビングする。もう動けそうに無い。

そんな俺を見て、たいいさなタメ息をついて姉貴は準備を始めた。俺のポンチョを広げ携帯食料入れた袋を食器類と一緒に丸め込んでいる。

自分のザックから迷彩シートを取出して自分のポンチョを包み、

ミーアちゃんには水筒代わりにペットボトルをバックに入れてる。水と食料それに雨対策さえ出来ていれば何とかなるだろう。武器は・・とりあえずみんなもっていくことになるだろう。それに3日歩くことを考えると、アリット採取に使った棒もミーアちゃんの杖代わりに丁度いい。

ユサユサと体が揺すられる。

あれ？って感じで目を開けるとミーアちゃんが俺を揺すっている。何時の間にか寝たりたみたいだ。

「おはよう！」って体を起こすと、「姉さんはもう、食べてるよ！」って教えてくれた。

慌ててベッドから跳ね起きて、装備を身に着け、ザックを肩に階段を下りると、黒パンを齧っていた姉貴と目があった。

「おはよう。俺の分も貰っというて！」

そう言っつて、宿の裏手にある井戸に行き顔を洗う。

まだ、少し頭が痛い。しかし、今日はカンザスさんの約束もあるし、寝ている訳にはいかない。

もう一度冷たい水で顔を洗って、宿のホールに戻った。

「黒パンとスープ。それに濃いお茶を貰っというたわ。大丈夫なの？」

「大丈夫！まだ少し頭が痛いけど直に治るさ。」

黒パンを頬張る俺を見て、少し安心したようだ。

あっという間に平らげた。そういえば、昨夜は何も食べなかった。

「歩きながら、何か食べてたほうがいいよ。まだ、お菓子が残ってたでしょ。」

少し足りないって表情をしていたようだ。腰のポーチにザックにあったお菓子の残りを少し入れる。ついでにミアちゃんにあげようとしたら、まだ入ってるってバッグの中を見せてくれた。

俺達がそんなことをしている間に、姉貴がおばさんからお弁当を受取ってきた。

「3日程度帰れない。」っておばさんには昨夜の内に伝えたそう
だ。

「お茶を飲んだら、出発だよ。」

残ったお茶を一気に飲んで立ち上がる。濃いお茶は苦かったが、おかげで頭はすっきりだ。

スタスタと歩いて宿の扉を開ける。

「行こう！」って姉貴とミアちゃんを促して、ギルドに向った。

「早かったな。先ずはカウンターでレベルを確認しておけ！」
ギルドで俺達を迎えたのはテーブル席のカンザスさんだ。傍らでサニーさんがお茶を飲んでいる。

早速、カウンターの姉さんにレベルの確認を依頼する。ついでにザックも預けておく。

そして水晶球の結果は、俺と姉貴が赤4つ。ミアちゃんが赤3つだ。昨夜の結果が反映されたのかな・・

カンザスさんのいるテーブルに戻って皆の来るのを待つ。

「どうだった。少しは上ったろう。」

「はい。全員1つ上ってました。」

「全員が揃うまでに、まだ間がある。不足のものがあるなら今の内に買っておけ。」

「とりあえず、食料と水それに野宿の準備はしましたが、期間が

長い場合に他に必要な物はありますか？」

「そうね。私達のそれ以外と言つと・・・薬草と傷薬それに毒消草かしら。ほら、これよ！」

サニーさんが俺達の前に小さなポーチを取り出す。

革ケースの綴蓋を開くと中に竹みたいな筒が数本並んでいる。

「蓋の上が丸いのが薬草、四角なのが傷薬そして尖がつてるのが毒消草ね。こうして入れておけば暗がりでも必要な物が判るでしょ。」

「何処で、手に入れますか？」

「雑貨屋さんで手に入るわよ。まだ持っていないなら、今の内に買つてきなさい。」

姉貴はミリアちゃんとギルドを飛び出してつた。

「薬草は、疲れをとる。傷薬は傷の治りを早くする。毒消草は文字通りの物だ。蛇や虫には毒を持つものもある。長期と言わず、日帰りでも準備はしておいたほうが良い。」

「近場とはいえ備えは必要ってことですか。」

「そうだ。今まで知らなかったことに、こっちは驚いてるがな。」

怪我もしなかったし・・・って言って誤魔化すけど、納得してはいないみたいだ。

ギルドの扉が開くと、グレイさんとマチルダさんが入ってきた。

軽く片手を上げて挨拶がわりだ。俺達のテーブルに他から椅子を持ってきて座る。

「アキトだけか？」

「薬草等を買に行きました。サニーさんに教えて貰ったんです。」

「確かに、今度は用意したほうが良いな。森には結構イヤな奴がいるからな。」

「こらこら、今から脅してどうするの。」
マチルダさんがグレイさんの頭を杖でボカリ！って叩いてる。
結構いい仲間みたいだ。

「ただいま！」って声と共に扉が開き、姉貴達が帰ってきた。

「はい。アキトの分だよ！」

そう言っただけで先程と同じような、小さなポーチを渡してくれた。早速ベルトに挟んでおく。

「後はサラミスだけだな。」

グレイさんがメンバーを見渡して言った時、バタンと大きな音を立てて扉が開いた。

「遅くなりました。」

ハア、ハアって息を切らせながらサラミスが長剣と大きな袋を背負って現れた。

「揃ったようだな。昨夜伝えた通り、ガトル来襲の調査だ。原因を調べに泉の森の東側まで行くことになる。では、出かけよう。」
俺達は席を立つと、カンザスさんの後を追うようにギルドを出た。

「先頭は俺とグレイが交替で立つ。最後尾はアキトだ。中は適当で良いが、お嬢ちゃんもミツキと一緒に行動しろ良いな。」

カンザスさんが短い指示を出す。

俺達は前後に少し距離をとりながら、泉の森に向って歩き出した。もちろん俺は最後尾だ。パトロールの最後尾って後の確認で良かったんだよな・・

海兵隊のムキムキ兄貴達にそんなことを教えて貰ったような気がする。

泉の森の岩屋

村の東の門を抜け、泉の森に向かう一本道を8人でテクテク歩いてる。

たまに、道の左右に広がる畑に残されたガトルの足跡を確認しているけど、確かに方向的には泉の森の方向、東から真っ直ぐに来ている。

何時もなら畑に向かう農家の荷車にでも乗っけてもらうのに、ってサラミスがブツブツ言ってるけど俺達はまだ乗せて貰った事がない。時間帯が違うのか・・・

十字路を過ぎ、橋を渡ると泉の森が見えてきた。

アリット採取の時と同じように、森の手前にある広場に差しかかるとグレイさんが片手を上げて俺達の歩みを止めた。

「少し早いけど、此処で昼食だ。」

俺達は焚火跡に輪になって昼食を取る。と言っても、黒パンを齧り、水を飲む程度なんだけど・・・

「畑に残された足跡から判断すると、どうも小川の下流部を渡ったようだ。橋を渡ってからは道の右側にだけ足跡が残されている。

泉の森の深遠部は上流側だから、クルキユル等には出くわせないと思うが、道を外れて進むからこれからは注意しろよ。」

カンザスさんの言葉に俺達は頷く。

黒パンを食べ終えて少し休憩したら出発だ。今度はカンザスさんが先頭を歩く。

道を右に逸れて、下流に歩きガトルが小川を渡った場所を探す。

リリツク釣りをした反対側を通り過ぎしばらく行くと、その場所が分った。

小川が広い浅瀬になっており流れもそれほど速くない。大型犬並みの体形を持つガトルなら流されること無く川を渡れるだろう。岸

辺には浅瀬に向かって沢山の足跡が残されていた。

「此処から森に入る。後ろは任せたぞ、アキト！」

カンザスさんにそう言われて少し緊張しながら列の最後に付いて行く。

森の中は鬱蒼とした木々が前方の見通しを悪くしている。それに結構藪が多い。足を取られないように注意しながら前を歩く姉貴に続く。

藪をよく見ると、枝や葉が折れているものが多い。カンザスさんはこの跡を辿って進んでいるみたいだ。

不意に姉貴の歩みが止まり、皆姿勢を低くしている。慌てて俺も同じように姿勢を低くする。

「何かいるみたいだよ。」って姉貴が小声で教えてくれた。

前のほうにいるマチルダさんが俺達のほうに向かって、（こつち！）って指先で方向を示す。

その方向をよく見ると、鹿のような獣が数頭ばかり草を食べている。

しばらく待っていても、鹿は動かない。

俺達は姿勢を低くしたまま、静かに移動を開始した。

姿勢を低く保ったまま進むのは苦勞するし、疲れる。その上俺は後ろの注意もしなければならぬ。やっと皆が立ち上がって歩き始めた時は、ちよつと止まって背筋を伸ばした。

また俺達の歩みが止まる。

「今度は休憩だつて。」姉貴が小声で教えてくれた。

皆で一塊になって座り込んでいるところにカンザスさんがやってきた。

「俺と、サニーで野宿場所を偵察してくる。後はグレイに任せるから彼に従って進め。いいな！」

俺達が頷くのを見て、2人は前方の繁みに消えていった。

「この森には何箇所か野宿に適した場所があるんだ。彼らは一歩近くの場所を見にいったのさ。もう直ぐ着くから、あと少しの辛抱だ。」

そう言って立ち上がるグレイさんに続いて俺達も腰を上げる。人数が少なくなつたためか、今度は最後尾の俺にも、先頭のグレイさんが見える。

しばらく、ゆっくりした足取りで進んでいたが、グレイさんの手による指示で歩みを止めて、姿勢を低くする。

ガサガサと藪を押しよけて現れたのは、カンザスさん達だった。グレイさんと短い遣り取りの後で列の中に入ると、再び俺達は森を進む。

いつの間にか周囲の藪にガトルの通過したが跡が見当たらない。それでも、グレイさんは前方に歩いているし、カンザスさんも黙認している。

更に進むとその理由が解った。前方が開け、ちよつとした草原になつている。そして、その真ん中には大きな石を組み合わせた石室みたいなものが建つていた。見た感じ、石舞台みたいだ。

「あれって古墳の石室みたいだね。」
姉貴も同じように感じたんだろう。俺に振り返ると、小さな声で言つた。

「今日は此処で野宿だ。獣に備えて焚火をする。グレイ、サラミス、アキト。薪を集めて来い。」
姉貴に採取鎌を預けて、グルカナイフを抜く。枝打ちには結構これが役立つ。

始めて見る俺のナイフの形状に驚いた者もいたが、気にせず森に入って立木の枯枝を落としはじめた。

生木も少しは混じつてるが気にしない。適当に薪の束を2つ作る

と、ナイフを仕舞って薪を担いだ。

「こんなもんで良いですか？」

岩屋の前にある焚火跡の傍に薪の束を降ろす。

カンザスさんも近場で探したらしく、薪が置いてある。

「ああ、いいだろう。・火を点ける。中からマチルダを呼んできてくれ。」

「火なら、これで・・・」

俺は枯草を丸めると、ポケットから100円ライターを取出して、カチツ！って火を点けた。

吃驚したカンザスさんだったが、長剣のケースに付けたパイプを取出して一服し始めた。

カンザスさんの隣で焚火の番をしていると、グレイさんとサラミスが大きな薪の束を担いで帰ってきた。

一番大きな束を岩屋の前に置いて柵代わりにするみたいだ。

「さて、夕食の準備だ。」

カンザスさんの一言で、マチルダさん、サニーさんと姉貴が鍋を持ってきた。サラミスが慌てて自分の袋を開けて調理用品を取出す。マチルダさん達の鍋は鉄製で1リットル程度の鍋だが、俺達のは容量的には同じだけどチタン製だ。少し黄色を帯びた銀色の鍋を皆が見てる。

「鍋まで俺達とは違うのか。・そんな金属始めてみたぞ。」

サラミスが自分の鍋を火に掛けながら言った。

「気にしないで下さい。私達の国では皆使っていましたから。」

姉貴は微笑んで言うけど・・・そんな話は始めて聞いたぞ。キャンプでもない限り使わないと思うけど・・・

お湯が沸くと、アルファ米をシェラカップに1杯入れて、乾燥野

菜とビーフジャーキーを適当に切って入れる。再沸騰したらチューブの味噌を加えて出来上がりだ。

皆の料理が終わるまで、遠火で鍋を暖めておく。

マチルダさん達はお湯が沸くと、少し萎びた野菜を入れて乾燥肉を入れている。味付けは塩のみだ。

サニーさんとサラミスは萎びた野菜の代わりに、何か雑草みたいなのを入れてたけど・・

煮立ってきたらそれでお終い。木の深皿に柄の付いたお玉みたいなので掬って、硬そうな黒パンを添える。

俺達の夕飯は汁の多い雑炊モドキだ。シエラカップ3つに分けて俺と姉貴それにミーアちゃん食べる。

「それ、泥水みたいだけど・・美味いのか？」

サラミスが聞いてきたので、少し分けてあげたけど、食べた途端彼の顔が顔が驚きの表情に変わった。

「お前達、何時もこんなのを食べてるのか？」

姉貴と俺は顔を見合わせると、ウンと頷いた。

「村に帰ったら、造り方を教えてくれ。この味は塩だけじゃないよな。」

「基本は塩と磨り潰した豆を発酵させたものかな。あと少し薬草みたいなのが入ってるけど・・」

豆を発酵させるなんて・・そんなことをサラミスは呟いてたけど、この世界では味噌なんて無いんだらうなあ・・

「俺は、その大型ナイフの方が気になるぞ。見せてくれないか？」

カンザスさんにグルカナイフをケースから引抜きぬいて手渡す。

ジツとナイフ見ていたが、立ち上がると片手で少し振り回す。

納得して座り直すと今度は鍛造された刀身を自分のナイフで小さく

叩いて音を確認している。

「これを作った鍛冶屋を紹介してくれ！」

俺にナイフ渡した後、カンザスさんが言った。

「ダメだ。俺も頼んだが、亡くなったそうだ。」

「残念だ。・・実に残念だ。」

「そんなに凄いの？」

「ああ・・音が違う。俺の長剣よりも遥かに錬成されている。」

サニーさんがカンザスさんに聞いている。どうやら、カンザスさんとサニーさんはチームを組んでいるみたいだ。それに、グレイさんとマチルダさんも確か同じだったような気がする。ひょっとして、フリーなのはサラミスだけ？

「私は、ミツキの弓の方が凄いと思うわ。昨日だって、ガルド3匹を1本で仕留めたのよ。凄い貫通力だわ。」

「あの弦が3本ある弓か？」

「ええ・・でも、弦は1本って言ってたわ。それに使う矢は私の3分の1の長さも無くて太いのよ。殆ど即死だわ。」

そんな話をしながら食事を終わると、ポットを火にかけてお茶を飲む。

俺達はタバコやパイプを啜え、姉貴達は姉貴がキャンディーを分けていた。

「さて、今夜は此処で野宿となる。男が4人で女が4人。男は2人づつ、女は4人で焚火の番をする。女達が最初だ。その後はグレイとアキト。最後は俺とサラミスだ。番をする時は、岩屋と焚火の間に入れ。薪はこれだけある。夜は焚火を小さくしないように、いいいな！」

俺達は早速カンザスの指示に従って食器類を片付けると、岩屋の

中に入って寝ることにした。

カンザスさんが小さなランタンを入口近くの岩棚に置くと岩屋の中が急に明るくなる。

装備ベルトを一旦外し、ポンチョを引き出す。ポンチョを広げると、中に入れていた食器類を一纏めにシートに包む。そして、装備ベルトを再度身に付け、ポンチョを毛布代わりに体に巻きつけて横になった。

傍らのサラミスは大きな袋から薄い毛布を引っ張りだすとそれに包まった。

カンザスさんとグレイさんは肩のバッグを下ろし、その中から厚手の布を取り出して包まる。

あんなのがあるんだ。と思いつながら何時の間にか寝入ったようだ。

巨大アリの襲撃

ユサユサって体を揺り動かして、寝入っていた俺を起こしたのは、何時も通りのミアちゃんだった。ミアちゃんの仕事になってきているよな気がするけど、朝普通に起きるんだったら、ちゃんと自分で起きれるぞ。

「交替の時間だよ。って言った。」

姉貴に頼まれたようだ。

「ありがとう！」

ミアちゃんの頭をごしごしって撫でると、タタターって逃げられた。

体を起こして、装備を確認する。ポンチョは姉貴達が使うと思い、食器の入った包みと共に置いておく。

ファーってあくびをして、両手を大きく回して眠気を取りながら、岩屋の外に出た。

夜の森は真っ暗で、広場の上には星空が広がっている。森の木立に仲良く2つの月が引っ掛かっているように見える。

「姉さん。替われるよ。」

「それじゃ。後はお願い。ミアちゃん、寝るよ。」

俺が交替出来ることを確認すると、姉貴はミアちゃんを連れて岩屋に入っていった。

姉貴とすれ違いに 그레이さんが大きなあくびをしながら岩やから出てきた。

「アキトはもう交替してるのか。早いな！」

「 그레이が中々起きないからでしょ！」

後から岩屋を出てきたマチルダさんに怒られてる。

これで、次のメンバーが揃ったことから、先に焚火の番をしていた女性陣は岩屋に入ってお休みとなる。

薪の束をバラしてその上に座ると、周囲を一通り見渡した。広場は焚火で明るく照らされているが、森の中は真っ暗な闇に包まれている。

ふと、焚火の左手に薪が積まれているのが目に入った。

「ああ、それは襲撃された時に燃やす焚火だ。ちょっとした柵代わりだな。」

怪訝そうに薪を見ている俺に、 그레이さんが教えてくれた。

「野宿者を襲う獣は多いんですか？」

「時期にもよるな。俺達を襲うとすれば肉食の奴らだ。森に獲物が多い時期はあまり気にする必要はない。しかし、冬とその後には気を付けた方がいい。それと、森に異変がある時だ。今回もこれに近いかも知れん。獣達の気が立っているから肉食獣以外の獣も俺達を襲う可能性がある。」

그레이さんがパイプを煙らせながら教えてくれた。そんな話を聞かされると、今にも森から獣が飛び出してくるような気がしてくる。しきりに辺りを見回していると、 그레이さんが笑いだした。

「そんなに心配するな。ほれ！あそこに目が光ってるだろう。あれはキヤナルと言って夜行性の小さな草食獣だ。他の獣が来れば直ぐ逃げ出す程臆病な奴だ。あいつが近くににいる限り肉食獣は近くにいない。」

「そうなんですか。」

그레이さんの指差す方には、確かに藪の中から小さく光るものが見える。動物の目は光を反射するんだなって始めて知った。

그레이さんに付き合っって何本かのタバコを吸いながら世間話をしていると、森の東側の木立に引っ掛かっているように見えた月が中

天近くにまで達している。

大分時間が経ったようだ。そろそろカンザスさん達と交替する時間かなとグレイさんの方を見ると、姿勢を変えずに目だけで周囲を観察している。

「少し、おかしくなってきたぞ。何時でも反撃できるようにしておけ。ゆっくりとだぞ！」

何か異変を感じ取ったようだ。ついさっきまで俺達を見ていたキヤナルもいなくなっている。

傍らの採取鎌をゆっくりと掴むと、グレイさんに頷いた。グレイさんはいつの間にか小さな玉を持っている。右手に持って、玉に付いた紐の先にある輪を指に掛けていた。

「何が出るか解らないが、とりあえずこの爆裂弾で牽制する。マチルダの【メルト】より威力は低いが、結構な音だ。全員が目覚ますだろう。俺は右、アキトは左だ。焚火より前が出るな。それと少し薪を追加しろ、ゆっくりだぞ！」

俺は右手で数本の薪を取ると、焚火に投げ込んだ。

焚火の火勢が上がり周りが少し明るくなる。

すると、森の闇の中にうっすらと光るものが見えた。だんだんと光るものが増えてきたとき、それが何かの目であることは解ったが、動物にしては少し大きすぎる。

「おいおい・・・こんな所にいるのかよ。アキト、あれはタグの目だ！」

「タグって何ですか？」

「タグも知らないのかよ。森の向こうの草原地帯に大きなタグ塚を作って生息している昆虫だ。飛べないし、毒も無い。だが奴らの牙は何でも切り裂き群れで行動する。」

「戦闘で注意する点は？」

「奴らの表皮は硬い。お前のぶん殴り攻撃はたぶん利かん。目と腹部の表皮にある境目が唯一の弱点だ。」

「だんだんと大きな目が広場に近づいているように思える。俺は、さらに焚火へ薪を投げ入れた。」

そして、森の中から最初のタグが現れた。

それは、巨大なアリだった。大きさは2mぐらいで口元には短剣状の牙がカチカチと俺達を威嚇するように噛み合い音を立てている。

たちまち数匹が後に続いて森を出てくる。更に後続がいるようだ。グレイさんは爆裂弾をタグの群れに座ったままで投げ入れた。

ドオン！

爆裂弾が爆発して群れの中に火柱が立ち上がる。2匹が巻き添えになり炎に身をもたえさせている。

「来るぞ！」

俺達は立ち上がると、打合せ通りに焚火の左右に分かれて武器を構える。

俺は採取鎌だ。グレイさんの忠告は受けたが、目を鎌で攻撃すれば何とかなると思っっている。

音に驚いて皆が次々と岩屋を出てくる。

目の前のタグに驚いているようだが、カンザスさんが直ぐに配置を告げる。

「サラミスはミツキと一緒にアキトへ行け。マチルダは此処で魔法攻撃。俺とサニーはグレイ側だ。お嬢ちゃん焚火を絶やさないようにしろ。」

マチルダさんはタグへ攻撃する前に、【メル】っと呟き、俺の前

に積んだ薪に火を点けた。

「大きいアリさんだねえ。」

暢気な声の姉貴だが、しっかりとクロスボウの先にある金属の輪に足を掛けて両手で弦を引いている。

「サニーさんとはんでもない威力だと言ってたが、タグ相手に使えるのか？」

「たぶん大丈夫だと思うよ。」

サラミスの疑問にそう答えると、俺はタグの群れを眺める。

ドドオン！、ドドオン！

マチルダさんの【メルト】が続けざまにタグの群れを襲う。確かに爆裂弾より威力は上だ。たちまち数匹のタグが火炎に包まれる。

焚火の右側にタグが集中する。左側の俺達の方はマチルダさんが点火してくれた焚火のお蔭で侵入してこない。タグって火を恐れるのかも知れない。

カンザスさんとグレイさんで襲い掛かるタグの足止めをしている。片手剣と長剣でタグに立ち向かっているが、表皮が相当硬いせい、折ることは出来ても切り取るまでには至っていない。それでも前足を折られたタグは顎の牙だけの攻撃を仕掛けているが、2人は容易にかわしているようだ。

其処に、サニーさんの放つ矢がタグの複眼に突き立つ。

軽く突き立つ矢では利かないみたいだ。動きに変化が現れない。

しかし、次の矢は半分近くもタグの複眼に深く刺さると、タグは体を痙攣させたかと思うと、その場に倒れ落ちた。

目が急所って言うてたのは、目の奥にタグの脳幹があり、それを狙えってことだと理解した。

突然、俺達の前に一匹のタグが前足を振り上げて襲ってきた。

咄嗟に鎌のような前足の一撃を体を回して避けると、その勢いを利用して複眼に鎌先を叩きこんだ。

ズブツ！っという鈍い手応えで、鎌先が複眼の奥深くまで入り込む。

すると、タグは後ろ足だけで棒立ちになり体を痙攣させてドタツ！っと倒れた。

採取鎌はタグの立上がる時にズルツと抜くことが出来たが、あまり言い感触ではない。

ちらりと姉貴を見ると、 그레이さんが相手をしているタグを狙っている。

パシュツ！っと発射されたボルトはタグの複眼を貫通して別のタグの腹部に突き立った。タグの最後を見ずに姉貴は次の発射準備をしている。近くのミーアちゃんはせつせと焚火に薪を追加していた。

俺の後ろの方では、マチルダさんが【メル】と呟きながら火炎弾をタグにぶつけている。タグの群れがバラけてしまったため、個別の攻撃に切替えたいだ。

「アキト！」

サラミスの叫びが上がる。タグの前足を一本長剣で折り取ったようだが、別のタグが攻撃に加わったらしい。

慌てて、手傷を負ったタグに走りより飛び上がって複眼に鎌先を叩きこむ。

急いで鎌先を抜き取り、サラミスの援護に回る。タグの注意をこちらに向けさせ、サラミスの接近を気付かせないようにすると、タグの隙についてサラミスが飛掛かり複眼に長剣を突刺した。

「ダメだ。支えきれん！！」

그레이さんの方に数匹が同時に攻撃を仕掛けたようだ。マチルダさんが急いで火炎弾を放とうとするが 그레이さん達とタグがあまりにも接近しすぎて躊躇している。

「アキト！」

余りの光景にボーっとなっていたようだ。姉貴の声で、我に返ると

腰のホルスターからM29を引き抜き両手でしつかりと構える。

ドオン！、ドオン！、ドオン！・・・

1発、1発確実にタグの頭を狙ってトリガを引く。シングルアクションだから1発毎に撃鉄を親指で起さなければならぬのが難点だ。

44マグの弾頭はタグの頭に大きな穴を開けて貫通した。まるで内部で爆発したようにも見える。

6発の弾丸を発砲すると弾倉をスライドさせて薬莖を抜き取り、素早く弾丸ポーチから予備の弾丸を補給する。弾倉を持って銃に確実に弾倉を戻す。

そして、再度構えて発砲しようとしたが、もうそこには動き回るタグはいなかった。

親指で撃鉄を少し引き、デコッキング動作をゆっくりと行い内蔵された安全装置を作動させる。そして、素早く銃を腰のホルスターに納めた。

「今のは、何だ！」

サラミスが詰め寄ってくる。

「俺の切り札さ。クルキュルもこれで倒した。」

「俺にも出来るか？」

「出来るかも知れないけど、1回だけだ。そして2度と剣を握れなくなるぞ。」

剣を握れなくなるってことが響いたらしい。その後の追求は無くなった。

どうやら襲撃を撃退できたらしい。皆で焚火で沸かしたお茶を飲みながら、休息を取った。

タグが原因らしい

タグの襲撃を退けた後、焚火の番をカンザスさんとサラミスに交替して俺達は岩屋で一眠りってことになったけど、興奮がなかなか冷めないのか明け方まで起きていたような気がする。

でも、またしてもミアちゃんに起されたことから考えると、少しは睡眠をとったみたいだ。

どうやら最後まで寝ていたみたいだ。岩屋の中にはもう誰もいない。

顔をゴシゴシ擦りながら岩屋を出ると、昨夜の惨状が広がっていた。

「ほら、これ飲んで、これ食べて・・・」

姉貴が、呆然と辺りを見渡していた俺にシエラカップを渡してくれた。

グビツって飲んだら・・・濃いコーヒーだった。しかも砂糖もミルクも入ってない。

思わず「苦が！」って呻いたが、頭はすっきりだ。

皆が囲んでいる焚火の姉貴の隣に座ると、ミアちゃんが硬そうな黒パンを1個くれた。

「ありがと！」って齧ると、ビスケットみたいな感じでたべることが出来る。でも、粉が結構こぼれる・・・

「皆そろったな・・・今日は、タグの方向を逆に辿るつもりだ。

早朝、グレイが先行偵察した話だと、ガトルの来襲方向と同じということだ。昼前には森を抜けることが出来ると思うが、タグがいないとも限らん。昨日と同じで先行は俺とグレイで交互に替わる。後

はアキトで問題なからう。」

今にも出発しそうなので、俺は慌てて黒パンを飲み込むと濃いコーヒーで流し込んだ。

立ち上がるうとする、グレイさんに裾を引っ張られて戻された。

「まあ、待て。タバコでも吸って休息しておけ。」

俺がケースからタバコを取出すと、姉貴がコーヒーを追加してくれた。

「草原の調査は状況次第だ。俺としては、ガトルとタグの方向が判れば今回の調査は終了と考えている。」

「原因まで調べないんですか？」

「泉の森に原因は無い。それも立派な調査だ。草原地帯の調査は俺達の手に残る。銀レベルが欲しい。」

銀レベルって上級者クラスってことだよな。黒レベルでは、まして赤レベルがいるこのパーティでは無理ってカンザスさんは言うてるみたいだ。

自分達の能力を過大評価しない。石橋を叩いて渡るってのがリーダーには必用なのかも。そうするとカンザスさんって良いリーダーってことになる。

「さて、出かけよう。荷物を纏めて、焚火には土を被せておけ！食器類を纏めてシートに包み、ポンチョに丸め込んで、装備ベルトに付いてる専用ベルトで横にしっかり固定する。杖代わりの採取鎌を持てば俺の準備は出来上がり。」

姉貴も同じように装備ベルトを身に付け、サスペンダーの具合をみていた。ミアちゃんはさっさと焚火に土をかけて火を消すと、片手剣のベルトを肩にかけて終了だ。姉貴がミアちゃんの斜めに背負った剣のベルトをずれないように調整している。

「タグも換金部位があるんだって。全部纏めてカンザスさんが持っているわ。彼のバックは私と同じように、魔道具で5倍程度の収納力があるんだって。」

「タダ働きのかなって思ってたけど、良かったね。」
でも、姉貴と同じようなものがあるんだったら俺も欲しいぞ。

俺達は1列になって先頭のグレイさんの後を付いて行く。

最後尾は俺で、俺の前は姉貴ではなくサラミスだ。最後尾の俺に合わせて一緒に歩いてくれている。

周囲を互いに警戒しながら、小さな声で世間話をしてると、森を進む退屈さも紛れる。

サラミスは単独で赤7つまでレベルを上げたようだ。14歳から始めて4年間で此処まで上げたということは随分と頑張ったに違いない。

薬草採取で得た金でガイドを雇って討伐をした時に、ガイドが使っていたのが長剣だったそうで、それ以来長剣を使ってるそうだ。確かに、長剣はハンターとして見た目がいいもんな。でも、振った後に隙が出やすいのが難点なんだけど・・・これはサラミスも同意した。

もう少し、金が出来たら町に出かけて誰かに教授して貰うんだと言ってるけど、もう遅いような気がする。

一旦、自分なりの戦いが出来ると、その癖を直すのは大変な努力がいる。

偶に、繁みがガサガサって音がして小動物が逃げていく。あれって、グレイさんが言ってたキャナルなのかも知れない。

不意に歩みが止まる。俺は直ぐに腰を落とすと周囲を見渡した。

・特に何も無い。

「休憩だつて。でも、直ぐに出発するから、荷物は降ろさないようにって言われたわ。」

姉貴が俺と、サラミスにクッキーを一枚つつ配りながら言った。

サラミスはクッキーの甘さに吃驚してみたいけど、疲れには甘味が良いんだよね。

前列が立ち上がるのを見て俺達も立ち上がって先へ進んでいく。

タグは大型の昆虫だが、森を進むときの痕跡は極僅かなものだった。偶に、藪の枝が折れている程度で、ガトルのほうがずっと痕跡を残してる。

先頭に交互に立つ2人は、この僅かな痕跡を追っているんだろうが、俺にはまだ無理な気がする。

そして、段々と前が明るくなって、木立も疎らになり、繁みも少なくなってきた。

列もバラけて、散開したような形で前に進んでいる。

さらに進むと、突然前方が開けた。疎らに低木はあるが、森の形はなしていない。その向うにはずっと草原が続いている。

草原の方向に進み、もうこれ以上先には低木すらない。という所で休息を取る。

「サラミスとアキトで森に戻り枯れ枝を集める。カラカラに乾いてるヤツだけだ。サニーはお嬢ちゃんを連れて先方の確認。グレイは、タグとガトルの痕跡を調査する。」

早速、森に戻ると枯れ枝を集めた。昼食のお湯を沸かすだけだろ
うから、そんなには必要ない。直ぐに両手出抱えられるだけの枝を集め、サラミスと皆の所に戻った。

「草原は遊牧民の縄張りだ。煙が出ないように昼食の準備をしと

け。」

カンザスさんの指示で焚火を始めた。確かに乾いてる小枝を燃やすと煙は余り出ない。

水筒の水をポットに入れて焚火の横に置く。マチルダさん、カンザスさん、サラミスも小さなポットや小鍋を焚火の周りに置いた。

グレイさんが戻ってきた。

「タグもガトルも草原方向から来たようだ。この場所から南に行ったところに両方の足跡が土に付いている。」

「タグに追われて暴走した・・・と考えられるか・・・」

確かに、ガトルよりタグの方が強そうだし、襲われたら普通逃げるだろう。

でも、どうして急にガトルを襲いだしたのかが気になるところだ。それなら、過去に何回かガトルの暴走があつたろうけど、ギルドのお姉さんは緊急招集は過去発生していない。って言っていた。

お湯が沸いて少し経った頃、サニーさんとミアちゃんが帰ってきた。

「草原の先にタグの巣穴の1つが有りました。出入り口も数箇所見つかりました。どうやら、今回の暴走はタグが原因ですね。」

「タグの巣別れが原因か・・・今までこんな近くまで巣穴を作ったことは聞いた事も無いが、巣穴の攻撃は俺達の仕事ではない。」

サニーさんの報告でカンザスさんは少し納得したみたいだ。あとで、図鑑を調べてみよう。

サニーさんがミアちゃんの頭をナデナデしながら「偉いよねー」って言っている。

何でも、巣穴周辺の監視をしているタグの接近を感知して逸早く撤退できたそうだ。ネコって勘が良いって聞いてたけど本当なんだなと思ってしまう話だ。

「食べながら、聞いてくれ。・・とりあえずは調査は終了した。森に少なくともガトルはいないようだ。これから帰ることになるが、泉の森の南側を通ることになる。野宿箇所は小川の近くだから、昨晩のようなタグの襲撃は無いとは思うが、用心にこしたことはない。」

カンザスさんの言葉をお茶で焼き固めた黒パンを流し込みながら聞く。

「草原地帯での長居は無用だ。食べたなら直ぐに出発するぞ。」

俺は頷きながら、喉に詰まった黒パンを慌ててお茶で流し込んだ。

今度はカンザスさんが先頭に立って森のはずれを歩いて行く。低木ばかりで、見通しは良いし、足を取られる事も無い。結構な速度で歩く事が出来る。

大きな石が前方に見えてきた。石のところから、森に入る。今度は薄暗く、途端に見通しが悪くなる。周囲の小さな音にも気を取られ思わず振り返ることを繰り返しながら歩いて行く。

しばらく進むと、小さな流れがあった。

リリック釣りをした流れに比べ、遙かに小さい流れではあるが、小川には違いない。

小川に沿って先に進む。

「この流れは森に入る前にあつた橋の小川から森の中で別れてるんだ。この流れに沿って進めば森から必ず出られるんだ。」

サラミスが教えてくれた。

俺達が歩いている所も、昨日歩いた所と違って少し踏み固められている。森の中で採取や討伐を行ったハンターが使ってるみたいだ。

少し進んで一休み。そして、更に進むと、この流れの本流とわかる小川があった。少し広くなった川原とその上に張り出した大きな木に洞が空いている。その周りには立木もなくポツリと独立して立っているのが印象的だ。

カンザスさんは此処で立止まって、俺達の方に振り向いた。

「今夜の野宿場所だ。ここは、森の中でも野宿の一等地だと思っている。普段なら襲われる可能性は殆ど無い。しかし、今が普段ではない事は昨夜のことで判ってる筈だ。」

俺達は早速昨晚の分担で作業を始めた。

薪の束を俺が持ち帰ったところには、サラミストグレイさんとはとくに帰ってきていた。

まだ日が高く、夕暮れにも間があることから、真直ぐな枝ぶりの木を切ると早速釣りを始める。

「此処でも釣りをするのか？・・・目標は8匹だ。頑張れよ！」

グレイさんの励ましとミアちゃんの監視の下で、小川の流れがゆるい所に仕掛けを投げ込んだ。

2、3匹釣れると、ミアちゃんが焚火に持っていく。

興味を持ったカンザスさんとサラミスが後でパイプをふかしながら見物してるのが気になるけど・・・

「しかし、簡単に釣ってるな。リリックは高級魚だぞ。これ専門に暮せるぞ！」

「おれにも、ちょっと貸してくれ！」

カンザスさんは関心してるし、サラミスは行動に移した。仕方なく釣竿を貸すと、直ぐに1匹を釣り上げた。

俺専用のものは別にあることだし・・・この仕掛けはサラミスに進呈することにした。

「ホントに貰って良いんだな。これで、家族にも食べさせる事が出来る。ありがとう！」

非常に喜んでいたが、釣針さえ出来れば簡単だとおもっただけ。でも、小さな釣針を作るのは以外と難しいのかも知れない。

焚火に戻ると、姉貴が鍋でシチューモドキを作っている。乾燥野菜とビーフジャーキーを千切ってお湯に入れ、焼き締めた黒パンを砕いて混ぜ合わせた物だ。

美味いかどうか非常に気になるが、スプーンで味見してる姿を見る限り、問題なさそうにも思える。

ミーアちゃんは塩をまぶしたリリックの串焼きが気になるようで、グレイさんが火加減を直すために串を移動する度に、その手を追っ
てみている。

サニーさんとマチルダさんも野菜や豆を煮て乾燥肉を入れたスープを作っているようだ。サラミスも自分で同じようなものを作っているが、最後にさっき釣ったばかりのリリックをぶつ切りにして鍋にいれた。

おいしそうな匂いが焚火の周りに立ち込める頃には、もうすっかりあたりは暗くなっていた。

早速、食事をとる。

姉貴が携帯食器に入れてくれたシチューは黒い・黒パンだしなと重いながらスプーンで食べてみると、以外に美味しい。今日はそれに1人1本のリリックの串焼きもある。

ミーアちゃんが一番大きいのを貰って大満足だ。

移動神官と始めての魔法

朝早く野宿した場所を発つて、小川沿いに森の中を進んでいる。この辺は危険な獣は普段からいないらしく、前を歩く皆の表情も明るく感じられる。

段々と先方が明るくなり、木立が疎らになる。どうやら泉の森を抜けたらしい。

低木と繁みが点在する荒地に流れる小川の傍を俺達は歩いて行く。

その歩みが突然止まる。急いで先に進むと・・・そこには沢山のガトルの足跡が残されていた。

「2日前に見つけたヤツだ。此処を渡ったのさ」

グレイさんが教えてくれた。良く見ると、対岸にも足跡が見える。

また歩き始める。そして、今日最初の休憩地点は、俺がリリック釣りをした淵の傍だった。

焚火をせずに、水だけを飲む。それと、1本のタバコだ。もちろん姉貴達はキャンディーを分けて食べている。

ちよつとの休みだが、大分疲れも取れた。

カンザスさんの合図で出発する。更に小川を辿って北に向かい、橋の袂に出る。そして、村への道を辿る。

村に着いたのは昼過ぎだ。早速、身近な宿で昼食を取る。

昼食と言っても、豆に小さな肉の入ったスープと黒パンだ。硬いパンを食べてたせいか、とてもやわらかく感じる。

食事が終わり、お茶を飲みながら長めの休息を取る。

ギルドに着くと、俺達をホールのテーブル席に座らせ、カンザスさんはカウンターの姉さんの所に行き、タグの換金部位を渡してよつた。おねえさんが吃驚してるところを見ると、滅多に見ることが出来ないものなのかも知れない。

更に、2、3お姉さんと話をして俺達のテーブルに戻ってきた。

「皆ご苦労だった。これで、俺からの依頼は終了だ。俺に依頼したのはギルドだが、俺達だけでは不可能と考えお前達を誘った。実際、あのタグを俺達だけで対処することは出来なかったから、この選択は正しいものと考えている。それで、俺への依頼金額とタグの交換部位の金額を合わせて、均等に分割する。ちよつと待っていてくれ。それと、サラミスとアキト達は今の内にレベルを確認しておけ。あれだけのタグを相手にしてるんだ。レベルが上っているはずだ。」

早速、カウンターの姉さんの所へ行くと、もう水晶球を置いて待っていてくれた。先にカンザスさんが手配していたみたいだ。

前と同じように、ギルドカードを渡して、水晶球を両手で持つ・これを4人で行うと、お姉さんが、箱からそろぞれのカードを渡してくれた。

テーブルに戻ってゆっくり見ようとしてたら、グレイさんに横取りされた。

「どれどれ・・・赤5つか・・・上つたな。それで、詳細は・・・体力5、魔法力3、魔法耐性5、敏捷性6、技能7、感性5、特殊技能：サフロナ体質、毒無効・・・なんだこりゃ？」

「何！・・・サフロの間違いではないのか？まして毒耐性など聞いた事も無いぞ」

カンザスさんが吃驚している。マチルダさんとサニーさんも同じだ。

グレイさんがミツキに手を出している。カードを見せるってことだよな。

姉貴はしょうがないなと言うような顔で、おずおずとカードをグレイさんの手にのせた。

「こっちは、・・赤5つか・・詳細は・・体力4、魔法力5、魔法耐性5、敏捷性5、技能7、感性4、特殊技能：サフロナ体質、毒無効・・アキト並にとんでもないな。」

もう何も言えないって感じで俺達を皆が見てる。

グレイさんは余り人には見せるなよ。って言いながらカードを返してくれた。

「先ず言っておく。赤のカードで4以上を持つ者は殆どいない。

黒のカードで6以上を持つ者も聞いた事がない。・・しかし、お前達はもうそれを持っている。そして容易に銀に上る事が出来るだろう。さらにだ、お前達に傷薬や毒消しは無用だ。それ程の特殊技能を持っている。だが、慢心することなく確実に進め。俺が言いたい事はそれだけだ。」

カンザスさんが静かに言った。

そんなに凄い事なのか良く判らないけど。

「今まで知らなかったの？」

「文字が読めなかったんです。ミケランさん達との依頼処理で少しづつ読めるようにはなりましたが・・」

マチルダさんの問いに姉貴が答える。それを聞いてそんなバカなっつて顔をマチルダさんはしてるけど。

「黒い髪・・黒い瞳・・それに私達の肌色と少し違っわね。あなた達、何処から来たの？」

サニーさんが聞いてきた。

姉貴は、俺の顔を見る。俺が頷くのを確認すると、ため息を1つ・

・そして、俺達の身の上話を始めた。

俺達の世界。それは平和で魔法ではなく科学が発達した世界。そんな世界で姉貴が望んだことは、俺と慎ましく暮す事。

何故かその願いを一族の崇拜した神が叶えてくれた。

そして、この世界にやってきた。生活手段を得るために最初の集落で長老が言つてたハンターになった。

ミアちゃんはその集落で長老に託された。

「そんな事があつたのか。しかし、慎ましくは難しいぞ。お前達ならば何処のギルドでも欲しがるはずだ。」

カンザスさんは心配してくれてるようだ。

「すみませんが、他言無用でお願いします。」

「判つてるつて。サラミスも良いな！」

「判つてるつて。それに、言つても誰も信じないよ。」

そんな話をしていると、お姉さんがテーブルにやってきた。

「カンザスさん。これが今回の依頼報酬とタグの代金です。」

テーブルの上には銀貨が6枚置かれ、次に銀貨23枚が追加された。

「約束通り、均等割りにする一人350Lで残りの100Lはガトル来襲で怪我を負つた連中に与えたいが良いか？」

「ああ、それでいい。」

グレイさんは声に出したが、俺達は頷くことで賛意を表した。

姉貴は俺達の分として、銀貨10枚と少し大きめの銅貨を5枚貰つたようだ。

俺達がギルド出ようとしたら、マチルダさんに呼び止められた。

「ちよつと待つて。多分近い内に銀レベルのハンター達がやって

くるわ。その時にもしかしたらだけど・・・移動神官がやってくるかも知れない。来たら知らせるようにギルドに伝えておくから、貴方達、神官から魔法を買いなさい。移動神官は低レベルの魔法のみ販売するけど黒レベルには絶対必要よ。」

「ご忠告、ありがとうございます。なんとか使えるように頑張ってみます。」

魔法って売ってるんだ。というのがその時の感想だった。でも、移動神官って聞きなれない言葉だけど。

何時もの宿に帰り、ひさしぶりの風呂を楽しんだ。

でも、この風呂のお湯をどうやってたら沸かせるかが未だに判らん。排水溝はあるんだけど・・・蛇口は無いんだよな。

次の日はミアちゃんの服を買って、村周辺の薬草採取で1日を過ごす。

今度の服は、薄革のベストんだけど頭に巻いたバンダナにクルキユルの羽を差してご機嫌なんだ。

雑貨屋さんでは例の魔法の袋を購入した。一番安い、3倍入って重さ変わらずがうたい文句の袋で、1個の値段は150L。大きさはレジ袋ぐらいだけど、物を入れた後で折りたたむ事もできるみたい。これを3人分購入した。

その夜、3人の分担を決める。姉貴は食料と水の予備。俺は調理用器具と食器。ミアちゃんは採取品や換金部位の一時保管。これに各自が水筒とお弁当を持つ。俺は食器以外にも釣り道具一式を袋に詰めた。

袋にこれらを入れてもかなり余裕がある。腰のバッグに袋を折りたたんで入れると、確かに前より軽く感じる。

2日程経ってギルドに出かけ、何時ものように採取依頼の依頼書

をカウンターに持ち込むと、お姉さんに「ちょっと待ってね。」って言われた。

「移動神官さんが来てるのよ。何年ぶりかしら・・・話は聞いてるわ。呼んでくるから、ホールのテーブルにいてね。」

そう言いながらも、依頼書にでかいハンコをペタンと押してくれた。

テーブル席に3人で座っていると、お姉さんが白いフード付きマントのフードを深く被った女性を連れてやってきた。

「移動神官のスピラニ様です。後はよろしく！」

お姉さんは簡単に紹介して帰ってしまった。

「スピラニです。御用とは、魔法の購入で宜しいのですね。」

姉貴の対面席に座ると、スピラニさんがフードを外した。エルフの女性だ。マチルダさんもエルフだったけど・・・エルフ族ってやはり美人が多いのか。

「出来れば購入したいのですが・・・私達はどんな魔法があつて、どんな魔法があるのか判りません。制約みたいなものは有るのでしょうか？」

「適正はあります。制約は・・・使用回数と考えて良いでしょう。」

適正外の魔法は使用回数が激減しますが、使えないことはありません。先ず、適正を見ましようか。」

スピラニさんは小さな水晶球を取り出した。

「魔法の基本は、土、水、火、風です。これ以外にも光がありますが、使用できる魔法は1つだけです。それでは、あなたから、掌にこの水晶球を乗せてください。」

姉貴は水晶球を受取り掌に載せてみる。すると、段々と水晶球の内側から光が溢れ出てくる。

「白・・・珍しい方ですね。エルフ以外で白を始めて見ました。では次の方。」

姉貴は俺に水晶球をハイ！って手渡してくれた。

掌に載せると、途端に水晶球の重さが増して光りが溢れ始める。

「貴方も白・・・では、お嬢ちゃんも乗せてみてください。」

水晶球は元の重さに戻っている。そつと摘んでミリアちゃんの掌に乗せる。

ミリアちゃんの光りは透き通る様な赤だった。

「白は全ての魔法に適正を持ちます。お嬢ちゃんの赤は火と風の属性です。どのような魔法をご希望ですか？」

「私はメルト。ミリアちゃんにはメル。アキトには敏捷性を上げる魔法が欲しいのですが。それと、夜を明るくする魔法ってありますか？」

「アクセルで敏捷性は向上できます。明かりであれば、光球のシヤインが良いでしょう。洞窟等でも重宝すると聞いています。」

「お値段は・・・」
「1つ150Lです。この金額が高いのか安いのかは判りませんが。」

「では、お願いします。」

姉貴が代金を支払うと、スピラニさんは白い服の袖から透き通るように白い腕を出した。

「1人づつ私の手を握ってください。」

姉貴は恐る恐るその手を握る。そして痺れたように一瞬体を震わせた。

「メルトとシャインの魔法式を体に構築しました。次は貴方ですね。」

痛いのか？と思いつつもその手を握る。スピラニさんが俺に微

笑んだその時、体に電撃が走る。

ウガ！って感じた。でも一瞬でそれは納まった。

「アクセル。確かに構築しました。最後はお嬢ちゃんですね。大丈夫ですよ。一瞬で終わります。」

ミーアちゃんは、かなり怖がっているみたいだ。少しづつ手が伸びていく。でも最後にガシ！って手を握られ、ウギャ！って叫ぶと体がピン！って立った。

「ちよっと、可哀相でしたが、これも必要な事です。確かにメルを構築しました。・・では、これで失礼します。」

スピラニさんはそう言うと言席を立ち、ギルドの2階に上って行った。

俺達は若干放心状態だ。これで、ホントに！って感じなんだけど・

「薬草採取で確かめます！」

姉貴の一言で、それもそうだと俺達は村を出て行った。

泉の森の小川沿い。何時もの薬草採取の場所だ。周りは荒地だし、人気も無い。

ここなら、魔法の練習に最適ということで、早速始める事にした。

「私からいくよ！・・ 【メルト！】」

姉貴の両手の間に30cmくらいの炎の球体が出来上がった。腕を振り上げ投げつける動作で姉貴の手を離れ遠くに飛んでいく。

ドドオン！と爆炎が上がった。マチルダさんより威力があるかもと思うような爆炎だ。

「私も・・ 【メル！】」

ミーアちゃんの右手から炎の球が発射され、20m位先にある藪に当たるとボン！って燃え上がった。

これで、遠距離攻撃もミーアちゃんは可能になったわけだ。一気にレベルを上げられるぞ。

最後は俺の番だけど・・・

【アクセル！】と叫んで見たが、何も起こらない。なんだ？って見てる俺に、姉貴が話しかけてきたが、男の人の声に聞える。プレイヤーの回転数を落として聞いているような感じだ・・・と言う事は、これがアクセルの効果？

少し動いてみる。自分では判らないが、姉貴達の驚いたような表情が見えていて面白い。

止め方を聞いていなかったけど、「解除！」って叫んだら、姉貴達の話声が元に戻った。

ちよっとした加速装置みたいで面白い。これだと片手剣でクルキユルの首を落とすのも可能じゃないかって思ってしまう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7642y/>

ユグドラシルの樹の下で

2011年12月11日14時35分発行